

# ドイツ滞在記

GERMANY  
2016.7.4  
-7.11



内田芳邦



日本語  
BILINGUAL  
英語



モニカの家



ミュンヘン  
宮廷ビール  
醸造所



日本語  
BILINGUAL  
英語



ミュンヘンの新市庁舎

ライン川 猫城



ローテンブルク 市壁

# 目次

---

## Contents (目次)

7月 4日 (月) Schweinfurt (シュヴァインフルト)

7月 5日 (火) Rothenburg (ローテンブルク)

7月 6日 (水) Würzburg (ヴェルツブルク)

7月 7日 (木) Nuremberg (ニュルンベルク)

7月 8日 (金) Iphofen (イプホーフエン) →Munich (ミュンヘン)

→Schongau (シヨーンガウ)

7月 9日 (土) Neuschwanstein (新白鳥城) →Bamberg (バンベルク)

7月 10日 (日) Cologne (ケルン)

7月 11日 (月) Frankfurt (フランクフルト) →帰国

## 7月4日（月）Schweinfurt（シュヴァインフルト）

---

私の乗るルフトハンザ航空のエアバス343は、9時40分に成田を発ち、現地時間の午後3時にドイツのフランクフルトに到着する。

ライン川の支流メイン川が流れるフランクフルトは、ドイツの金融とビジネスの中心地である。国内外の金融機関や企業がその拠点を置いている。ドイツの中央銀行たるドイツ連邦銀行だけでなく、EUの欧州中央銀行の所在地でもあり、大手銀行の本店もここにある。そして、ライン川の西方にはベルギーが位置し、首都ブリュッセルとフランクフルト間の所要時間は列車で3時間から4時間である。

3月22日午前、ブリュッセル空港と地下鉄で自爆テロがあり、34人が死亡し200人以上が負傷した。日本人も地下鉄のテロに巻き込まれ、1人が重傷を負い1人が軽いけがをした。その後、過激派組織「イスラム国」が犯行声明を出した。荷物検査前の空港内のことである。国際空港内には、世界各国から人々が自由に行き交いする。武装した警察官や兵士は配置されているが、一般市民に紛れ込んだテロリストを犯行前に摘発するのは至難の業だ。

ヨーロッパの中央部にあるベルギーの首都ブリュッセルには、EU（欧州連合）の本部が置かれ、北大西洋条約機構（NATO）の本部もここにある。

昨年11月の「パリ同時多発テロ」では、「イスラム国」の戦闘員による銃撃と爆弾で死者130人と負傷者300人以上を出した。今回のテロも、その一味の犯行で、拠点はブリュッセルにあったと報じられた。

フランスのオランド大統領は、テロを非難する声明の中で、「テロはベルギーを襲ったが、狙われたのはヨーロッパだ」と述べた。ヨーロッパがターゲットだとするならば、次はどこか？

九年前にアイルランドの語学学校でクラスメートだったドイツ人モニカが昨年、息子さんと一緒に日本ツアーに参加した。そのツアーで京都を訪れたとき、一日だけツアーから離れて私と一緒に京都観光をした。帰国したモニカからメールが届いた。

“Hi Yoshi, now I'm home well. A little tired, a little sad, because our wonderful journey to Japan has come to end.

Japan is beautiful, and the Japanese are so polite, so friendly and so clean. I like Japan very much..... I hope we will see us next year in Schweinfurt, we will go on outings, visit famous towns and you can take part in our life. Then you can visit some cities in Germany.”

「こんにちは、ヨシ。無事、家に着きました。少し疲れ、少し寂しい気持ちです、素晴らしい日本の旅が終わったのだから。日本は美しい国で、日本人はとても礼儀正しくフレンドリーで、そしてとても清潔です。私は日本がすっかり気に入りました。来年、シュヴァインフルトで、また会えるといいですね。一緒に近郊に出かけ、有名な街を訪れ、そして、あなたは私達の生活にも

触れることができます」

“Hi Monika. It's good that you got home well. I was very happy to see you again and Thomas. And I'm very glad to hear you had a good time with me in Kyoto.....I really want to go to Schweinfurt and other cities in Germany and see you next year. When is the good time in the year for you?”

「こんにちは、モニカ。無事、家に着いたそうで安心しました。あなたと再会でき、トーマスとも会えてうれしかったです。あなた達が京都で楽しかったと聞いてうれしいです。来年、ドイツへ行きます。シュヴァインフルトやいくつかの都市をまわり、あなたにまた会いたいです。あなたの都合はどうですか？」

“Now we can make plans for your tour to Germany next year. I'll invite you to come to my home. You can stay as long as you want. We can explore in Schweinfurt, in Würzburg, in other towns and we can travel to Munich. My sons will come and go with us, when it's possible for them.”

「来年のあなたのドイツ旅行の計画を立てます。私の家に来てください。好きなだけ泊まっていってください。シュヴァインフルト、ヴェルツブルク、そのほかの街に出かけられます。ミュンヘンにも旅行できます。私の息子たちが、都合をつけて一緒にまわってくれます」

彼女の息子さんは三人いて、それぞれ、フランクフルト、ミュンヘン、ニュルンベルク住んでいる。モニカの住むシュヴァインフルトは、フランクフルトから東へ列車で1時間半のところにあり、フランクフルトと同じように、市内をライン川の支流メイン川が流れている。フルト（furt）というのは、「浅瀬」という意味である。橋をつくるのがまだ技術的に難しかった時代、川を歩いて渡ることでできるフルト（「浅瀬」、「渡河点」）は軍事的にも交易の上でも重要な地であった。

フランクフルトとは、ゲルマン民族フランク族のフルトを意味する。シュヴァインフルトのシュヴァイン（Schwein）は「豚」である。古代から近代までヨーロッパでは、豚は牛や羊と同じく放牧されていた。豚の餌は牧草だけでない。11月になれば、農民たちは、豚を森に連れて行き、棒を使ってカシの木からバラバラとドングリの実を落として食べさせた。ドングリの実をたらふく食べさせて太らした豚を、翌12月には殺して塩漬けにし、ハム、ベーコン、ソーセージをつくって長い冬に備えたのだそうだ。

シュヴァインフルトが「豚のための浅瀬」という意味ならば、そこは昔、放牧の豚を渡河させる浅瀬だったのではないかと想像できる。シュヴァインフルトのはるか南方にオクゼンフルト（Ochsenfurt）と名のつく都市がある。オクゼンはOchse（オクセ「雄牛」）の複数形だから、こちらは牛を渡河させる浅瀬ということになる。ロンドン北西部の都市オックスフォード（Oxford）も同じ意味である。ドイツ語のfurtは英語ではfordとなる。

（えっ、豚も放牧してたんだ？）と驚くかもしれないが、現代でもスペインで、豚の放牧が行われている。「イベリコ豚」の最高級の「イベリコ・ベジョータ」は、放牧で育てる。原生林の中に放牧され、自由に走りまわってストレスもなく、ドングリをたっぷり食べて太ったこの高級品種の豚の味は格別だそうだ。

森の中を自由に走りまわる豚の群れ、ドングリを食べている豚の群れ。中世ヨーロッパの豊か

な森と河に想いを馳せていると、パリやブリュッセルのテロを忘れることができる。

私の不安をよそに、12時間のフライトを何事もなく終えたエアバスはフランクフルト空港に着陸した。予定の現地時間3時より30分早かった。さあ、次は急いで空港から離れなければならない。Immigration（入国審査）を通過し、Baggage claimで荷物を受取ってExit（出口）へ向かったときは3時をまわっていた。スーツケースを転がしながら出口のドアを抜けると、モニカが笑顔で手を振り出迎えてくれた。隣に立つのはパートナーのギュンターだ。

駐車場まで歩くと、モニカはバッグの中からキーを取り出した。テールランプが点滅した赤のフィアットのトランクを開けたギュンターは、私のスーツケースを積み込むと笑顔で私を振り返り、助手席を指し示した。見晴らしのよい助手席が客の席である。モニカがキーを差し込み、エンジンをかける。6変則のマニュアル車だ。

“Wow! A manual car.”

「へえー、マニュアルなんだ」

“Yes, is your car automatic?”

「そうだよ。あなたの車はオートマ？」

73歳のモニカだが、運転はアグレッシブだ。三車線の自動車専用道路に乗り入れると、ギアチェンジしながら加速し、走行車線と追越車線の車線変更を小刻みに繰り返す。私は少し不安になってきた。事故を起こした場合、一番危険なところが助手席である。私は、そっと足を伸ばして踏ん張ると前を向いたままモニカに声をかけた。

“Is this Autobahn?”

「ここ、アウトバーン？」

“Yes, it is.”

「そうだよ」

“There is no speed limit on Autobahn?”

「アウトバーンって、制限速度ないんだよね？」

“Not really. About half of it. The speed limit on the other half is 120 kilometers or 80 per hour.”

「そうでもないよ。制限速度のないのは半分くらいかな。後の半分は制限速度があって、時速120キロとか80キロ」

有名なドイツの「アウトバーン」は、「自動車専用道路」で日本の高速道路と異なり料金は取らない。アウトは英語のautoで「自動車」である。車のスピードに緊張して前を見つめて黙っている私に、顔を向けてモニカが訊く。

“Are you tired? Yoshi”

「疲れてるの？ ヨシ」

“No, no. I'm fine... A nice car.”

「ううん、疲れてないよ。・・・あー、いい車だね」

“This car is not new, six years old.”

「新車じゃないよ。6年落ち」

“How long will it take to get to your house?”

「家まで、どのくらいかかるの？」

“It will take over two hours.”

「2時間ちょいかな」

私が話しかけると、モニカはハンドルから右手を離し手振りを交えて喋る。私は気が気でない。

(あっ！危ないって、前を見て、ハンドルから手を放しちゃダメだってば)

片側三車線のアウトバーンの追越車線を疾走し、突然ぐいとハンドルを切って右の車線に移る。すると、後ろから来たベンツがビュンと左の追越車線を走り抜けていく。

“Wow, it's Benz.”

「わっ、ベンツだ」

“We call Mercedes, not Benz.”

「こちらでは、ベンツって言わないよ。メルセデスって言うの」

いったい、時速何キロくらい出ているのだろうか？でも、そういう質問はモニカの運転を咎めているようで、ちょっと訊きにくい。私は我慢した。やがて、自動車道が混雑し、モニカは速度をゆるめた。私はほっとして声をかけた。

“It's very busy. Do they go home from work?”

「混んでるね。仕事帰りかな？」

“Yes, it's the rush hour.”

「そうだよ、ラッシュアワー」

どれほど走っただろうか、モニカは一番右側の走行車線にクルマを寄せると減速し、ハンドルを右に切る。それからぐるりと回って別の自動車道に乗り入れる。「ラウンドアバウト」方式だから、信号もなく停止することなしに、次々と異なる自動車道路に乗り入れていく。

時間の経過とともに交通量も減り、道路両側の木立がとぎれて視界が開ける。見渡す限り、田園風景がゆるやかな起伏となって広がる。やがて、教会の尖塔の見え、小さな村の中を通過して、とうとうシュヴァインフルトの住宅地に入った。

住宅地の制限速度は30キロで、モニカの運転も、すっかりおとなしくなった。アウトバーンを突っ走った荒々しい運転と住宅地での穏やか運転の落差に、私は感心した。

しばらく走って石畳の坂道を上ると、モニカは、白いガレージの前で車を止めた。車から降りた私は、現地時間に合わせておいた腕時計に目をやった。5時半なのに、陽はまだ高く真昼のように明るい。

モニカの家は、道路から一段高い敷地に立っていた。真っ白な外壁と灰色にくすんだ茶色の屋根瓦、屋根には天窗が二つあって中央には石造りの煙突が突き出ている。胸ほどの高さの門柱には、紫の花びらの鉢植えが載せてある。芝に覆われた前庭の左側には、太い白樺が空に向かってまっすぐ伸びている。右側には灌木が植えられ、その前面にピンクのバラ、紫のラベンダー、

赤や黄色や紫の名も知らぬ花々が咲き乱れている。白壁を四角に切り取ったガラスの窓辺は、プランターから溢れんばかりの赤のゼラニウムで飾られている。

それにしても、白樺の高さには驚かされる。もちろん屋根より高い。隣家の庭にも高い杉が植わっている。日本の場合、電柱・電線が邪魔して、一般家庭の前庭に建物より高い木を植えることは難しい。しかし、ヨーロッパの住宅地では、電線が地中に埋設されていて電柱がない。だから、こんな高い木を庭に植えることが可能なのである。そして、街の景観もすっきりしている。

門扉を開けて石段をのぼり、木の玄関扉を開けて中へ入ると、正面にもうひとつ茶色の扉がある。

“Look... I like it.”

「ほら、あれ気に入っているの」

モニカが指さす扉の上の左右には、狐の絵のついた一对の小さな赤い提灯が掛けられている。そして、右手の壁の棚には招き猫が置いてある。

“Did you buy them in Japan?”

「日本で買ったの？」

“Yes, I bought them in Japan during my trip last year.”

「そう、去年の日本旅行で買ったの」

“Oh, really?”

「へえー、そうなんだ」

“Do you want to take your baggage in your room first?”

「まずは、荷物を部屋に運ぶ？」

右手を見ると、石の階段が左にぐるりとまわって二階にのびている。モニカに案内されて、私は荷物を二階の部屋に運んだ。

“I rent this room to a young man. He works for a company here but his house is far from here. So, he lives alone in this room and goes to work. He told me to let Yoshi use this room because he would be able to work at home by computer for a week. His family would be happy.”

「この部屋は人に貸しているの。その人は、この街の会社で働いているんだけど、家が遠いから、ここで一人暮らしをしているの。その彼がね、この部屋、ヨシに使ってもらっていいよ、一週間、コンピューターで在宅勤務できるから。家族も喜ぶし、だって」

意外な話だったので、すぐには理解できず聞き直した。モニカやその若者の気づかいに感謝したけれど、と同時に、ドイツの会社って、そんなにも融通が利くんだと感心した。

二階にはバスルームを挟んでベッドルームが二つと小部屋が一つある。私の部屋は、大きいほうのベッドルームで、手前に机と椅子、ソファがあり、左に曲がったスペースにベッドが置かれている。さらに奥には、ステンレスのシステムキッチンが備え付けられ冷蔵庫もある。

机の前の窓の先にはベランダがある。私は、ガラス扉を開けてベランダに出た。ベランダの手すりは、端から端まで赤のゼラニウムのプランターで飾られていて、そこから裏庭がすっかり見渡せる。芝生に覆われた裏庭は広い。



“Do you like this room?”

「どう、この部屋、気に入った？」

“Yes, I like it very much.”

「うん、とても」

私は、バッグから土産を取り出し、モニカに続いて一階に下りた。一階の住居は、玄関扉の内側にある二つ目の扉の先にある。つまり一階と二階はそれぞれ独立した住まいになっていて、玄関の扉の内側にある二つ目の扉の鍵と二階の各部屋の扉の鍵はみな異なるようだ。なるほど、うまくできている。階段は家の中にあるのだけれど、一階と二階は互いに独立している。一階が留守で二番目の扉がロックされていても、二階へは自由に出入できる。

一階の部屋に通ずる二番目の扉を開けると、正面にもう一つ扉がある。（あれっ？三つ目の扉だ）なんだかこんがらがってきたが、扉の手前の通路がぐるりと右側に曲がって、その先にも部屋がある。三番目の扉の右手に丸テーブルとハンガースタンドがある。モニカは、上着をハンガーに掛けた。丸テーブルの上には、分厚い本がページを開いたままさりげなく置いてある。なんたるバイブルかな。

“What book is this? The Bible?”

「これはなんの本、聖書？」

“This is a calendar of roses. There is a picture and a description of a rose for each day of the year. You know I like roses very much.”

「ううん、バラのカレンダーだよ。一年間、毎日、バラの写真と説明がついているの。私は、バラの花が大好きだからね」

モニカは右に足を進め、奥のバスルームに私を案内する。そして便器を指し示す。

“Look at the toilet. Japanese Washlet”

「ほら、日本のウォッシュレット」

ギュンターが私の顔をのぞき込んで笑った。

“She is proud of it.”

「自慢なんだよ」

京都で、luxurious Japanese toilet（豪勢な日本の便器）について訊かれたことを思いだした。

“Do you have such toilets in your house? With a warm seat and shower.”

「あなたの家にもこんなトイレがあるの？暖かい便座とシャワーのついた」

“Yes, I think most of people in Japan have it in their house. They are not so expensive.”

「うん、ある。日本人のほとんどがこんなんだよ。そんなに高価でもないよ」

その後メールが届いた。

“Today workmen are in my house. They are fitting out a Japanese Washlet. In Germany, it's very expensive but I liked it to have one. You will see it when you come.”

「今日、工事の人が家に来ているんだよ。日本のウォッシュレットを取り付けているの。ドイツではとても高価だけれど、欲しくなってね。今度来たとき見せるよ」

バスルームから三番目の扉の前に戻る。バスルーム手前の両サイドはそれぞれベッドルーム

になっている。モニカが三番目の扉を押し、私たちは中へ入った。

おしゃれなリビングが広がる。右手にテーブルとソファセット、左手に書棚、下段にはワイングラスの棚がある。手前の壁際にはオーディオセット、左手には大きな暖炉があって中には薪が入っている。暖炉の上には陶器の皿がいくつも飾られている。

“Very nice living. The inside of your house looks new.”

「素敵なリビングだね。家の中は新しいね」

“This house is 35 years old.”

「この家、築35年だよ」

リビングの左の部屋がダイニングで、その先に素敵なサンルームがある。まだ新しい。さすがに夏だから、天井のガラスにはブラインドが引いてある。私は、サンルームのテーブルの上に土産を並べた。

モニカには江戸以来の伝統工芸、浅草文庫の革の長財布、ギンターには栃木産ハンドメイドの牛革ベルトと近くのスーパーで買った甚平。二人用に妻の作ったそろいのコーヒーカップ。妻は、陶芸教室も開いているセミプロだから、ちゃんと代金を支払った。

“My wife made these coffee cups. She is an instructor in making a pottery.”

「これはね、私の奥さんが作ったコーヒーカップ。奥さんは、陶芸教室の先生なんだ」

“What is this?”

「これ何？」

ギンターがカップの横の平仮名を指さす。

“Oh, it's a letter. Ah...her initial.”

「あア、それ、文字だよ。奥さんのイニシャル」

“How do you pronounce?”

「なんて発音するの？」

“A”「あ」

三人の息子さん達にも、それぞれコーヒーカップと江戸団扇<sup>うちわ</sup>。歌舞伎の浮世絵が貼ってある。これは1本2000円した。アマゾンで仕入れた小浜の箸。成田空港で購入した大吟醸1本とグリコのアーモンドチョコレート大箱。ともかく八日間お世話になるのだから、土産などいくら持ってきてても足りない。

白いクロスのかけられた丸テーブルの上には燭台が置かれ、赤い口ウソクが立ててある。その上には、おしゃれな笠をかぶったライトが天井からぶら下がっている。

“What do you want to drink? Beer or wine?”

「飲み物は何にする？ビールそれともワイン？」

私たちは、まずビールを手にして「カンパイ」と日本語で乾杯した。夕飯の支度ができ、ギンターが裏庭を案内してくれた。樹々で囲われた広い芝の庭には様々な花が植わり、樹には鳥の巣箱も掛けてある。中を覗いてみたが空き家らしい。小さな池には睡蓮が可憐な赤い花をいくつも咲かせている。あじさいもある。

シーボルトは、日本から持ち込んだ「あじさい」に「お滝さん」の名をつけて「オタクサ」と呼んだ。

“This is the flower that Siebold brought in Europe from Japan. He named the flower ‘Otakusa’ after his girl’s name in Japan.”

「これは、シーボルトが日本からヨーロッパに持ち込んだ花だよ。彼は、日本での彼の女性の名をつけてオタクサと呼んだんだ」

“Really?” 「へえー」

モニカが私達を呼ぶ。

“Dinner is ready.”

「夕飯だよ！」

“We’re coming, Monika.”

「今いくよ、モニカ」

丸テーブルにスープポットが三つ、オニオンスープだった。スープを飲み干すと、ローストしたサーモンとハム、チーズ、トマトが運ばれ、小さなバスケットには三種類のパン、そしてバターにホームメイドのジャム。歓待された私はうれしくなった。

夕食後、私達は車に乗り込んで、シュヴァインフルトの市内見学に出かけた。腕時計を覗くと7時を過ぎていたが、外は十分明るい。

“It’s already seven but light outside. When is it getting dark?”

「もう7時だけれど外は明るいね。暗くなり始めるのはいつ頃？」

“About 9:45 or 10:00.”

「9時45分か、10時かな」

道路わきに車を止め、石畳の坂を下りると、ちょっとした広場に出た。広場も石畳で、左手にレンガ造りの教会がある。プロテスタントの聖ヨハネス教会で、15世紀半ばの建物だそうだ。教会を眺めたあと、ギュンターが右手を指し示す。木立があって、そこに胸像があった。ルターである。ルターは教会の正面を見つめている。

1517年、ヴィッテンベルク大学の聖書学教授マルティン・ルターがローマ教皇の免罪符販売に抗議した。『九十五カ条』である。これがいわゆる「宗教改革」の発端となってカトリック（旧教）とは別のキリスト教であるルター派やカルヴァン派などプロテスタント（新教）が生まれるのである。

1506年、教皇レオ10世は、バチカンのサン・ピエトロ大聖堂の大改築にとりかかり、その資金集めのため免罪符を大々的に販売し始めた。当時ドイツ帝国が分裂状態のうえ司教や大司教も領土化していて、教皇の力が及びやすかったため、ドイツは免罪符販売の最大の市場となった。それまでも、ドイツは、さまざまな形でローマ教会から金を吸いあげられていて、それだけにローマ教会や教皇に対する人々の反発も強かった。

免罪符というのは、日本の神社の「御札」みたいなものだが、これを買えば、どんな罪を犯し

ていても救済され天国へ行けると強引な販売が行われた。私は罪なんか犯していないから必要ない、というわけにはいかない。この場合の「罪」というのは、現代の我々の考える刑法上の「犯罪」だけでなく、もっと幅広く宗教上・道徳上の罪も含まれるのである。倫理上の墮落も罪なのであって、キリスト教の教義からすれば、もともと人間は罪深いのである。

真面目な神学者であるルターは、安易に救済を約束する免罪符が人々を宗教的な墮落に導くことを恐れて抗議した。しかし、初めから教皇権やカトリック教会そのものを否定しようとしたわけではない。

一方、1450年頃までには、フランクフルトの南西マインツの職人グーテンベルクによって活版印刷が発明されており、神学上の批判としてラテン語で書かれていたルターの主張『九十五カ条』は、ドイツ語に訳され印刷されて、たちまち全国に広がった。

事態を重く受けとめたローマ教会は、ルターを告発する。1519年、ライプチヒで公開討論会に臨んだルターは、相手神学者の誘導尋問に引っ掛かり「教皇権」を否定してしまう。「教皇の権限」は、キリスト自身から委ねられたもので、すべてのキリスト教信者は従わなければならないとする従来 of 教えに対して、その根拠はない、初代のローマ教会の権限は他の教会に及んでいないと反論したのである。そして、論争を経ることによって、ルターは、信仰において最高の権威は聖書だけであるという考えに到達したのである。

ルターの主張は「異端」とされ、教皇から「破門」された。つまり、キリスト教信者とは認めない、ということである。ひと昔前なら、これは即アウトで火刑に処されていただろうが、時代が違った。教皇の権力に反発する諸侯や自由都市、学生や農民など多くの人々がルターを支持した。

破門され追放されたルターは、ザクソン侯フリードリヒによって、ワルトブルク城に保護され、そこで聖書のドイツ語訳に取りかかった。それまで、ラテン語で書かれた聖書を一般の人々は読むことができず、教会聖職者の言いなりであったが、ルターの翻訳によって人々は聖書を読むことができるようになるのである。そしてまた、ルターのドイツ語訳聖書が広く読まれることによって、そこに書かれている言語が近代ドイツ語の基になったとも言われている。

ルターは、北部ドイツ語と南部ドイツ語の中から美しい言葉を選びながら翻訳していったが、それはルターが生まれ活動した地域が中部ドイツであり、北部と南部の双方の言語が交わるころであったことから可能になったと指摘される。

“You are Catholic, right? What do Catholic people think about Luther? Do Catholic people respect him?”

「あなたはカトリック教徒だよね。カトリックの人達って、ルターのことをどのように考えているのかな？敬意を払っているの？」

“Catholic people respect Luther and the Protestant church. Sometimes there are ‘Okumenische’ church services. That means Protestant and Catholic people have their church services together. I like these church services and I hope this development will go on.”

「カトリックの人々はルターのことプロテスタントの教会にも敬意を払ってるよ。ときどき、

カトリックとプロテスタントが協力して一緒に礼拝することがある。私は、こういう礼拝が好きだし、こういう協力がどんどん発展していったら欲しいと思ってる」

私たちは歩いて石畳のマルクト広場（Markt-platz）に入った。前方には、優美な姿の市庁舎が見える。夕日を浴びた切妻の屋根が<sup>あかね</sup>茜色に輝いている。手前には噴水がある。噴水の中央の像は、シュヴァインフルトに生まれた詩人リュッケルトだそうだ。

マルクトというのは英語のマーケットだが、石畳の広場はきれいでゴミなどは見当たらない。モニカがパンフレットを見ながら説明してくれた。

“This is the most significant and beautiful building in the city. It was built in the years from 1570 to 1572. It is regarded as one of the most important secular Renaissance buildings in Southern Germany.”

「これは、市内で最も重要で最も美しい建物です。1570年から72年に建てられました。南ドイツにおける最も重要な世俗のルネサンス様式建築の一つだと評価されています」

私は歩み寄って市庁舎の前に立ち、夕焼けに染まる尖塔の上部とその奥の切妻屋根を眺めた。素晴らしい。屋根の上には、屋根窓が縦四つずつ左右に二列配置してある。ともかく、私にとって、初めて見る建築様式だ。

三階建ての建物は前後に三重構造になっている。奥の切妻屋根の建物の前に、幅半分ほどの切妻屋根の建物が向きを90度変えて重なり、その二階には手すりのついたバルコニーが張り出している。バルコニーから上に六角柱を縦半分に割った形状の尖塔が前面に組み込んであるというか、張り出している。

壁は黄色の勝る黄土色、屋根はグレー、尖塔と窓枠はチョコレート色。尖塔の最上部には鐘、その下に大時計が掛けてある。さらに下に目をやると、ドイツ帝国の鷲の紋章が据えてあり、バルコニーの手すりの下には、いくつかの紋章が貼りつけてある。

1570年から72年に建てられた市庁舎は、災害や戦争にもかかわらず幾世紀を生き延びた。ボールベアリングの工場があって軍需産業の一つの拠点であったシュヴァインフルトは、第二次世界大戦末期に、重点的に爆撃され大きな被害を受けた。しかし、奇蹟的に市庁舎は無事だったという。

このマルクト広場では、今でも市が開かれ、農家が集まり野菜や果物を売る。市は火曜から金曜日までは午前11時から午後6時半まで、土曜は午前7時から午後2時まで開かれる。

私たちは、石畳の路をさらに歩いてメイン川に向かった。路地の突き当たる石段を登ると、そこは城壁の内側だった。ギュンターが私を振り返る。

“This is a part of city wall. I played often here when I was a child. The police scolded us and reported our parents. Do you have city wall in Japan?”

「ここは市壁の一部だよ。子どもの頃、よくここで遊んだものだ。おまわりさんに叱られてね。親にも連絡されたよ。日本に市壁はあるのかい？」

中世のヨーロッパで、都市市民（手工業者と商人）の経済力が増していくと、封建領主や教会などの支配から脱し、市民自身の手で市政を運営する都市が現れた。これを「自由都市」と呼

ぶが、そういう都市は街全体を城壁で囲った。この城壁をcity wall（市壁）という。

日本の中世の自由都市といえば堺が思い浮かぶ。堀はあったが、城壁はどうだろう？いずれにせよ、日本の中世の場合、ドイツのような自由都市の発達は、堺や博多などの一時期を除けばみられない。自由都市って英語で何というんだらう。free city かな、それとも independent city かな？

“In the Middle Ages in Japan, independent cities didn't developed. And there was no war from the beginning of 17 century to 1868 for more than 200 years in Japan.”

「日本の中世には、自由都市は発展しなかったんだ。それに、17世紀初期から1868年までの200年以上の間、日本に戦争はなかったんだよ」

”No war for more than 200 years?”

「200年以上の間、戦争がなかった？」

ギンターが、少し驚いた様子で、おうむ返しにつぶやいたので、私は気分をよくして”Yes!”と力を込めた。しかし、17世紀以降は近世といって中世ではない。まあ、いいか。

それから、私たちはメイン川の河原を歩いた。ようやくあたりが暗くなってきた。腕時計に目を見ると10時をまわっている。モニカが私を振り返る。

“I can remember I was walking on the riverside in Kyoto. What's the name of the river?”

「京都の河原を歩いたことを思いだすなあ。何んていう川だった？」

“It's Kamo River. You were surprised that the river had a low water level.”

「鴨川だよ。水量が少なくて驚いてたね」

メイン川は、水量が多く流れも緩やかで、大きな船が停泊している。ライン川やドナウ川、それらの支流、ドイツの川は、みな水量が多く流れもゆるやかで、昔から重要な内陸水路として発達してきた。

“Look!” 「ほら、見て」と、モニカが指さす。暗くなった、草むらに茶色のウサギがいる。

“Is it a wild rabbit?”

「野ウサギなの？」

歩いて近寄り、目を凝らして草むらを見ると、いるいる。野ウサギが、あちこちで草を食<sup>は</sup>んでいる。

市内見学を終えて帰宅すると10時をまわっていた。一日の締めは、一杯のグラス・オブ・ワインだった。

“Which do you like better red wine or white?”

「赤と白のどちらがいい？」

“Well, red wine, please.”

「そうだなあ、じゃあ赤」

フランケンワインを味わいながら、私は、シュヴァインフルトの意味を訊いてみた。

“Furt” means ‘ford’ in English. It's a place where a river is not deep, so you can walk across it. It was a very important place in strategy and trade when it was difficult to build bridges in the past.”

「フルトは英語のフォードだよ。歩いて渡れる川の浅瀬。昔、まだ橋を造るのが難しかった頃、浅瀬は、戦略上でも交易の上でもとても重要だったんだよね」

“Yes, it was.”

「うん、そう」

“Frankfurt means the ford of the Frank tribe. Schwein means pigs. One of explanations of the origin of Schweinfurt is that people pastured pigs in the past and they took pigs across the river Main there. Is it right?”

「フランクフルトはフランク族の浅瀬という意味だよ。シュヴァインは豚だから、シュヴァインフルトの名の由来について、豚の放牧で豚を渡河させたところだという説があるけれど、それ本当？」

モニカが笑う。

“Yes, you are right. People in Schweinfurt believe that explanation about the name of Schweinfurt. But the old name was ‘Suinurde’, that means town on marsh.”

「ええ、そうだよ。シュヴァインフルトの人々はその話を信じているよ。だけど昔の名はズイー・・・とって沼地の街という意味だよ」

“Oh, really? I read in a book about it and there is a city named Ochsenfurt in the south of Schweinfurt. It means Oxford.”

「えっ、そうなの？本で読んだんだけど、シュヴァインフルトの南方にオクゼンフルトという名の都市があって、そこは牛を渡河させる浅瀬だって」

“That’s right but unfortunately about Schweinfurt no.”

「オクゼンフルトについてはその通り。だけど残念ながら、シュヴァインフルトについては違うんだよ」

そうか、牛は渡河させたが、豚は無理か、あの短い足では溺れるわな。私の脳裏を、川に溺れ集団で流される豚の姿がよぎった。そういえば、笛を吹いてネズミを川に誘導し溺死させたネズミ取りの話があったが、あれもドイツの童話だ。

“Thank you for everything today. What time is breakfast tomorrow? Good night!”

「今日は、何もかもありがとう。明日の朝食時間は何時？・・・おやすみなさい」

私は、挨拶をして二階の部屋に戻った。もう11時だ。今日は長い一日だった。

（成田のホテルで起きたのが6時だから、ええと、6時間（午前）+11時間（午後）+7時間（時差）で24時間まるまる起きているわけだ。シャワーは明朝にして、おやすみ！



モニカ宅



シュヴァインフルト マルクト広場

裏庭



市庁舎



7月5日（火） **Rothenburg**（ローテンブルク）

---

目覚ましは6時半にセットしたが、30分前に目覚める。シャワーを浴び、髭をそる。朝食は9時からだが、8時半には階段を下りてリビングに入る。リビングの左側の部屋がダイニングで、その左手の一部屋がキッチンだ。モニカが朝食の支度をしている。私は声をかけた。

“Good morning.”

「おはよう」

“Good morning, Yoshi! Did you sleep well last night?”

「おはよう、ヨシ、昨夜はよく寝られた？」

“I woke up at 3:00 and slept again. It's a wonderful day, isn't it?”

「朝3時に目が覚めたけれど、それからまた寝たよ。今日は、いい天気だね」

朝の挨拶を終えると、私は玄関まで戻り扉を開けて前庭に出た。バラの花にミツバチが群がっている。日中の気温は28度くらいまで上昇するそうだが、日本の夏と違って空気が乾いているから、さわやかだ。

新聞を手の中に戻ろうとしたが玄関の扉が開かない。（あれ、変だな）、どうやら、中からは開けられるが、外へ出てドアを閉めると自動的にロックされるらしい。ホテルの部屋と同じ形式だ。しかたがないので、ブザーを押してインターフォンに向かって言った。

“I locked myself out.”

「閉め出されちゃった」

ギュンターも起きてきて、9時に朝食が始まった。オレンジジュースとコーヒー。私には、日本茶の入ったティーポットも用意してある。3種類のハムと3種類のチーズ。3種類のパン。エッグカップに入った茹で卵には毛糸で編んだ帽子がかぶせてある。目の前に、見たことのないステンレスの道具がある。

“What's this for?”

「これ何？」

“It's an egg cracker. To use it like this.”

「タマゴ割り器だよ。こうやって使うんだ」

と言って、ギュンターはエッグカップに入ったタマゴの帽子をとり、その上に道具をかぶせた。なるほどタマゴの帽子の形をしている。その帽子の上に球があり、そこに棒が突き刺っている。帽子も球も棒も全てステンレス製だ。ギュンターは球を上を持ち上げると手を放した。ストンと落下した球がステンレスの帽子に衝突する。道具を外すと卵の殻にひびが入っている。それから、ギュンターはそのひびにスプーンを突き刺して上部の殻を外すと、卵をほじって食べた。（へえー）、私も真似をしてみたら、衝撃の具合がよかったらしく、上部の殻だけがすっと外れた。（なるほど、これはいい）

“Great! Is it a German traditional tool?”

「すごい！これってドイツの伝統的な道具なの？」

“No, no. I found and bought it in a shop.”

「いやいや、そうじゃないよ。店で見つけて買ってきたんだ」

“I’ll buy it for my grandchildren. They would be glad.”

「私も、これ買おう。孫が喜びそうだ」

朝食をすませると、私は使用した食器をもってキッチンに入り、シンクの横に載せた。それにしてもキッチンが広い。一部屋まるごとキッチンで、シンク、クッキング・ヒーター、オーブン、食洗器などがコの字型の台の上や下に収まっていて、フロアが広い。ダイニングに戻りながら、キッチンの隣の部屋をちらっと覗くと、洗濯機と大きなアイロン台がおいてあった。

朝食後、モニカの運転で街に出かけた。モニカは毎週火曜日に英会話教室に通っている。そこに私も参加することになっているのだ。事前のメールで知らされていた。

“Next morning after breakfast, I would like to take you with me to the English class of my conversation course. My classmates are very interested to meet you, because I told about you in 2007, when I came from Dublin. Our teacher and some of the class members are still in this conversation course like me. It would be nice, if you can tell something about your life in Japan. I think, they will ask you some questions.”

「翌朝、食事のあと、私の英会話クラスにあなたを連れて行きます。クラスメートはあなたに会うことを、とても興味深く楽しみにしています。2007年、ダブリンから帰ったとき、あなたのことをクラスで話したのよ。先生はその時のままだし、生徒の数人もその時からこのクラスにいるの。日本の生活のことを、みんなに話してくれるといいな。みんな、あなたにいろいろ質問すると思うよ」

（えっ、うそー？）メールを読んだ私は不安になったが、まあ何とかなるだろうと考えるほかなかった。

教室に入ると、ホワイトボードに向かってなにやら書いていた女の先生が、手を止め、笑顔で私たちに歩み寄ると手を差し出した。“Nice to see you!” 私は先生と握手をした。

長机を並べて長方形がつくってある。生徒は10人ほどで男性2人、みな中高年だ。最初、私は先生の向かいのモニカの席の横に座った。先生は、ホワイトボードに書いた文章をもとにシェイクスピアについて話し、生徒との間に質疑があった。30分ほどすると、立ち上がって私を紹介した。

“Well, we are having a guest from Japan today. Yoshi, please, come over here and sit next to me.”

「さて、今日は日本からお客さんがいます。ヨシ、こちらへ来て私の隣に掛けてください」

私は立ち上がると反対側にまわり先生の隣の椅子に掛けた。

“Please, introduce yourself”

「自己紹介してくれますか」

私は、立ち上がって挨拶し、思いつくまま喋りはじめた。

“I was a high school teacher. I retired nine years ago then I went to Ireland to take English talk and travel course. I met Monika there. We were classmates. Last year she traveled in Japan and saw me

again in Kyoto. Now she invited me in Germany. This is my first time to Germany.”

「私は高校の教員でした。9年前に退職してアイルランドに行き、英会話と旅行というコースをとりました。そこでモニカに出会ったのです。私達はクラスメートでした。昨年、彼女が日本を旅行して、京都で私と再会したのです。今度は、私がドイツに招待されました。ドイツは、これが初めてです」

“Thank you, Yoshi.” 「ありがとう」 と先生は拍手すると生徒を見まわした。

“Any question?”

「なにか質問がありますか？」

斜め前に座っていた女性が手を上げた。

“Do you like sushi?”

「寿司は好きですか？」

(はあ？何それ)、拍子抜けするような最初の質問に私はほっとした。まさか、日本人は毎日、スシや魚ばかり食べていると思ってないよね。肉も食べるよ。

“Yes, I love it but I don't eat it every day. I like meat too.”

「ええ、大好きです。でも毎日食べているわけではありません。肉も好きですよ」

“Where is your hometown in Japan?”

「あなたの住んでいる街は、日本のどこですか？」

“My hometown is located in the middle between Tokyo and Osaka. A small city. The population is 80,000.”

「私が住んでいる街は、東京と大阪の真ん中になります。小さな市で人口8万です」

“It's not small. Schweinfurt has a population of 55,000.”

「小さくないよ。シュヴァインフルトの人口は5万5千だよ」

“What kind of music do Japanese people like?”

「日本人達って、どんな音楽が好きですか？」

“Some people like pop music and some people like Jazz or classical music. Many people in Japan like Beethoven's Symphonies.”

「ポップミュージックの好きな人もいれば、ジャズやクラシックの好きな人もいます。多くの人にはベートーベンの交響曲が好きです」

私は、話題を広げた。ともかく知ってることを喋ろう、と決めた。

“Beethoven's Symphony No 9 is performed at the end of year all over Japan. It has been an annual event in Japan. There are a lot of non-professional choruses. The chorus dream of singing with a professional full orchestra that performs No 9. If they take part in it, they would buy a lot of tickets for their family and friends. Usually members of orchestra are not paid very well. So, the event started to pay them better at the end of year.”

「交響曲第九番は、年末、日本中で演奏されます。それは、もう年中行事になっています。全国にアマチアのコーラス団が沢山あって、プロのフルオーケストラが演奏する第九で合唱を歌うのが夢なんです。それに参加すれば、コーラスのメンバーは。家族や友人のためにチケットをたく

さん買います。給料のあまりよくないオーケストラのメンバーに、年末、少しでも良い給料を払うために始まったイベントなんです」

みんな静かに聞いている。年配の女性が手を挙げ、したり顔で質問する。

“The Prince has an only daughter. Will she be Emperor?”

「皇太子の子供はひとり娘だけど、彼女は天皇になれるのですか？」

うーん、ちょっと難しいな。まあ、賛否両論あると言っておこう。

“Some people agree and others disagree with the idea of female Emperor.”

「女性の天皇という考え方には賛否両論あります」

female Emperor というのは変かな？まあいいか。

二人の男性のうちの一人在手を挙げた。

“What is the second foreign language in Japan? Chinese?”

「第二外国語は何ですか？中国語ですか？」

“University students are required to learn English and another foreign language. They can choose what they learn as the second foreign language. German, French, Spanish, Chinese and....other languages.”

「大学生は英語の他に、もう一つ外国語を学ばなければなりません。第二外国語として何を学ぶか選択します。ドイツ語、フランス語、スペイン語 中国語などです」

“Is German popular?”

「ドイツ語は人気ありますか？」

“I think so. There are many German words in Japanese words.”

「あると思います。日本語の中にはドイツ語が沢山あります」

私は、話をドイツからの借用語に振り、用意してきたメモ用紙を取り出した。

Allergie (アレルギー) Kapsel (カプセル) Virus (ウィルス) Vakzin (ワクチン) Gaze (ガーゼ) Karte (カルテ) Neurose (ノイローゼ) Alzheimer (アルツハイマー) Adrenalin (アドレナリン) Hysterie (ヒステリー) Gips (ギプス) Kartell (カルテル) Aspirin (アスピリン) Energie (エネルギー)

隣に座る先生は、そのメモ用紙を手にして、へーえと驚く。

“Wow, so many...Oh, Hysterie?”

「わあ、多いね。へえ、ヒステリーもだ」

“There are a lot of medicine words. German economy developed remarkably from the end of 19 century to the beginning of 20 century. German led the world in the medicine, chemical and natural science study.”

「医学用語が多いですね。19世紀終わりから20世紀初めにかけて、ドイツ経済は目覚ましい発展を遂げました。医学や化学、そして自然科学の分野で世界をリードしたのです」

私は、準備してきた文章を思い起こしながら、ドイツをヨイショした。予期せぬ話題で困惑しないためには、こちらが用意した話題に持ち込めばよい。

“In that time, the first national university in Japan was founded in Tokyo. Many Japanese professors and students came to Germany to study.”

「その当時、最初の国立大学が東京に創立されました。それで、多くの教授や生徒がドイツに留学したのです」

生徒たちは、私の話に関心をもち、先生がときおり、the first national university? などと合いの手を入れてくれる。

“One of the students was a doctor. He studied in Germany for four years. The famous king who had built a beautiful castle died in the lake when the Japanese doctor stayed in Munich. After he came to Japan, he wrote a novel based on the accident.”

「留学生の一人に医者が出てドイツで四年間学びました。彼がミュンヘンにいたとき美しい城を建てた有名な国王が湖で亡くなりました。彼は帰国してからその事故を基に小説を書きました」

“What’s the name of the doctor and the novel?”

「その医者の名前と小説の名前は何か？」

“Ogai Mori and Utakatanoki”

「医者は森鷗外で、小説は『うたかたの記』といいます」

モニカの隣の生徒が手を上げた。

“The castle is Neuschwanstein. And Ludwig the second.”

「その城は新白鳥城で、国王はルートヴィヒ二世ですね」

“Yes, it is, Monika will take me to his castle on Saturday.”

「そうです。モニカが、土曜日に、私をそこへ連れて行ってくれます」

すかさず、モニカがみんなに言った。

“We are going to Siebold Museum tomorrow.”

「私達は、明日、シーボルト・ミュージアムに行きます」

私はシーボルトに話題を振った。

“He was born in Würzburg and went to university there. High school students in Japan study about him. He was a doctor and came to Japan in the early 19 century. He taught western medicine to Japanese doctors. He influenced a lot of Japanese doctors and scholars.”

「シーボルトはヴェルツブルクに生まれ、そこの大学へ通いました。日本の高校生は、彼について学びます。彼は、医者で、19世紀前半に日本にやってきました。彼は日本の医者に西洋医学を教えました。彼は、多くの日本人医者や学者に大きな影響を与えたのです」

“Oh, really?”

「へえー、そうなんだ」、生徒も先生も私の話に関心を持っている。

“He had a daughter with a Japanese girl. His daughter was the first female doctor in Japan. She started her clinic in Tokyo. In those day there was no women in doctors in Japan.”

「日本女性との間に娘ができてね、その娘は日本初の女医になって、東京で医院を開きました。当時、日本には、女性の医者はいなかったのです」

シーボルトの娘、楠本イネの母滝は長崎の丸山遊郭の遊女だったが、1823年、長崎出島のオランダ商館医としてやってきたシーボルトに見そめられ、彼の専属というか現地妻のような存在になった。シーボルトは27歳、滝17歳であった。

シーボルトが、長崎奉行の許可を得て、出島の外で医療や教育を行うと、やがて、その豊かな学識やすぐれた医療技術が評判となる。すると、多くの医師や蘭学者が彼のもとへ集まり、教を請うようになった。そして、彼らは、シーボルトのための学塾を創設するよう奔走し、長崎奉行に働きかけた。のち、幕府の許可がおりると、長崎郊外の鳴滝に家屋を購入し、それを増改築して「鳴滝塾」とした。

こうして全国から集まった若い医者や蘭学者たちが鳴滝塾に寄宿し、シーボルトの門人となって、医療や博物学を学んだ。1826年の江戸参府以降は、江戸の学者たちとの交流も広がっていた。

1828年、オランダ商館との5年の契約が終わり、帰国する直前いわゆる「シーボルト事件」が起こった。帰国は許されたが、シーボルトは国外追放・再入国禁止となった。娘イネは、この前年に誕生している。シーボルトからイネの養育を依頼された門人たちは、シーボルトとの約束を果たし、イネの教育に便宜をはかって医学を学ばせた。こうして、日本最初の女性産科医が誕生したのである。

左手の女性が手を挙げた。

“What’s the difference between Temples and Shrines?”

「寺と神社の違いは何ですか？」

“Temples are for Buddhism and Shrines are Shinto. I think Shinto is more like Japanese traditional culture than a religion. Most people have a Buddhist funeral ceremony when they die. People visit shrines to pray for the safety and good health of their family.”

「寺は仏教で神社が神道です。神道は宗教というより日本の伝統文化だといえると思います。ほとんどの人が葬儀は仏教で行います。神社をお参りするの、自分や家族の安全や健康を祈るためです」

先とは別の男性が手を挙げた。

“What do you think radioactive contamination from the nuclear power accident in Fukushima? Are you afraid of it?”

「福島原発事故による放射能汚染をどう思いますか？あなたは恐れていますか」

“Well, I am not afraid of it so much....My home town is far from Fukushima.”

「そうですね。私はそんなに恐れていません。・・・私の住んでいる市は福島から遠いです」

“It’s still dangerous even though it is far from there.”

「遠く離れていたって、放射能汚染は危険ではないですか？」

(ん、「福島から遠い」ではまずいな。日本人はノ一天気だと思われる)

福島原発の事故に対してドイツ人は過敏に反応して、脱原発を決定した。1986年のチェルノブイリ原発事故の影響が大きいと言われている。

“A lot of people are still fighting to remove the contamination. And the Japanese government has decided to decrease nuclear reactors and increase alternative energy such as solar energy, wind power something like that.”

「多くの人が、今なお汚染除去に取り組んでいます。日本政府は、原子炉を減らして、代替エネルギーを増やすよう決定しました。太陽光発電とか風力発電などです」

「なんだか、政治家の答弁みたいだが、しかたがない。福島原発の事故について、みんなが納得できる答などない。まして、ドイツ人は絶対納得しないだろう。」

「右手奥の比較的若い女性が手を挙げ、遠慮がちに質問する。」

“I’ve been to Kobe. Is Kobe beef the best in Japan?”

「私は神戸に行ったことがあります。神戸牛は日本一美味しいですか？」

“Kobe beef is very good. But some people say that Matsusaka beef is better. They sometimes make cows drink beer.”

「神戸牛はとてもおいしいですが、人によっては、松坂牛の方がもっとおいしいと言います。牛にビールを飲ませるのですよ」

“What’s the name? Matu...?”

「何という名前？ マツ・・・」

“MATUSAKA”

最後に、私はジョークをひとつとばすことにした。

“English conversation class is very popular in Japan too. English is becoming more and more common language in the world. So I have a question. What do you call someone who speaks two languages?”

「英会話教室は日本でも盛んです。英語は、ますます世界共通語になってきていますね。それで、ひとつ質問があります。二か国語を話す人を何と言いますか？」

隣の先生が答える。

“Bilingual” 「バイリンガル」

“What do you call someone who speaks three languages?”

「三か国語を話す人は？」

“Trilingual” 「トライリンガル」

“What do you call someone who speaks one language?”

「それでは、一か国語しか話さない人は何というのですか？」

“....?”

“American” 「アメリカ人」

「アハハ」

先生は大笑いしたが、生徒には、あまり受けなかったのはなぜだろう。

終了時刻が来て、先生は立ち上がった。

“Now, it’s time. Thank you Yoshi. Everybody, let’s give Yoshi a big hand.”

「さて、時間が来ました。ありがとうヨシ。皆さんヨシに拍手しましょう」

先生は、私の方を向いて拍手すると手を差し出した。私達は握手した。一時間無事に終えることができたので、私はほっとした。

“What do you say for thanks and good-bye in Japanese?”

「サンキューとグッバイは日本語で何というの？」

“ARIGATOU and SAYONARA”

みんなが、口々に「アリガトウ、アリガトウ、サヨナラ、サヨナラ」と拍手をしてくれた。私は頭を下げた。「どういたしまして、You are welcome.」

エレベーターを降り、ビルから出て車に乗ると、モニカが言った。

“You did it very well, Yoshi. You were talking all the time.”

「よかったよ、ヨシ。あなた、ずっと喋ってたね」

“Thank you.” やれやれ、私は一仕事終わったような気分だった。

帰宅し昼食をすますと、ギンターの運転で私たちはローテンプルクをめざした。ギンターの運転は、とても攻撃的で、助手席の私は、身を固くして心の中で悲鳴をあげる。ギアを切り替え追い越し車線へ乗り入れ加速すると、自動車道の両側の樹林が窓の後ろへビュンビュンぶっ飛んでいく。

私は、思い切って訊いてみた。

“You drive very well. So...what’s our speed? How many kilometers per hour are we running?”

「運転うまいね・・・スピードはどのくらい？時速何キロで走ってるの？」

“Now? ... 150 kilos.”

「今かい？・・・150キロ」

追越車線をぶっとばすギンター。車は、みるみる前方の車に接近する。車間距離がない。

(あー、追突する)

寸前のところで、前方の車がハンドルを右に切って走行車線に移動する。ギンターは、ギアを切り替えてさらに加速する。しばらく走って走行車線のトラックを抜き去るとグイッとハンドルを切ってトラックの前に入る。すると左の追い越し車線をベンツやBMWがぶっとばしていく。

(うわあ、まるでカーレースだ。怖えー！)

ところどころ工事中で車線が減少し 80 キロ制限になる。そして渋滞にぶつかる。渋滞の中のノロノロ運転が、こんなにもうれしかったことは、今だかつて経験したことがない。

ローテンプルク市街に入ると前方に城壁が現れた。ギンターが指さした。

“That’s the city wall. We’re going there later.”

「市壁だよ。後で、あそこへ行くよ」

中世の面影をほぼ完璧に残すといわれる旧市街は、周囲を城壁（市壁）でめぐらされ、東西南北それぞれに城門が設けられている。城門には立派な塔があり、塔の下部がアーチ型の門になっ



ている。それぞれの塔の外観は微妙に異なる。

駐車場にクルマを止め、私たちは、歩いてガルゲン門から旧市街に入った。石畳の路の両側には、切妻の屋根を乗せた三階建や四階建の「木骨組み家屋」（ファッハウヴェルク）が立ち並ぶ。中世ドイツそのものの家並みだ。

ドイツの木骨組みの家と日本の木造家屋との大きな違いは二つある。まずは、建物全体の構造。日本の場合、基礎の上に柱と梁<sup>はり</sup>で骨組みをつくり、二階建ての場合であっても一階と二階は同じ柱（通し柱）で支えられている。ところがドイツの場合は、一階という箱の上に二階の箱を乗せ、さらに三階の箱を乗せるという具合で、各階の建物が独立した箱のような構造になっていて「通し柱」はない。日本人からすると、地震の横揺れで二階や三階が横にずれてしまわないかと不安になるが、ドイツでは地震の心配はしなくてもいいらしい。

もう一つの違いは壁の中身だ。外の表面は、露出させた柱や筋かいの間の壁を漆喰で塗って整えてあるが、壁の中には、煉瓦や切石、木の枝などがびっしりと詰め込まれているのだそうだ。日本の家は柱と梁で支えられているが、西洋では壁が主要な支えなのである。

歩きながら左右に目をやり、木骨組みの家々を眺めながら歩く私たちを、観光客を乗せた馬車がひづめの音を軽快に響かせながら追い越していく。歩く先には、もう一つの城門（塔）が見える。ヴァイサー塔である。

ガイドブックの年表を見ると、最初の市壁が建設されたのは12世紀後半だが、その後の都市の発展で、城壁外に人家がどんどん広がっていったので、14世紀には市壁の拡張工事が行われた。そこで、最初の城壁のうち不要になった部分は取り壊されたのだが、いくつかの旧塔はそのまま残された。そのうちの 하나가、このヴァイサー塔である。

やがて、私たちはマルクト広場に出た。三階建ての市庁舎（ラートハウス）は、シュヴァインフルトの市庁舎と基本的に同じづくりだ。切妻屋根には屋根窓が縦に三個、横に三個列ずつ並んでいて、中央の二階から上に鐘塔がはめ込まれている、というのか塔を縦に割った半分が張り出している。壁の色は黄色がやや勝る黄土色だ。

マルクトは英語のマーケットだから、ここで市が開かれ、時には公開処刑も行われた。中世ヨーロッパの広場はみな同じかな、マドリッドの広場でも市が立ち、時には公開処刑が行われていた。

右隣の建物は、「市議宴会館」などと訳されていて、市会議員のための宴会場だ。多くの都市には、この種の建物が市庁舎の隣にあるのだそうだ。現在、ここに観光案内所が置かれている。私は、地図のついた日本語版のパンフレットをもらった。

中世の自由都市では、経済力を増した都市市民（手工業者と商人）が封建領主や教会などの支配から脱し、市民自身の手で市政を運営した。多くの都市の市庁舎が立派なづくりであるのは、市庁舎が単なる市役所ではなく、都市の自由と独立のシンボルであったからである。

市政を取りしきった市長や市議は、有力な市民で構成され無給だったが、さまざまな特権を得ていた。その一つが、この「市議宴会館」で宴会や舞踏会を開くことであった。切妻屋根の妻壁側の三階部分の真ん中に仕掛け時計がある。時間になると、時計の両隣の窓が開いて伝説の「一気飲み」が再現される。右窓の市長が一気飲みし、左窓の将軍が感服する。

中世ヨーロッパは戦争が絶え間なかったが、ルターの宗教改革以後、戦争は、しばしば新教派對旧教派（カトリック）との戦いという形をとった。これは、もちろん純粋な宗教対立によるものではなく、利害の対立する双方が、それぞれ異なる宗派に依拠して戦ったということだろう。

ドイツでは、ルターの宗教改革（1517）のあと、ドイツ農民戦争（1524~25）が発生し、アウクスブルクの宗教和議（1555）を経て三十年戦争（1618~48）となる。

さて、伝説の「一気飲み」と言うのは、三十年戦争のさなか 1631 年のことである。新教側に属していた市は、ティリー将軍率いる旧教連盟軍に攻め込まれ、必死の抵抗むなしく降伏し開城した。市民軍の抵抗が激しく自軍の損害も大きかったため、将軍は報復として市議全員を斬首し街を焼き払うと宣言した。街中の女子供がマルクト広場に集まり、将軍の前にひざまずいて涙ながら嘆願したが、将軍は頑として聞き入れない。

やがて、市に代々伝わる宝物である皇帝の大ジョッキが運ばれ、当地名産のフランケン・ワイン白が注がれて将軍に差し出される。立て続けに 2 杯 3 杯と飲んだ将軍の気分は少し和んできたようだ。頃合いを見て、市長ヌッシュは、その大ジョッキに白ワインをなみなみと注いで将軍に申し出る。

「もしも私が、このワインを一気に飲み干すことができたなら、街を焼かずに市議達も助けていただけませんか」

ワインの量は 3.25 リットルある。そんなことは不可能だと思った将軍は「いいだろう」と鷹揚にうなづく。ぐうーと静かに飲み始めたヌッシュは、やがて苦しように顔をゆがめる。それでも傾けたジョッキから口を離さず、荒々しく鼻で息し、身をよじる。10 分後、ついに飲みほすと、ヌッシュは力尽きてその場にぼったり倒れた。それから 3 日間死んだように眠り続けたが、幸い命に別状はなかった。こうして街は焼き払われることなく市議達の命も助かったと伝えられている。このエピソードが、毎年演劇やパレードで何度も再現されるという。なるほど、飲んべえ達にとって、まことに心強い伝説である。

マルクト広場の西側には泉（井戸）がある。泉の中央には石柱があって、いろいろと装飾が施されている。パンフレットには「街最大の井戸。深さ 8 メートルで 10 万リットルの貯水量を有し、防火用水としても使われた」とある。

城でも街でも城壁の中では、給水のための井戸は命に関わる重大設備である。敵に包囲された場合に水路を断たれたり毒を入れられたりするののないよう、井戸への水路経路は極秘にされていた。

泉を右に曲がると、市庁舎の妻壁側（側面）の向かいに石畳の路を挟んで、大きな「木骨組み家屋」が立ち並ぶ。一階部分が石造りで二階三階と木骨組みの家を積み上げ、棟、柱、筋かい、窓枠は茶色の木材をむき出しにしてそれらの間は黄土色の漆喰で塗り側面は白である。

大きく傾斜のきつい切妻の破風の部分、つまり屋根裏とも言えると思うが、ここも窓が三段になっている。ということは屋根裏も三層になっているのかな、側面の屋根窓も三個が縦に並んでいる。見事な木骨組み家屋を眺め、土産物店を覗いたあと、私たちは右に曲がると少し歩いて、二つの尖塔を持つヤコブ教会の正面に出た。

14世紀初めから170年以上の歳月をかけて完成したゴシック様式最盛期の教会だそうだ。中へ入ると、まっすぐ上へ延びる支柱の数々に目がいく、視線を柱に這わせて上げていき、そのまま天井を仰ぎ見ると放射状に広がるリブの機能美に感嘆し圧倒される。ギュンターに促されて前に進むと、正面に「十二使途祭壇」がある。十字架像の左右にマリアやヤコブなどの彫像があり、その下の台には十二使徒が描かれている。非常に芸術的価値の高い祭壇の一つだそうだが、私にはよくわからない。

マルクト広場に戻ると、中世騎士の剣や鎧を専門に扱っている土産物店が目についた。入ってみると、店内は奥行きがあって品数も多い。中央には地下に向かって階段がある。薄暗い地下室に下りてみると、牢があって、その前のテーブルに、鎧を着たリアルな人形二体が、牛の角で作った杯を片手に腰かけていた。

これは面白い、私はギュンターを呼び寄せるとカメラを渡し、騎士の隣に腰を下ろした。シャッターを二度三度押したあと、写り具合を確認したギュンターは、ぐふふと含み笑いをして私にカメラを渡す。

店を出てマルクト広場を西に抜け、フランツィスカーナ教会まで歩いた。“European Tour 2016 The Ambassadors of Music from the USA Free Concerts” という看板が入り口に立てかけてある。中に入ると、青のTシャツのユニフォームの大勢の若者たちが歌っていた。ソプラノの荘厳な響きが高い天井に向かって広がりはねかえる。毎年、アメリカの若者が「音楽大使」としてやってくるらしい。

ここは、13世紀後半に建設されたローテンブルク最古の教会だそうだ。ギュンターが私をここに案内したのは、有名なリーメンシュナイダーの手になる「聖フランシスコ聖壇」を見せるためだ。合唱の合間をとらえて、ギュンターが私を祭壇の前に連れて行ってくれたが、合唱団の群れの中に入るのは少し気がひけた。

“Let's have a rest.”

「ちょっと休憩にしよう」

教会を出ると、私達は向かいのカフェに入った。腕時計を覗くと5時前だったが、太陽は高く真昼のように明るい。

店内の左手にお菓子やケーキの並べられたショーケースがある。モニカが立ち止って私に説明する。

“That's a famous sweet of Rothenburg called a snowball.”

「あれがローテンブルク名物のお菓子でスノーボールだよ」

私とモニカはそのスノーボールを注文したが、ギュンターはいらないと言う。室内を抜けて、私たちは庭のテーブルに腰を下ろした。ギュンターが私にメニューを渡して言った。

“What do you want to drink?”

「飲み物は何にする？」

ビールを飲みたかったが、運転手のギュンターに悪いと思って私は我慢した。コーヒーだな、

久しぶりにエスプレッソにするか。

“Yoshi, Espresso has a strong taste. Don't you need water?”

「ヨシ、エスプレッソは濃いよ。水はいらないの？」

それもそうだ、日本のレストランや喫茶店のように、黙っていても水の入ったグラスが出されることはない。私は、モニカの気づかずに感謝しながら水も注文した。モニカはカプチーノ、ギュンターはドイツ語で何やら注文した。

ウェイターの運んできたトレイを見て私は驚愕した。

(えーえ、うそ！？そんな)

ウェイターは、まずモニカの前にコーヒーを置くと、ギュンターの目の前に円い紙のコースターを敷き、その上に見るも涼しげな生ビールのグラスを置いた。それからテーブルをまわり、啞然とする私の目の前にエスプレッソとワイングラスを並べた。そして、瓶の栓を抜くと水を3分の1ほどグラスに注いだ。

(えーえ？水なんか注いでくれなくたっていいのに)

ギュンターは、グラスを傾け琥珀色の液体を、ぐうーと飲むと満足そうな笑みを浮かべ、フーと息を吐いた。空気は乾いているし、半日歩いた後のビールはさぞかし美味しいだろうな。私はデミタスカップのどす黒い液体をすすった。

なるほど、帰りの運転はモニカに代わるということか。気を取り直した私は青空を仰ぎ、緑に囲まれた庭を見まわした。こちらのレストランやカフェには音楽は流れていない。まわりのテーブルのお喋りも静かで、夏の陽光がきらめく庭園の中を時間がゆったりと流れていく。モニカがトイレに立ったすきに、私はウェイターに合図して勘定をすませレシートを受け取った。

カフェを出てから少し歩いて、私たちは「中世犯罪博物館」に入った。中世 1000 年にも及ぶ法と刑罰の歴史についての膨大な資料が、四階建ての建物の各階に展示してあり、ドイツ語、英語、日本語の三カ国語で説明がある。英語の次に日本語の説明があるのだから、ここを訪れる日本人が多いのかな。

刑法、裁判手続、判例、裁判記録、決闘のルールなどの文書の他、さまざまな種類の拷問器具や処刑器具が多数展示されていて、人気ある観光スポットだ。

身持ちの悪い女を閉じ込めておく棺のような鉄のマント。「鉄の処女」というニックネームがつけられた有名な刑罰器具だそうだ。指や舌を挟んで、ぎりぎりねじで締め付けていく鉄製の拷問器具がいくつか展示してある。ギュンターが横に立つ私に話しかける。

“Did you have such things for torture in Japan?”

「日本にもこんな拷問器具あったかい？」

元来が穏やかな気質の日本人は、こんなものを考案しないよ。抱き石とか百叩きの刑とか鋸引きなどという残酷な刑もあったが、こんな陰湿な拷問器具はないだろう。

“I don't think so...It was common whipping 100 times. Most of the suspects lost their consciousness before getting 100.”

「無いだろうな。百叩きの刑がよく行われたのかな。ほとんどの容疑者が 100 回叩かれる前に気

を失うけれどね」

死刑執行人のずっしりと重そうなマントとマスクは、死に臨む死刑囚のまなざしには呪術的な力があると信じられていたので、それを防ぐための防護服だ。斬首用の剣と斧。このような展示物から中世の処刑シーンを想像するとぞっとする。

面白いものもある。羞恥を与え名誉を奪うための各種マスク。これをかぶせられ、罪状の書かれたボードを首に吊るして広場に立たされるのだ。でも、マスクなしで素顔のままの方がより恥ずかしいと思うが、中世の人々の感性と現代人の感性とは異なるのかな。

喧嘩をやめない女二人が向かい合ったまま首と両手をはめられる木製の首枷・手枷<sup>かせ</sup>とか、小麦の量をごまかしたパン職人を閉じ込めて人前に晒す籠などは、その横のイラストを見ると思わず吹き出してしまう。

私たちは博物館を出て Schmied（鍛冶屋）gasse（通り）を南に向かって歩いた。この街のレストランやカフェや商店は、入り口の上にそれぞれ独自の鉄製細工の看板を張り出しているが、その細工の腕を競った鍛冶屋たちが住んでいた通りだ。先ほど見た、さまざまな拷問器具も、この鍛冶屋が工夫し作ったのだ。

真っすぐ延びる石畳の路の正面にはジーバース塔が見える。右手から一段低い手狭な坂道が上がってきて私達の歩く路と斜めに交差している、その坂道を下りた先にはコポルツェラー塔が見える。二つの路が斜めに交差して伸びるその左と中央と右には木骨組み家屋が立ち並ぶ。ここは「プレーンライン」（平らな場所）というラテン語名のついた有名なスポットで、大勢の観光客が写真を撮っている。私たち三人も交互に写真を撮りあった。

プレーンラインを少し奥に歩くと市壁（城壁）の内側が見えてきた。私達は木製の階段を上った。城壁の内側の上部には通路が延々と張り巡らされていて木の柱で瓦屋根を支え背後に落ちないように手すりが備えてある。兵士たちがここで戦い、攻め来る敵を防ぐようになっていたのだ。壁のところどころには銃眼や弓を射るための穴もあけてある。ガイドブックによると城壁は全長 3.4 キロとある。

城壁の上部の通路を少し歩くと、積み上げた壁石の表面にルファベットで名前が彫ってある。一瞬、不心得な観光客の落書かなと思ったが、そうではない。修復のための資金提供をした人の名だそうだ。

ドイツの多くの都市は、日本と同じように第二次世界大戦の空爆により破壊された。ローテンブルクも 40%ほどが破壊されたが、戦後、国内外から資金援助により、破損した城壁や歴史的な建造物が完全に修復された。

壁の表面には日本人の名前もある。いや、次々と日本人の名前が出てくる。「京都哲学の道」、「四季の会」などというのあれば、私の住む隣の豊川市のカップルの名もある。私は、少しうれしくなった。今まで歩いたいくつかの場所で、出口の案内がドイツ語と英語と日本語であったり、先ほどの博物館の説明文に日本語があったり、この街を愛する日本人が多いのだろうと思った。

切妻屋根の赤茶色の家並み、いくつもの尖塔、城壁の上から眺める旧市街の景観は中世そのもの

のだ。私たちは何度も写真を撮りながら歩いた。

駐車場に戻ると、運転席に乗り込んだのはモニカではなくギュンターだった。私は覚悟を決めた。ドイツ人の身体は日本人と違ってアルコールに強いのだろう。そう信じるほかない。腕時計に目をやると午後7時20分だ。自動車道を40分ほど走らせて街に入ると、ギュンターは、<sup>つた</sup>蔦の絡まる三階建ての石造りの建物の横にクルマを止めた。

一階がレストランで二階三階がホテルのようだ。裏庭は広く、いくつも並べられたテーブルに空きがないほど客は混み合っていた。

私たちは生ビールで乾杯した。車だけれどまあいいか。料理は、モニカの勧めで私たち二人は「ヴィーナー・シュニッツェル」(Wiener Schnitzel)という子牛肉のカツレツ、ギュンターは「シュヴァイネハクセ」(Schweinehaxe)という豚のすね肉のローストを注文した。どちらの料理も、私のガイドブックに写真が載っている。

料理が運ばれてきて、私が手を合わせて「いただきます」と小声で言うと。隣の席の女性が話しかけてきた。

“Are you Japanese?...People say Itadakimasu When you eat.”

「日本の方？食するときイタダキマスって言うんですよね」

“Have you been to Japan?”

「日本に行ったことがあるんですか？」

“No, I haven't. My parents lived in Yokohama long time ago.”

「いえ、私はないわ。昔、両親が横浜に住んでいたんです」

“I'm here on holiday. My friends took me to Rotheburg. This is my first visit to Germany.”

「私は休暇でここへ来てるんです。友人がローテンブルクへ連れて行ってくれたんです。ドイツは初めてです」

帰宅後、昼のカフェのレシートを確かめた私は衝撃を受けた。水もビールも0.5リトルで、水が3.4ユーロ、ビール(クリスタル・ヴァイツェン)は3.3ユーロ。1ユーロ119円で計算すると393円で水の方が12円ほど高い。



マルクト広場



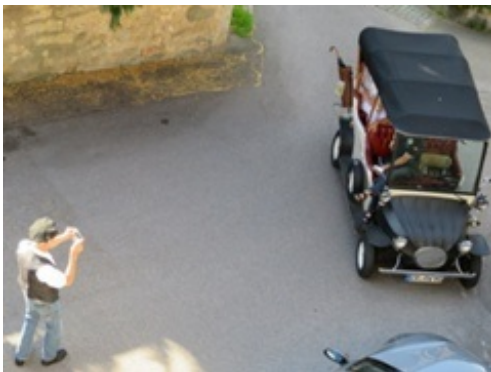
市庁舎



土産物店 地下室



市壁



プレーンラインを撮る



7月6日（水） Würzburg（ヴュルツブルク）

---

目覚めて、机の上の置時計に目をやると7時少し前である。ベッドからおりてブラインドの紐を引いた。緑の庭に朝の陽光が溢れている。私は、扉を開けてベランダに出た。庭の先は歩道のような。樹々のわずかな隙間に散歩する男女の姿が見えた。歩道の先には高い樹林が茂っていて、その先から微かに車の走る音がする。昨日帰宅したとき通った幹線道路のような。幹線道路を行き来する車の騒音は茂る樹木に遮られて、住宅地域まで届かない。

朝食後、私たちはギュンターの運転で出かけた。今日も私は助手席だ。市街地をゆっくり運転するギュンターに、気になっていたことを私は思いきって訊ねてみた。

“If you don't mind... how old are you?”

「失礼だけど、何歳？」

“I'm 63.”

「63歳」

（えっ、モニカより若いとは思ったが10歳差とは・・・うーん、質問したのだから、何か反応しなければならないが、いい言葉が浮かばない）

“63...I'm 69”

「63、・・・オレは69だよ」

“I know.”

「知ってるよ」

“How long does it take to get to Würzburg,”

「ヴュルツブルクまでどのくらいかかるの？」

今日はヴュルツブルク見学だが、まずは、シュヴァインフルトの街に寄った。石畳の道路脇には車が幾つも並べて駐車してある。ギュンターは一台分のスペースを見つけると、バックして、そのわずかな隙間に車をねじ込んだ。バックモニターは装備されていないのに慣れたものだ。でも、ここは駐禁ではないのかな。

車から降りた二人は、料金支払い機にコインを入れた。（あれえー？）路駐でもおカネを払うんだ。ギュンターは、そのレシートを持ってクルマに戻り、ダッシュボードの上に置いた。なるほど、白線など何も目印はないけれど、路上も市の駐車場で有料なんだ。

二人は、私を金物店に連れて行った。私が、土産に欲しいと言った「茹で卵割り器」を購入するためだ。1個23.90ユーロだから結構な値段だが、とっさに円に換算できないから、まあいいかと二つ購入した。

“Do you want to have it wrapped? You will need to pay for wrapping if you do it.”

「ラッピングしてもらおう？代金が出るけど」

“Yes, I want.”

「うん、してもらおう」

ラッピング代は4.95ユーロ。ええと、5×120円として、ざっと換算すると、え？600円もする



。たいしたラッピングでもないのに、でも、まあしかたないか。

“We have to pay for the cost of disposing of plastic.”

「プラスチックの処理代を払わないといけないのよ」

どうやら、このラッピング代の中には、プラスチック処理の環境税みたいなものも含まれているようだ。

“Is it like a tax for the environmental protection? I know that Germany is very strict on the environmental protection.”

「環境税みたいなもの？ドイツは環境保護に厳しいんだよね」

ヴュルツブルクは、モニカの思い出の地だ。ギュンターもここで学生時代を過ごした。ただ当時は、二人に接点はなかった。

“I’m not from Würzburg or Schweinfurt. I’m from a little town. I came to Würzburg to study there. Then I met my later husband. Thomas was born in Würzburg.”

「私の出身地は、ヴュルツブルクでもシュヴァインフルトでもない小さな街。大学がヴュルツブルクで、そこで後の夫に出会ったの。トーマスはそこで生まれたのよ」

車を走らせるギュンターが左を指さす。斜面一面がブドウ畑の小高い丘に、城壁をめぐらした要塞がそびえ立つ。マリエンベルク要塞である。

12世紀半ばより、ヴュルツブルクの領主は司教の地位も得て「司教領主」と名乗った。宗教的権威と政治権力を併せ持ったのである。マリエンベルク要塞は、1253年から1719年まで、司教領主の居城兼要塞となった。ドイツ農民戦争では、ヴュルツブルクの多くの司教区が農民軍に打ち負かされた。領主たちはマリエンベルク要塞に籠城した。

免罪符の強引な販売を批判したルターは、ローマ教皇から破門されても一歩も引かなかった。それどころか、「教皇権」を否定し、キリスト教信者は、聖職者であろうと一般の信者であろうと信仰においては平等だと主張した。そんなルターに触発された農民たちが、領主に刃向かった。当時、封建領主と教会組織は一体化し、様々な税を課して農民たちの生活を圧迫していた。また、当時の農民たちは領主の戦争にしばしば動員されていたので、武器も所有し戦闘経験もあり、農民軍は立派な軍隊だった。

ドイツ農民戦争は、1524年から始まり、ほぼドイツ全域に波及し、ついには、農奴制の廃止、税の軽減、裁判の公正など「農民の12か条」を掲げて戦うまでになった。

1525年5月、農民軍はマリエンベルク要塞に立てこもる領主軍を包囲し攻撃したが、要塞は持ちこたえた。やがて、反撃に出た領主軍に農民軍は敗れ、これを機に農民反乱は収束する。10万人の農民が命を失ったと言われている。

ギュンターは、市街地の外側に沿った自動車道を軽快に飛ばすと、そのまま橋を渡って坂を上る。かなり急な坂道で歩いて登るには大変そうだ。城壁の間を縫って、さらに車を進め駐車場のゲートバーをくぐった。

舗装されていない大雑把な駐車場のまわりは堅固な城壁が幾重にも築かれ、銃眼だけでなく大

砲用の大きな穴があげられている。城門をくぐると、私たちは、そのまま中へは入らず、まずは外側の城壁に沿って歩いた。突き当りを右に曲がると展望が開けた。豊かに水をたたえ、ゆったりと流れるメイン川の向こうにヴェルツブルクの美しい街並が広がる。赤茶けた屋根瓦に統一された街に、いくつもの尖塔がそびえ立ち、メイン川にはいくつもの橋がかかる。まさに中世ドイツ都市の景観だ。

左手に、12人の聖人像が立ち並ぶ旧メイン橋が見える。モニカが事前に送ってくれた本の冒頭の写真には、大聖堂と市庁舎の尖塔の間に立ち昇る朝日を歓迎する聖人像が載っていた。

“On the Alte Mainbruke the statue of St Nepomuk raises his cross to hail the down of a new day.”

「旧メイン橋の上には、聖なんとか像が十字架を掲げ、新しい一日の夜明けを歓迎する」

だから、メイン川は南北に流れ、その東側に街が広がっていることになる。振り返って見上げれば、内側の城壁にも街を眺める人々が群らがっている。私達は、メイン川に並行する東側の城壁を歩いて右に折れ、城壁をぐるりと回って城内に入った。

四隅に塔を配置し三階建と四階建の建物に囲まれた広場には、小さなプールのようなものがある。ローマ帝国時代のような貴族のための浴槽かな？と思ったが、ギュンターが笑う。

“It’s a pool for washing horses, not for men.”

「馬を洗うプールだよ。人間用ではない」

なるほど、人間よりもまず馬だ。馬は大切な戦力で、一頭で歩兵数人分、いや十数人分に相当するかもしれない。

広場中央には、見るからに頑丈そうな円柱の塔がそびえ立つ。これは、Bergfried（ベルクフリート 主塔）という中世ドイツ特有のもので、城内に攻め込まれたとき、この塔に立てこもって最後の戦いをするのだそうだ。つまり最後の砦だ。高さは42メートルある。一階の中は薄暗く階段が見当たらない。

“There is no steps.”

「階段がないよ」

と、私が言うと、モニカが応えた。

“The entrance was upstairs. They must have used a ladder and pulled it up.”

「入口は二階だよ。梯子を使って上って、そのあと引き上げてたんでしょ」

実は、主塔の一階には入口がない。入口は二階にあり、引っ込められる梯子を使って出入りしたのである。一階は、備蓄品を貯える倉庫として使用され、あるいは捕虜を監禁する地下牢としても用いられた。

塔の南には、深さ100メートルの井戸を囲む建物がある。高台にある城や要塞にとって安全な水の確保は最重要点の一つである。

要塞の主だった歴代の「司教領主」の棺が祀られているマリエン教会を覗いたあと「領主の庭園」に出た。メイン川とその向こうに広がるヴェルツブルクの街並みを、私たちは先ほどより一段高い位置から、もう一度眺めた。

駐車場に戻った私達は車に乗り込んだ。要塞を出て橋を渡ってヴェルツブルクの街に入ると街

の駐車場に車を止めた。ランチは、モニカとギュンターそれぞれの思い出深い「ワイン酒場 Maulaffenback」で取る。さすが、フランケン・ワインの名産地だけあって、ワイン酒場 (Weinstube) なんていうのがあるんだ。

“This is an old famous wine house.”

「ここはね、有名なワインハウスの老舗だよ」  
しにせ

まずは、フランケン・ワイン白のグラスの小を二つと大を一つ注文して、乾杯した。よく冷えた白ワインは、すっきりした喉ごしでおいしい。

“Good. This wine was chilled? Do you chill wine?”

「おいしいね。このワイン冷やしてあるね。ワインって冷やすの？」

“Yes, we chill white wine, not red.”

「ええ、白はね。赤は冷やさないよ」

“Did you often come to this wine house when you lived here?”

「ここで暮らしていたときは、このワインバーによく来たの？」

“Yes, we came here when we studied here, but not together because we didn't know each other at that time.”

「ええ、二人が学生だった頃ね。でも、二人一緒じゃないよ。その時は、私達二人は、お互い知らなかったからね」

注文した料理は、南ドイツの伝統料理「レバーケーゼ」とじゃがいもサラダの二品。二つの料理は一皿に盛られてきたので、肉の横のじゃがいもは付け合わせかなと思ったが、違うみたいだ。注文した二品を一皿にもって出す、合理的といえは合理的だ。

蒸し焼きにしたドイツ風ミートローフは、ふわふわした食感で淡白なソーセージのような味がする。濃い味に慣れてしまった現代人には、やや物足りないかな。サラダの方は、スライスして茹でたジャガイモにソースをかけ、ハーブの葉が振りかけてある。出てきたものはこの二つだけで、スペインのようにパンは付いてこない。昨日のランチも軽かった。日本人の私はともかく、大柄なドイツ人は、お腹がすかないのかな？と不思議な気がした。

ギュンターがワインのお代りをする。(運転、大丈夫かな)と心配になるが、だからといって、“Now, Japan is very strict on drunk driving.”「日本は、現在、飲酒運転に厳しい」などと言えない。

“What's the name of this wine house?”

「このワインバーの名は？」

“Maulaffenback...a nickname of the first landlord that means that he didn't work, he only stood there and watched people with his mouth open.”

「マウラッフェンバック、当初の主人のニックネームだよ。働かず、ただ、そこに立って、ぼかんと口を開けて人々を眺めているだけ、という意味ね」

「ふーん」、私は、コースターに描かれた猿を指さした。

“What's this monkey?”

「この猿なんなの？」

“The name Maulaffenback means ‘gawk’ in English.”

「マウラッフェンバックの意味は、ゴークだよ」

“Gawk?” 「ゴークって？」

“Ah...look at something with opened mouth like a fool.”

「えーと、口をぽかんと開けて何かを眺めている。ちょっと足りない人みたいに」

“In the old time in Germany, people had pinewood chips for lightning. The lightning sometimes had the form of a monkey head with opened mouth. That’ why the sign has a monkey on it.”

「昔、ドイツでは、<sup>ともしび</sup>灯火に松の木の切れ端を使ったんだけど、その灯火の形が口を開けた猿に見えたのよ。それで、看板に猿が描いてあるの」

“Really?.”

「へえー」、でも灯火の形が「口を開けた猿」に見えるというのは釈然としないな。それに、そもそもヨーロッパにサルは分布していないはずだ。昔のドイツ人は、口を開けた猿を、いったいどこで見かけたのだろうか？

“You can bring your own food in here and just order some wine.”

「ここは、食べ物持ちこみ可で、ワインだけ注文していいのよ」

(へえー)、イギリスやオーストラリアには、B.Y.O.(Bring your own) というアルコール持ち込み可のレストランはあったけれど、ドイツには、食べ物持ち込み可の酒場があるんだ。

ギュンターは、学生時代、ここに入り浸っていたそうで、懐かしそうに、奥の部屋まで私を案内した。学生時代と新婚時代をヴェルツブルクで過ごしたモニカも、ここへはよく来たそうだ。モニカがトイレに立った際に、私は手を上げてウエイトレスに合図し支払いを済ませた。

昼食をすませた私達は、「レジデンツ」まで歩いた。世界遺産に登録されている「レジデンツ」は、1720年から44年までの司教領主の邸宅だった。1618年の三十年戦争の終結で、いわゆる「宗教戦争」の戦乱は終わり、18世紀に入ると政局も安定してきた。司教領主は、もはや山の上の堅固な要塞に住む必要はなくなり、領国支配のためには、むしろ街の中に居を構えたほうが便利だった。日本でも、戦乱が相次ぐ中世から天下統一の安土桃山時代つまり信長、秀吉の代になると、山城、平山城から平城へ移行し城下町が形成されていく。

カウンターで入場料を出そうとしたが、モニカは手を振って私を制すと三人分を支払った。私にすれば、八日間も世話になるのだから、昼食代や入場料は、なるべく支払わなければ、と思うのだが、なかなか支払わせてくれない。

入場料には、ガイドツアーが含まれている。ドイツ語のガイドは20分おきで、英語は一日三回、三回目が15:00から。私たちは、階段下の一階ホールで時間になるのを待った。

やがて、黒のパンツとベストを細身にぴちっと着こなし、顎髭をたくわえたハンサムなガイドがやってきて、待ち受ける観光客に流暢な英語で挨拶した。

まずは、目の前の「階段の間」へ案内する。一階ホールの中央に幅の広い階段がゆるやかに上り、突き当りの左右それぞれから階段が折り返して二階へ上る。この三本の階段の上は吹き抜

けになっており、高い天井に広がるのは世界で一番大きいフレスコ天井画で、ヴェネチアの画家ティエポロの作品である。

幅の広い階段三本を納める吹き抜けの、この広大な空間（階段の間）は、当時としては常識外れの設計で、「設計ミス」、「絶対に崩れる」と酷評されたそうだ。設計者はバルタザール・ノイマン。ガイドは、設計や絵について熱心に説明してくれるが、彼の英語は、私には少し早すぎて、神経を集中しているとどっと疲れが出てくる。

階段を上ると二階の中央にあるのが「白の間」。柱も壁面も天井も白色で、白の漆喰の繊細な飾りが壁から天井に伸びている。その飾りを施す手作業について、ガイドが説明している。

「皇帝の間」は、柱や壁に金の装飾をふんだんに使った豪華絢爛たる部屋だ。天井には、「馬車に乗ったアポロが天を駆け抜けていく姿」というティエポロのフレスコ画が描かれ、豪華なシャンデリアが吊り下げている。

説明を終えたガイドは、右手に進むとポケットから鍵を取り出して扉を開け、ツアー客を南側の居室へ案内する。つまり、ここから先はガイドの先導なしには入れない。皇帝の間で個々に見学していた他の客も、私たちに続いて入ってくる。

大きなタペストリーのかかる「ヴェネチアの間」とか「鏡の間」などの部屋が続いている。ガイドは、ユーモアを交えながら熱心に説明し、ときおり観光客からの質問を受ける。

やがて、ツアーの終わりを告げたガイドが鍵で出口の扉を開ける。私たちは、ガイドに向かって拍手し礼を言った。次の部屋には、第二次世界大戦の空爆で廃墟と化したレジデンツの写真や映像が展示され、それらの復元に苦労する様子も紹介されている。

レジデンツを出て庭園をぶらぶらと散策してから、二人は私を Dom（ドム 大聖堂）に案内した。11 から 12 世紀の大聖堂だが、第二次世界大戦で破壊され、戦後再建されたものだ。印象的だったのは、リーメンシュナイダー作のルドルフ司教の墓碑彫刻だ。右手で剣を突立て、左手には司教杖もっている。司教冠をかぶり、鋭い眼光に引き結んだ唇のその表情は、宗教的権威と政治的権力を併せ持った司教領主の気負いと力を感じさせた。

大聖堂を出ると隣のノイミュンスター教会を覗いた。ギュンターが珍しいキリスト像があると私を案内する。いばらの冠をかぶり、胸には槍の切り口、腰から脚に血を滴らせているから磔刑のキリスト像だが、なぜか異様に長い両腕は何かを抱きかかえているように胸の前で交差させている。なるほど、こんなイエス像は初めて見る。憂いに満ちた表情は穏やかで悲しげだ。

教会を出た私たちは近くのオープンカフェで一休みした。私はアイスクリームを食べたくなったが、メニューの中のパフェは、どれもこれも豪華で量が多い。無理かなと思ったが、ええいと思いついて豪勢なのを注文した。モニカはコーヒー、ギュンターはやっぱりビールだった。コーヒーを飲んでいたモニカが、突然何かを思いだし、あわててギュンターに何事か言うのと腕時計をのぞいた。

“Yoshi, we’ve forgotten to visit Siebold Museum. Oh...”

「ヨシ、シーボルト博物館に行くのを忘れてた。ああ・・・」

“Oh, that’s all right. I don’t care.”

「いいよ、別に」

一休みした私達は、聖人像の立ち並ぶ旧メイン橋を目ざして歩いた。ヴュルツブルク見学で、この橋は絶対に外せない。途中立ち止ったモニカが、歩道の奥のオープンカフェの真ん中の樹を指さした。

“That’s the Kiri tree I told you before. They planted it in April. It has grown up. The first kiri was brought from Japan by Siebold to Würzburg.”

「あれは前に私が言った桐の木、四月に植えたんだよ。大きくなったね。シーボルトが初めて桐の木を日本からヴュルツブルクに持ち込んだんだよ」

“Kiri is good wood for furniture and grow up soon compared with other trees. So, in the past if people had a baby girl, they planted kiri in their yard. When the girl grow up and married, they cut the tree and had it made to furniture.”

「桐はね、家具に適した木でね、しかも、他の木に比べて成長が早い。だから、昔は、女の子が生まれると庭に桐の木を植えて、その娘が成長して結婚するとき、木を切って家具にしてもらったんだ」

橋の上は人々があふれていた。ようやく日の傾いた橋の上で、聖人像に見守られるながら、多くの男女がワイングラスを片手に談笑している。いいな、この光景。橋のたもとには古い水車小屋を改造したレストランがある。ワインだけなら、店内に入らずに注文できるシステムになっている。でも、さすがだな、こんな場所でも紙コップではなく、ちゃんとしたワイングラスなんだ。落とすと割れるぞ。

私も、ワイングラスを片手に、若者たちの談笑に加わりたくなった。ところが、ギュンターが腕時計を覗き、時間を気にした。

“Yoshi, it’s time to go back.”

「ヨシ、戻る時間だ」

そうか、帰宅後コンサートに出かけることになっていた。まずいな。いや、実にまずい。遅刻を気にしてギュンターの運転が荒くなったら最悪だ。

大急ぎで駐車場に戻ると、私は祈るような気持ちで助手席に腰を下ろした。ヴュルツブルクからシュヴァインフルトまでの距離は約30キロだ。ヴュルツブルクの街を走るギュンターが右手の建物を指さした。

“In that building there was the Institute of Physics of the Würzburg University. Professor Roentgen had had a laboratory. I worked there. Do you know Roentgen?”

「あの建物内にヴュルツブルク大学の物理学研究所があって、かつて、レントゲン教授が実験室を持っていたんだ。私はそこで働いていた。レントゲンって知ってるよね」

“Of course I know. Roentgen discovered X- rays”

「もちろん知ってるよ。レントゲンはX線を発見したんだ」

モニカも懐かしそうに言った。

“I worked in Roentgen’s historic rooms.”

「私は、レントゲンの歴史教室で働いていた」

やがて、街を抜け自動車道に乗り入れると、ギュンターがギアチェンジを繰り返しながらぶっ飛ばす。緊張した私が黙りこくっていると、モニカが後部座席から声をかける。

“Yoshi, are you tired? Are you sleepy?”

「ヨシ、疲れてるの？眠いの？」

“No, not tired, not sleepy. I'm fine.”

「いや、疲れてないよ。眠くもない」

（そうじゃないんだってば、怖いんだよ）

何とか無事にシュヴァインフルトに着いた。私達は急いで着替え、再び車に乗り込んだ。モニカが、このコンサートのことをメールで知らせた。

“On Wednesday in the evening we will go to a concert in the school, where my husband was a teacher for Latin, Greek and History. I could reserve seats for us.”

「水曜の夕方、学校のコンサートに行きます。その学校で私の夫がラテン語とギリシャ語と歴史を教えていたの。席を予約できたからね」

この音楽学校で、ギュンターの奥さんが物理学を教えていたのだそう。モニカのダンナさんは20年前に亡くなっているし、ギュンターの奥さんは5年前に亡くなったということだから、当時、二人に接点はなかった。ただ、この学校の代々の関係者とその家族の会合が定期的に催されて、モニカとギュンターは、今年の1月にその会合で出会ったのだそう。

日本では、例えば子供が三人いれば、長男でなくとも誰か一人が実家に入るとか、実家の隣に住むとか、あるいは近くに住むという場合が多く、祖父母と孫とが触れ合う機会もあるのだが、欧米では、子供たちは成人になれば家を出るのが普通だ。社会保障が充実しているドイツでは、高齢になっても独り暮らしの寂しさを厭い、男女とも積極的にパートナーを探し求めるのだそう。

モニカは、亡くなったダンナさんのことは「ハズバンド」と呼び、ギュンターのことは「パートナー」と呼んで区別し、友人達にもそういう呼び方をする。ギュンターの家は隣村にある。娘さんが二人いるそうだが家を出ているから、ギュンターもひとり暮らしだ。今のところ、それぞれが自分の家で暮らしながら、お付き合いをしており、それぞれの子供たちもそれを認めている。日本では考えられないようなことだ。

“He has the key to my house and I have the key to his house.”

「彼は私の家の鍵を持ってるし、私も彼の家の鍵を持っている」

学校の駐車場には、すでに多くの車があった。演奏会場に入ると、モニカとギュンターは、校長や先生、それに昔の同僚など何人かの知り合いと握手したりハグしたりして、それから横に立つ私を紹介する。

“This is our friend Yoshi from Japan.”

「こちらは、日本から来た友人のヨシです」

その都度、私は握手し挨拶する。

演奏会が始まった。まずは、中学生くらいの女の子が客席から登壇してピアノ演奏する。終わると舞台中央で拍手に答えて、照れながら笑顔で何度もお辞儀する。家族か友人達だろう、客席から拍手とともに声が掛けられる。なんだか、音楽発表会みたいな雰囲気だ。

この音楽学校の生徒と先生によるピアノ、バイオリン、フルート、ビブラフォン、フォルンなどのソロ演奏や合奏が、間に20分ほどの休憩をはさんで合計2時間行われた。休憩時間には、ロビーでソフトドリンクと菓子、それにシャンパンが売られていて、人々はシャンパングラスを片手に談笑している。車で来た人が大半なのに、おおらかなこと。まてよ、まさかノンアルコール・・・ってことはないよな。私たちもシャンパンを注文した。一口飲んだ私は、妙に納得した。

(ああ、やっぱり、本物のシャンパンだ。冷えていておいしい)

今日も、一日の「め」は A glass of wine だった。今日は白。私はワインを味わいながら質問した。

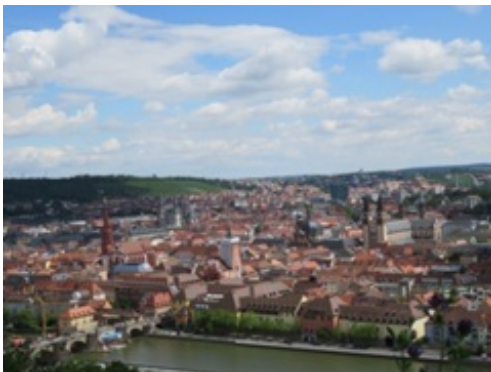
“What’s the alcohol age limit?”

「お酒の年齢制限は？」

“You can buy beer and wine when you are 16 years old. For spirits such as whisky and brandy, you have to be 18 years old.”

「ビールとワインは16歳からで、ウイスキーやブランデーみたいな蒸留酒は18歳」

アルコールの強弱によって16歳と18歳に分けているのだ。イギリスも同じだが、フランス、イタリア、スペインは、全て16歳からOKだ。日本では、今までのところ飲酒は20歳からだが、実際には、高校を卒業すると世間も甘く見る傾向にある。今年の参議院選挙の投票権が20歳から18歳に引き下げられたので、飲酒や喫煙も、そのうち18歳に引き下げられるかもしれない。



マリエンベルク要塞から見た旧市街



レバーケーゼ





レジデンツ正面



アルテ・マイン橋

今日はニュルンブルク見学で、モニカの三男のアンドレアス（Andreas）が案内してくれる。午前11時45分に「中央広場」観光案内所の前で待ち合わせたのは、広場に面するフラウエン教会の正面上部に有名な仕掛け時計があり、一日一回正午に動くので、それを観るためである。

観光案内所前のベンチに腰を下ろしていた若者が立ち上がると、モニカとハグし、ギュンターとハグしてから私に微笑し手を差し出した。私たちは握手をして挨拶を交わした。ジーンズの上に赤のポロシャツ、緑の上着をはおりグレーのキャップをかぶったモニカの三男アンドレアス（Andreas）はとても感じのいい若者だった。

切妻屋根の四階や五階の建物に囲まれた中央広場には、果物、菓子、アイスクリーム、おもちゃ、雑貨など、さまざまな屋台が出ている。

私たちは、仕掛け時計を見るため教会の前に立った。多くの観光客がカメラを手に待ちかまえている。仕掛け時計の中央の玉座は皇帝カール四世だ。やがて、正午を告げる鐘が鳴り、両側二体の人形がラッパを吹き鳴らすと左右の扉が開く。赤いマントに身を包んだ「選帝侯」七人が現れ、皇帝に挨拶して玉座を三度まわる。この仕掛け時計は1509年のものだとガイドブックにはあるが、どうしてこんなに保存状態がいいのだろうか？

ところで、七人の「選帝侯」ってなんだ？

395年、古代ローマ帝国は、「ゲルマン民族大移動」の中で東西に分裂し、さらに西ローマ帝国は476年に滅んだ。ゲルマン民族の一派フランク族は、ライン川の東に定着し、徐々に西へ勢力を伸ばしていった。このフランク王国と協力して中世西ヨーロッパ世界の成立に大きく寄与したのがローマ教会である。

いち早くキリスト教に改宗したフランク王国は、教会組織を活用して勢力を拡大し、やがて、西ヨーロッパの主な部分を支配していった。800年、フランク国王カール大帝は、ローマ教皇から「ローマ人の皇帝」の冠を与えられた。つまり、古代ローマ帝国皇帝の後継者だと認められたのだ。その後フランク王国は東部、西部、中部の三つに分裂し、のちのドイツ・フランス・イタリアの原型ができるのである。

962年、東フランクの国王オットー一世は教皇から「ローマ皇帝」の冠を授かり、13世紀になると「神聖ローマ帝国皇帝」という名称が使われるようになった。以後、西ヨーロッパ中世は、ドイツの国王が「神聖ローマ帝国皇帝」としてヨーロッパに君臨した時代であった。しかし、「ローマ帝国皇帝」とは名ばかりで、その支配はドイツに限られていた。そして、ドイツ国内も諸侯や自由都市が独立状態で、ドイツは分裂していた。しかも、ドイツ国王＝ローマ皇帝の地位は、世襲でなく諸侯から選ばれるシステムであったため、この地位をめぐる諸侯の間の抗争は教皇も巻き込み、混乱が絶え間なく続いていた。

1334年にドイツ国王＝皇帝に即位したカール四世は、1356年、即位後の第一回帝国議会をニュルンベルクで開き、国王＝皇帝の選挙手続きと選挙権を持つ七人の「選帝侯」を定め、多数決を導入した。このときの「皇帝文書」が『金印勅書』と呼ばれるもので、ドイツにおける最初の憲法

だと評価されている。

反面、七人の選帝侯に対し国王に準ずる特権を認めたことで、ドイツの分裂が固定化された。以後ドイツは、諸侯の領地や自由都市などおよそ 300 の大小さまざまな国家（地方勢力）に分裂した。その点で、この『金印勅書』はドイツ史にとって重要な文書である。

つまり、中央広場の名物である仕掛け時計は、『金印勅書』がニュルンベルクで発布されたことに由来しているのである。

正午に一日一回きり動く仕掛け時計を鑑賞した後、私たちは「フラウエン教会」に入った。Frauenの意味は「女性」だが、この場合、「聖母マリア」を意味する。マリアを普通の人間ではなく聖なる存在とするマリア信仰は、ドイツ南部バイエルン地方で盛んだそうだ。

教会を出た私たちは、広場の北に向かって歩く。アンドレアスは、メモ書きしたプリントを手に、一生懸命説明してくれる。

“I'd like you to stop here a moment and have a look at that. It's Beautiful Fountain but unfortunately under construction now.”

「ちょっと立ち止って、あれを見てください。あれは、『美しの泉』です。しかし、残念ながら、今は工事中です」

工事のシートに覆われた泉の塔が、かすんで見える。泉の水は、高さ 19 メートル塔の頂上まで立あがるのだそうだ。どういう仕掛けか、残念ながら見ることはできない。

“Do you know anything about Nuremberg?”

「ニュルンベルクについて何か知っていますか？」

“Well...I know Nuremberg trials.”

「そう・・・ニュルンベルク裁判かな」

第二次大戦後のニュルンベルク裁判で、史上初めて敗戦国の指導者が戦勝国によって裁かれた。第一次世界大戦までは、敗戦国の指導者が「戦争犯罪人」として裁かれることはなかった。「戦争犯罪人」略して「戦犯」の本来の意味は、「戦争をした責任者」でも「敗戦の責任を負うべき者」でもない。「戦争犯罪人」の本来の意味は「戦争犯罪に当たる罪を犯した者」である。

戦争の絶え間なかったヨーロッパにおいて、長い期間を通じて合意されてきた「戦争犯罪」（戦争で行ってはいけない行為）には、例えば、民間人の殺害、捕虜の虐待・殺害、軍事上不必要な都市の破壊、残虐な兵器の使用などがある。

日本人にとって、太平洋戦争（第二次世界大戦）はあまりにも過酷で悲惨なものだった。南方戦線や沖縄戦、東京大空襲や原爆。そのため戦後は、悲惨な戦争に対する嫌悪感がしっかりと伝えられて、「戦争そのものが悪だ」という考え方が、多くの人々にすっかり定着した。しかし、残念ながら、これは世界の常識ではない。

国と国との利害対立は、理想はともかく、現実には避けられないものである。その場合、まず話し合い（外交）での解決を追求する。当然である。しかし、それでもなお解決しない場合は戦争に訴える、ということが国際的に容認されてきた。国家間の利害対立を戦争で解決しようとする考え方は、第二次大戦後のニュルンベルク裁判までは容認され、国際法で合法とも違法ともされていなかったのである。

ところが、ニュルンベルク裁判では、敗戦国ドイツの戦争指導者を「戦争犯罪人」として裁くため、戦後、新たに「平和に対する罪」という罪を作って、「戦争犯罪」に付け加えたのである。

「A. 平和に対する罪：侵略戦争を共謀、遂行した罪」

これによって、被告人 22 人のうち 19 人が有罪とされ 12 人が絞首刑とされた。しかし、一方で、「法律がなければ、罪も刑もない」（罪刑法定主義）という考え方が、司法の大原則とされている。新しく法律を定め、過去にさかのぼって適用するのは「事後法」と呼ばれ、一般に認められていない。A は事後法ではないかと批判された。

「B. 通例の戦争犯罪：民間人の殺害、捕虜の虐待・殺害、軍事上不必要な都市の破壊、残虐な兵器の使用

C. 人道に対する罪：政治的または宗教的、人種的理由に基づく迫害行為」

B は従来からの「通例の戦争犯罪」であるが、C はユダヤ人大虐殺の罪を裁くために新設された罪である。人種主義を動機としたユダヤ人虐殺は「戦争犯罪」ではない。ナチスは、ユダヤ民族の絶滅をはかって国内と占領地域のユダヤ人を殺害したのであって、戦争でユダヤ人を殺害したのではない。

しかも、ユダヤ人に対する差別と迫害は、ナチス以前から長い間、ヨーロッパ各国で行われてきた。それだけに、そのことに対する負い目も、等しくヨーロッパ人全体が感じてきたことだろう。その点からすると「C、人道に対する罪」を戦争と別扱いせず、A、B と共に「戦争犯罪」に付け加えたのは、A の導入を受け入れやすくするためではないか、という疑惑が生じる。

いずれにせよ、日本敗戦後の「東京裁判」にも、この「A、平和に対する罪」が適用され、日本の指導者も処罰された。

罪刑法定主義の考え方から、A は事後法ではないのかと、ニュルンベルク裁判や東京裁判の正当性が疑われてきたが、もう一つ見逃せない事実がある。ドイツのドレスデン空襲、東京大空襲、広島長崎の原爆投下、シベリア抑留などは、「B 従来からの戦争犯罪」の疑いが極めて濃い。しかし、ニュルンベルク裁判でも東京裁判でも、勝者である連合国側の容疑は一切不問にされ、敗戦国の罪だけが問われた。まさに「勝者による敗者に対する裁き」であった。

1933 年、政権を獲得したヒトラーは、ナチ党大会をニュルンベルクで開いた。1356 年、カール四世が、第一回帝国議会を開いて『金印勅書』を發布した都市ニュルンベルクの伝統を意識してのことである。以後も党大会がここで開かれ、ナチ政権を象徴する都市となったニュルンベルクは、第二次世界大戦で英米空軍によって執拗に空爆され徹底的に破壊された。そして、戦後は「戦争犯罪人裁判」をニュルンベルクで開いたのである。ニュルンベルクは、第二次世界大戦の空爆で街の 90% 近くが破壊されたが、戦後、場所も外観も戦災前そのままに復元されて、中世の街並みがよみがえったのである。

私達は、旧市街を南北に二分するペグニッツ川に向かう。アンドレアスが屋根付きの小さな木の橋を指さした。

“This is Hangman’s Bridge.”

「絞首刑執行人の橋です」

唐突にHangmanと言われても思考がついていかない。うーん、なに？「絞首刑」？ 曖昧な表情をする私の顔をアンドレアスが覗き込む。

“Do you understand? Do you know hangman?”

「わかりますか？絞首刑執行人って」

“Hangman? ...To kill criminal?... Ah, executioner?”

「ハングマン？犯罪人を殺す？えーと、死刑執行人？」

“Yes, that’s a hangman’s house. Henkerhaus is German,”

「そう、死刑執行人の家です。ドイツ語でヘンカーハウスです」

橋の途中に、斧で手首を切り落とす絵の木彫りが掛けられた henkerhaus「死刑執行人の家」というのがあって、博物館になっているようだ。しかし、今日は休館かな。私達は窓から中を覗くと、家の前で写真を撮った。

死刑執行人は市民から忌み嫌われていたため、街から外れたところに家を造って住んでいた。しかし、16世紀後半、ニュルンベルクの死刑執行人フランツ・シュミットは、自らの職業を卑下せず、むしろ誇りをもって日記をつけ続けた。父の助手として仕事についてから、45年間に400人近い死刑囚の公開処刑を執行したという。

橋を渡ったところで立ち止まったアンドレアスが、川から中州に渡って建てられている切妻屋根の木骨組みの大きな建物の並びを指さす。

“I’d like you to stop here a moment and have a look at that. That was Hospital of the Holy Spirit for the poor, elderly people and the sick. Now it’s a nursing home and that building is a very nice restaurant.”

「ちょっと立ち止まって、あれを見てください。『精霊救済院』といって貧しい人や老人、病人を救済するための病院でした。今は老人ホームです。そして、あちらの建物は素敵なレストランです」

古い木骨組みの家々は、「精霊救済院」という名の貧民や老人、病人を救済するための施設で、14世紀前半に創設されたものだという。中世ヨーロッパでは、キリスト教の精神から貧民を救済する活動が主に教会によっておこなわれてきた。しかし、この施設は、教会によって設立されたものではなく、当時ニュルンベルクで最も裕福だった商人であり市参事（議員）によって創設されたものである。

“That’s Former Wine Depot and a water tower.”

「あれはワイン倉庫と給水塔です」

“That’s a building that wheat was stored.”

「あれは、小麦を貯えておく建物、穀物蔵」

私達はさらに進み、両側に立ち並ぶ木骨組みの家を眺めながら石畳の坂道を歩いて上る。

“Do you know Durer?”

「デューラーって知っていますか？」

“Yes, I know. He was born in Nuremberg?”

「うん、知っているよ。ニュルンベルクに生まれたんだよね？」

ドイツを代表する画家デューラーは、1471年ニュルンベルクに生まれた。ルネサンス期、ラファエロと年代で、15世紀末と16世紀初め二度ほどイタリアを訪れ、ルネサンス芸術をドイツにもたらしたとされる。

“That’s Durer’s House.”

「あれがデューラーの家です」

一階二階が石造りで三階四階が木骨組み、切妻の屋根には大きな屋根窓がついている。手前の小さな広場には、不気味でグロテスクな巨大な野ウサギの彫刻がある。デューラーの代表作の一つの「野ウサギ」をもじったもので、1984年に作られたそうだ。

私達は、城壁に沿って石畳の坂道を歩く。めざすはカイザーブルク城だ。神聖ローマ帝国には帝都がなく、皇帝は広い領土内を移動して統治していた。一か所に留まって領土全域を支配するだけの中央集権的な統治機構や力がまだなかったからで、この点では他のヨーロッパ各国も同じである。しかし、この城には歴代の皇帝がしばしば、そして長期的に滞在した。だから、カイザー（Kaiser 皇帝）ブルク（burg 城）なのである。ニュルンベルクは、皇帝から特別の庇護を受けて発達した中世都市である。

坂を上り城門をくぐって、私達はひと休みした。アンドレアスは、バックパックからペットボトルを取り出し、一口飲んでから私に訊く。

“Do you have anything to drink? No? Do you want some water?”

「なにか飲み物を持っていますか？・・・水だけど飲みますか？」

一口飲んだペットボトルをそのまま私に差し出す。私は、思わず“Oh, thank you.”と受け取った。やさしい若者なんだ。その後も、立ち止っては、一生懸命説明してくれる。私が、うなずきながら理解できない部分は適当に聞き流していると、すかさず “Do you understand?” 「わかりますか？」と、私の顔を覗き込んでくる。いや、油断できない。ともかく、真面目なんだ。

「五角形の塔」の前の城壁の横に立つと話し出した。

“Can you see this? Does it look like a mark of horseshoe? There was a legend of it. There was a robber who was a knight. He was caught and going to be hung. But he jumped the horse over the wall and ran away. The horse made the mark on the wall when it jumped over.”

「これ見分けがつかますか？馬蹄の跡のように見えますか？この跡について言い伝えがあるんですよ。騎士の強盗がいて、捕まって絞首刑になるところだったんです。しかし、彼は馬をジャンプさせて壁をのりこえて逃亡したんです。これは、馬がジャンプするとき壁につけた跡なんです」

“That was a stable and wheat storehouse for Kaiser. Now it’s a youth hostel.”

「あれは皇帝の厩舎と小麦貯蔵庫で、今はユースホステルになっています」

城砦の中でひととき目立つ円柱の建物はジンヴェル塔という。いかにも頑丈そうな造りの最上部は見張り台になっている。これはベルクフリート（主塔 最後の砦）だろう。手前の建物の中

には深さ 50 メートルの井戸がある。城砦にとって安全な水の確保は最重要事項の一つだ、頑丈な石造りで囲った上に切妻屋根の木骨組み家屋が載せてある。

ジンヴェル塔の横の城門をくぐり抜けると小さな広場になっていて、南側に面した城壁の先にニュルンベルクの旧市街が広がる。バイエルンカラーの青空と白い雲の下に、赤茶色の切妻屋根が幾重にも立ち並び、尖塔が点在する。第二次大戦の空爆で90%が破壊されたなどとは到底信じられない。中世にタイムスリップしてしまいそうな景観である。

カイザーブルク城を出て南へ少し歩くと、市庁舎広場に出た。二羽のガチョウを両腕に抱えた農夫の彫像があって、ガチョウのくちばしが噴水になっている。

“The goose Man’s Fountain. There was a story that the farmer’s geese saved his life.”

「ガチョウを飼う農夫の泉ですよ。ガチョウが農夫の命を助けた話があるのです」

ある猛暑の日、育てたガチョウを売ってビールを買おうとニュルンベルクの街に出かけた農夫が、暑気にやられて意識を失う。「飲みなさい、飲みなさい」という声に意識を取り戻した農夫が顔を上げると、ガチョウがくちばしから冷えた水を噴きだしている。命を助けられた農夫は、売るのをやめて大切に育てたとき、というお話があるんだって。

噴水の前にホテルがあって、その一階がレストランになっている。私達は広場に並べられたテーブルに着くと、噴水の水ではなく生ビールで乾杯し、ニュルンベルク・ソーセージを注文した。ギンターが私に笑いかける。

“How many sausages do you want? You can order six or more”

「何本欲しい？6本以上なら何本でも注文できるよ」

運ばれてきた6本のソーセージには炭火の焦げ目がしっかりついていて、その横に、茹でた細切りキャベツがたっぷり盛ってある。ヨーロッパの人々は、屋外のテーブルで飲み食いするのが好きだ。確かに、空気は乾いているし、蚊はいないから外の方が気持ちがいい。ただし、トイレはレストラン屋内の奥だから遠くなる。

私はトイレに立った。カウンター内に立つバーテンダーが指さした先は地下だった。階段を下りた手前のドアに民族衣装を身に着けた人物画がある。（あれ、こちらが男性用かな？）、するとトイレをすませた男性が奥からやってきて背後を指さす。

“For men, over there.”

「男は向こうだよ」

民族衣装をまとった人物画は、スカートはいた女性なのか、半ズボンの男性なのか判別しがたい。トイレでまごつくことがないよう、これだけはと事前に覚えてきたドイツ語が Herren（男性）と Dame（女性）だったが、なるほど絵の横に Dame とある。それにしても、紛らわしい絵だ。

トイレから戻ると、入れ替わりモニカとアンドレスがトイレに立った。私は手を上げてウエイトレスに合図したが、勘定は、モニカがすでに済ませていた。

ビールとソーセージで元気を回復した私達は、旧市庁舎の前を歩いた。石畳の路に構える石造りの四階建ての市庁舎は実に立派だ。その左手に「聖ローレンツ教会」がある。13世紀に創建され、14世紀に改築されたゴシック様式の巨大な教会である。

夏の日射しは厳しくても、日本と違って空気の乾いているヨーロッパでは、日陰に入ると涼しい。まして、石造で天井の高いゴシック様式の厳かな教会内に立つと、涼しいどころか冷気さえ感ずる。石柱が何本もまっすぐ上へ延びる。聖書のストーリーを描くステンドグラスも、天井に届かんばかりに細長く高い。建物全体の構造が、ひたすら垂直に天国を目ざしているかのようだ。アーチ型の天井と、天井の荷重を柱に逃がすため放射状に広がるリブが次々と連なっている。その構造美が素晴らしい。ギュンターが天井から吊るされたレリーフを指さす。

“That’s the famous relief.”

「有名なレリーフだよ」

“What relief is that?”

「何のレリーフ？」

“It’s about the scene that the angel announced Maria about Virgin birth.”

「天使が聖母マリアに処女受胎を知らせているところ」

教会を後にして、私達はゲルマン国立博物館に向かった。

“This is the street of human rights.”

「これは人権の道です」

ニュルンベルク市は、ナチスと関わった過去から、人権について特別な歴史的責任を負うと考えた、というか表明せざるを得なかったのだろう。1993年、博物館の旧館と新館の間に、イスラエルつまりユダヤ人芸術家のデザインした「人権の道」を設け、2001年には、「人権の推進に積極的に貢献する」という目標を市議会の全会一致で採択した。

「人権の道」には、ホワイトセメント製の太い円柱が並んでいて、各国憲法の人権にかかわる条文が刻まれている。日本の柱には、「憲法 26 条 教育を受ける権利」が日本語で刻まれている。ただ、イスラエルとパレスチナとの戦争について考えたり、人権活動家や少数民族を厳しく弾圧している中国の柱を見たりすると、ちょっと白々しい気分になってしまう。

博物館の入り口には大きな地球儀が展示してある。

“This globe is said to be the oldest in the world in existence.”

「この地球儀は現存する世界最古の地球儀だと言われています」

“Really?” 「へえ、そうなんだ」、でも、日本の「高校世界史」の教科書には、この地球儀のこ  
と載っていない。

1494年にニュルンベルクで制作されたという。ということは、その2年前に、コロンブスがアメリカ大陸に到着している。コロンブスは、その後3回、だから計4回アメリカに行ったが、彼は死ぬまで、そこがアジアの一部であると思いこんでいた。つまり、そこが、当時のヨーロッパ人にとって未知の大陸であるということを認識していなかった。ギュンターが、むふふと含み笑



いしながら指さす。

“Look, there is not the American continent on it.”

「ほら、アメリカ大陸がないだろ」

“Yes, and this island is Japan.”

「うん、で、この島は日本だ」と私は指さした。

コロンブスが従来からのアジアへの航路であるアフリカ回りをとらず、大西洋をつき切ってアジアを旨ざしたのは、イタリアの学者トスカネリの地球球体説を信じたからだと言われている。この地球儀は、トスカネリの作成した世界地図に基づいて制作されたのだろう。ヨーロッパ大陸とアジア大陸の間にアメリカ大陸はなく、中国の手前の海には大きな島国「ジパング」が描かれている。

それにしても、アンドレアスもギュンターもモニカも三人とも熱心で、なかなか地球儀の前から離れようとしなない。ということは、この地球儀は、この博物館の貴重な宝物なんだろう。

この博物館には、5万平方メートルの面積に、紀元前3万年から現在にいたる様々な品々が展示されている。コイン、秤、楽器、玩具、民芸品、生活用品、武器、絵画、彫刻など、もう、ありとあらゆる分野の品が展示されている。三人は結構丁寧に見て回り、私に説明し、意見を求めるような表情をするので、私はすっかり疲れてしまった。

博物館を出た私達は、少し離れたショッピングセンターの四階のカフェに行った。

“We can have something to drink for this ticket.”

「博物館の入場券で飲み物が一杯飲めるんだよ」

私は、オレンジジュース、モニカとアンドレアスはコーヒー、ギュンターはやっぱりビールを注文した。私は、アンドレアスに話しかけた。

“Thank you, I had a great time today because of you. Are you having a day off today?”

「ありがとう。君のおかげで、今日はとっても楽しかったよ。今日は休みなの？」

“I have four days off, today, Friday, Saturday and Sunday.”

「今日だけでなく金土日も休みです。四日間」

“Four days off in a row? Great. What do you do?”

「四日連続?すごいね。仕事は、何？」

“I work for a hospital as a therapist for patients suffering from like Parkinson’s disease.”

「病院のセラピストです。パーキンソン病みたいな病気を患っている患者のための」

“It’s a difficult job, isn’t it?”

「大変の仕事だよ」

“Yes, it is but I like it.”

「ええ、でも私はこの仕事が好きですよ」

アンドレアスは車に同乗し、駅で降りると、私達が見えなくなるまで手を振っていた。

“He is a very nice person.”

「彼は、とても親切な人だね」

“Yes, he is.”

「ええ、そうね」

車がシュヴァインフルトの街に入った。メイン川の堤防に差し掛かると、ギュンターが右手を指さした。

"Look! They are watching the EU cup semifinals."

「ほら、サッカー欧州大会準決勝を観戦しているんだよ」

グラスを片手に大勢の人が大型スクリーンでを観戦している。サッカー欧州選手権の準決勝でドイツがフランスと戦っている。

家に着くと、私達はテレビの前に陣取ってビール片手に観戦した。すでに後半戦に入っており、ドイツは0-1で負けている。私はドイツが勝つよう願った。一日の終わりで、ギュンターとモニカの気分を壊したくない。(いけー)、ドイツは必至で反撃する。フランスは守りに入る。ドイツが攻める。攻めるドイツのミスからカウンター、フランスが追加点を挙げる。(あーあ)、結局0-2でドイツが負けた。

前半の先取点のシーンが繰り返し放映される。0-0でロスタイム、ドイツ守備陣に痛恨のハンド、判定はPKこれををフランスがきっちり決めて先取点。ギュンターは悔しそうな表情を浮かべると、私に怒りをぶつける。

"What do you think of the judge? Was it PK?"

「あの判定をどう思う？あれがPKか？」

下手なことは言えない。

"I don't think so. It was a mistake."

「あれはないよな。間違いだろ」



仕掛け時計 七人の選帝侯



精霊救済院



カイザーブルク城から見た旧市街



聖ローレンツ教会



カイザーブルク城へ

7月8日（金）Iphofen（イプホーフエン）→Munich（ミュンヘン）→Schongau（シヨーンガウ）

---

朝食後、私達三人はギュンターの運転で出かける。今日も空は青い。モニカが助手席のグローブボックスから携帯用のナビを取り出してセットする。

“This car is old, so it doesn't have a navigator in it.”

「この車は古いからナビがついていないのよ」

私は、今がチャンスだと思って提案した。

“Monika, you should sit in the front seat so that you can help Günther drive.”

「モニカは前の座席の方がいいんじゃないの、そうすればギュンターの運転を助けることができるから」

（やった）と心の中で叫んで、いそいそと後部座席に腰を下ろした私は、ほっとして腕時計を覗いた。9時半だった。今日のメインはミュンヘン見学で、その後さらに南下し「新白鳥城」近辺のホテルに一泊する。しかし、ミュンヘンの前にシーボルト関連のクナウフ博物館に立ち寄ることだ。

“The Knauf Company located in Iphofen is one of the biggest producers of gypsum. It donated the museum.”

「ギプスの最大手であるクナウフ社はイプホーフエンにあって、博物館を寄贈したんだよ」

助手席にモニカが座ると、二人の会話が活発になり、とぎれなくなった。モニカが話しかけ、ギュンターが応える。ギュンターが話しかけモニカが応える。ギュンターがモニカに顔を向ける、ハンドルから手も離してジェスチャーを交える。

（うわあ、これはまずい）

“What are you talking about? When I drive a car with my wife sitting next to me, my wife and I are not talking very much.”

「二人とも、何話してるの？私が運転して、横に妻が座っているとき、私と妻はあまり話さないよ」

“Oh, I can't remember what we were talking about just a few minutes ago. It was nothing important.”

「えっ、今さっき何話してたか思い出せないよ。大したことじゃないよ」

一時間ほど走って小さな集落に入ると、ギュンターは路上に車を止めた。イプホーフエンは小さな村だが、ワインの産地として知られている。モニカはバッグをクルマの中に置いたままだ。大丈夫かなと私は心配したが、この小さな村には「車上狙い」をするような不埒な人間はいないのだろう。

一階だけの小さな美術館で、「シーボルトの根付と日本の美」という展示が行われていた。展示品は、浮世絵と「根付」とシーボルト関わるものだが、メインは中央に並ぶショーケースの中の「根付」である。

「根付」とは、江戸時代の道具で、煙草入れ、矢立（携帯用筆記具）、印籠（葉入れ）などを

帯に挟んで腰に吊るす際のストッパーである。木、竹、骨、角、金属、水晶、象牙などの材料に、人物や動物などの細密な彫刻が施されている。本来は実用品だったが、やがて、細工や彫刻に凝るようになるとアクセサリ的な要素が強くなっていった。実用品としての機能を失わずに、いかに見事な細工を施すかが職人たちの間で競われた。「根付」は、江戸の町人文化が花開いた文化文政期（1804~27）に最盛期を迎え、粋な男の装飾品となったのである。

私達が入って行くと、テレビカメラを構えた数人のグループが、奥のガラスケースを囲んでいる。中には、シーボルトと娘のおイネの肖像画が並び、その前には遠眼鏡、時計、印籠など小物が置かれている。おイネの肖像画は、私達がよく見る有名な少女の姿だがオリジナルではないだろう。オリジナルは、お滝の注文で長崎の職人が作った螺鈿細工らでんだと思う。

1829年、国外追放となって帰国する際、オランダ領バタビア（インドネシアのジャカルタ）に到達したシーボルトは、お滝に手紙を書き、贈り物を送った。贈り物は役所の検閲を受けたのち、お滝のもとに届けられた。銀十貫目、指輪10個、指ぬき7個、反物十反、髪飾り7個、櫛、美しいガラス製の皿であった。

自分と娘のおイネを気遣うシーボルトの愛情に感動したお滝は、返信をしたため、シーボルトに学んだ日本人医師に翻訳を依頼し、その発送を託した。そして、なにか贈り物と思案して、黒漆塗りの煙草入れを買い求め、その蓋に自分と娘の姿を描くよう絵師川原慶賀に依頼した。川原慶賀は、蓋の表面にお滝、裏面におイネの姿を克明に描き、その絵に細工師が透明な青貝の薄片をはめ込んだ。螺鈿細工らでんである。

慶賀は、出島出入りを許された町絵師である。シーボルトの注文で日本の風景や風俗、さらには精細な動植物の写生図を数多く描いた。シーボルトは、著書『日本植物誌』、『日本動物誌』および『日本』の挿絵に慶賀に描かせた写生図を用いたのである。慶賀はシーボルトの江戸参府旅行にも同行し、シーボルトの注文で様々なものを写生した。いわば、シーボルトのカメラのような役割を果たしたのである。長崎歴史文化博物館が所蔵するシーボルトの肖像画も慶賀が描いたものである。

この螺鈿細工の施された煙草入れは、現在は長崎のシーボルト記念館所蔵で国指定重要文化財になっている。今から190年前、日本を去ったシーボルトが、その30年後の1859年、再来日したとき持参したものだ。33歳だったシーボルト、23歳だったお滝、まだ2歳だったおイネも、それぞれ63歳、53歳、32歳になっていた。シーボルトが国外追放になった一年後、お滝の贈った「煙草入れ」が、ちゃんとシーボルトのもとに届けられ、その30年後また日本に戻り、今は重要文化財として長崎に保存されている。ただただ、その事実に感動する。

ガラスケースを囲んでテレビカメラを構えていたグループの、ひとりの女性が私の顔をじろじろと見て、モニカにJapaner?（ヤパーナ 日本人）と訊いた。モニカが「そうだ」と応えると私のほうを向く。

“Where are you from in Japan?”

「日本のどちらの出身ですか？」

“My hometown? It's in the middle between Tokyo and Osaka.”

「私の住んでいるところは東京と大阪の真ん中です」

“Gifu?”

「岐阜ですか？」

(えっ?なぜ岐阜なの?)

“No, it's not Gifu. Have you been to Gifu?”

「いえ、岐阜ではありません。あなた岐阜へ行ったことあるんですか？」

“No, I haven't. But some Japanese stayed at my friend's house. They were from Gifu. Isn't it in the middle of Japan?”

「ありません。何人かの日本人が私の友人の家にステイしたのですが、彼らは岐阜出身でした。岐阜は日本の真ん中ではないのですか？」

“Oh, I see.”

「なるほどね」

“Is Netuke popular In Japan? Have you seen Netuke exhibition in Japan before?”

「日本で、根付は人気がありますか？日本で根付の展覧会を見たことありますか？」

うーん、どうだろう？「根付」って、一部の愛好家の間では盛んかもしれないが、あまり一般的ではないと思う。でも、会話の流れで、ついつい <sup>うなず</sup> 頷いてしまった。

“Popular?...I think so... Ah, yes, I have seen such exhibition before.”

「人気があるかって？うん、そう思うよ。以前、そんな展覧会を観たことあるよ」

それから、しばらく、私はモニカとギュンターと共に、ケースの中のさまざまな根付を眺めていた。すると、先ほどの女性がやってきて Excuse me 「すみません」と私に声をかける。

“Please, stand over there and look at the Netuke called Tenaga and ashinaga. That cameraman will shoot you.”

「あそこに立って、『手長足長』の根付を見ていただけませんか？カメラマンがあなたを撮ります」

(はあ?)と、ショーケースの向こうを見ると、カメラマンがテレビカメラを三脚にセットしてスタンバイしている。OK と、私は応えて、ショーケースの前に立ち、指示された「手長足長」の根付をじっと見つめた。足長の老人が手長の若者をおんぶしている。しばらくして、カメラマンがショーケースを回ってこちら側に来ると私に演技指導する。

“No, no. It's not a picture. It's a video. Please you move like this.”

「ダメ、ダメ。これは写真でなくて動画なんだ。動いてください。こんな風に」

“Hum, I'm like an actor.”

「ふむ、オレって俳優みたいだな」

と、つぶやいて私は、指導されたとおりに演技する。それから顔を上げてカメラマンを見た。カメラマンはカメラから眼を離して私にうなずき、親指を立てOKの合図を出した。演技を終えた私は自分のカメラを取り出すと、シーボルトとおイネの肖像画に向けた。すると、カメラマンがやって来る。

“May I shoot you taking pictures?”

「写真を撮っているところを撮っていいですか？」

私が OK と応えてポーズをとると、その姿もテレビカメラに収めた。

“Is this a TV program?”

「これテレビ番組？」

“Yes, it’s the local TV station here.”

「ええ、地元のテレビ局ですよ」

“When will it be televised?”

「いつ放映するの？」

“The date hasn’t been set yet.”

「日にちは、まだ未定です」

カメラマンや女性スタッフと握手してから、私達は美術館を出た。歩きながら、道沿いの小さな家に目をやると、涼しげに緑の葉を茂らせた蔓が地面から壁を這い窓辺にまで達している。よく見ると、葉の中に緑の小粒なブドウの房が隠れている。なるほど、ここはワインの産地なんだ。モニカのバッグが車の中で私達を静かに待っていた。腕時計を覗くと、針は 11 時半を回っていた。

(注) 帰国後、「手長足長」を調べてみると、中国や日本に伝わる妖怪で、海や湖で漁をする場合、足長人が手長人を背負い、手長人が獲物を捕らえるのだそうだ。葛飾北斎の作品の中にも「手長足長」がある。

途中ドライブインに寄った。私はコーラを注文したが、モニカもギュンターもコーラだったのでほっとした。そうか、ドライブインだから、アルコールは置いていないのか、と思って見渡すと、あれっ、ビールがちゃんと置いてある。

“I’m going to the bathroom.”

「トイレに行ってくる」

と、立ち上がった私にモニカが言う。

“You need two coins, 50 cents and 20.”

「コインが二枚いるよ。50 セントと 20 セント」

私はポケットを探って小銭を取り出し、50 セントコイン一枚と 10 セントコイン二枚を残した手のひらを、“Here” 「ほら」と見せた。モニカは “No, no” と手を振ると、自分の財布から 20 セントコインをつまみ出して私の手のひらに乗せた。

“No, you need just two coins.”

「コインは二枚でないとダメなのよ」

階段を下りた地下にトイレがあった。ゲートバーの横にコインを入れる箱がある。コインを二枚入れるとレシートが出てきてバーが開く。コイン二枚だろうが三枚、四枚だろうが、合計 70 セントの自動機なんて簡単に造れるのに、なぜ二枚なのかわからない。

トイレから帰ると、モニカが訊く。

“Do you have the receipt?”

「レシート持ってきた？」

“No, I don't. I put it in a bin.”

「いや、ゴミ箱に捨てたよ」

“Oh, you can have a cup of coffee for the receipt.”

「ああ、レシートがあればコーヒー一杯飲めたのに」

（えっ？）なぜ？ホームレスとか不審者の侵入を防ぐため、一応おカネはとるけれど、後で還元するね、ということかな。

駐車場に戻ると、モニカが言う。

“Yoshi, you sit in the front seat.”

「ヨシ、前の席に掛けなさい」

視界の広い助手席でミュンヘンまでの景色を楽しみなさい、という心遣いである。断るわけにはいかない。私は観念した。一休みしたギュンターが気合を入れてハンドルを握る。しかし、交通量は多く、工事中的場所も結構あって、スピーを出せない。私はうれしくなって、ギュンターに話しかけた。

“It's a beautiful day, isn't it?”

「いい天気だねえ」

“How is the weather in Japan now?”

「日本の天気は、どんな様子だい？」

“It's very hot and really humid. The air is dry here in Germany. It's very nice and no mosquito. People enjoy eating and drinking outside but in Japan it's difficult.”

「とても暑くて湿度も高い。ドイツの空気は乾いていて、とても気持ちがいいね。蚊もいないし。だから、みんな外で飲み食いするのが好きなんだ。日本では無理だ」

やがて、ギュンターが右前方を指さした。

“We are almost there. Look at that. It's Allianz Arena.”

「もうすぐだよ、ほら、あれはアリアンツ・アリーナだ」

指さす先に、蚕の繭のような形の巨大なサッカー・スタジアムが現れた。見たことがある。そうだ、モニカの送ってくれた本に載っていた。2006年ドイツワールドカップの開幕戦が、ここで行われた。

地下の駐車場に車を止め、地下鉄に乗ってミュンヘン中央駅に出ると市内観光バスツアーのチケットを購入した。

購入したのは、Express Circle という市の中心部を約一時間で回るショートコース。六カ所に停車し乗り降り自由、日本語の音声ガイド付きで、バスは20分おきに運行している。料金は17ユーロだから、レートを119円として、ざっと17×120、えーと約2000円かな。

次の出発時刻は15:40で、まだ10分ほどある。さっきから気になっているのは、昼食のことだ。まだ食べていない。ドイツ人の場合、三食のうちのメインは夕食でなく昼食のはずだが、どうなってるんだろう？バスを待ちながら、モニカとのメールを思いだした。

“I read that German people eat their biggest meal of the day in lunch. Is it right?”



「ドイツ人の食事のメインは昼食だって本で読んだんだけど、本当？」

“That’s right. German people eat their biggest meal at lunch, but not all.”

「本当だよ。昼食がメインね、だけどドイツ人全てがということではないよ」

私達は、オープントップの二階建てバスの二階席の前から二列目に腰をおろした。私は、音声ガイドに耳を傾け、夏の陽光がきらめくミュンヘンの市街地に目をやる。さわやかな微風が頬を撫でる。ああ、お腹すいたなあ、ジョッキ片手の市内観光であれば最高だけど。私の故郷、豊橋の市電には、この時期、「納涼ビール電車」というのがある。街並みを眺めながら生ビール飲み放題だ。しかし、日本と違って、欧米では公共の場での飲酒はご法度である。

中央駅前を出発したバスは、ゆっくり進み、やがて「芸術地区」で停車した。ここには、古典から近代、現代までの名画や様々なアートを展示する博物館や美術館が集中している。数人が降りる。次は、オデオン広場で停まり、それからバイエルン州立歌劇場を経てマリエン広場で停まる、私達は下車した。ミュンヘンの旧市街は、円状に走る大通りに囲まれていて、その中心にマリエン広場がある。広場の中央には黄金のマリア像が輝いている。

広場に面して、歴史と風格を感じさせる五階建ての古びた建物がある。新市庁舎だ。1867年から1909年に建てられたネオゴシック様式というのだそうだ。なるほど、中央部に張り出した塔は高く、ひたすら天をみざしているようだ。その尖塔に仕掛け時計があつて五時に動き出す。それを観るため観光客がマリア像の周辺に群がっている。

私達は、広場を挟んで市庁舎の真反対にある建物の四階のカフェに陣取った。窓際のテーブル席の真正面に仕掛け時計が見える。モニカはカプチーノ、私はビターレモンと水、ギュンターはビールを飲みながら時間を待った。時計の仕掛けは、1568年、バイエルン大公の結婚式を再現したもので、動く32体の人形は等身大だそうだ。

五時だ、鐘が鳴る。王と王妃の観覧席の前を音楽隊が回る。左右から、馬に乗って槍を構えた騎士が現れる。中世の馬上槍試合だ。青と白のバイエルンの旗を馬に敷いた騎士が一突きで相手を倒す。拍手喝采。そのあと、ビール樽を作る職人たちがくるくると回って踊る。

（あれっ？）、仕掛け時計の階上に人の姿が見えるぞ。まさかと思ったが、やっぱり人だ。

“Look, there is someone on the floor up the clock.”

「見て、時計の階上に人がいるよ」

グラスを空けたギュンターが私の顔を見る。

“Yes. Do you want to go up to there?”

「人だよ。あそこまで上りたいかい？」

私達は、市庁舎の塔を上ることにした。高さ85メートルだそうだ。エレベーターで四階まで上るとチケット売り場があつて、そこから別のエレベーターで九階まで上る。ちょうど仕掛け時計の上になる。私は手すりに手をやり、恐る恐る広場に群がる人々の姿を見下ろした。それから、狭い通路を人とすれ違いながら南側に回る。青空を背景に真っすぐ立つのは、ペーター教会の尖塔で鐘楼の下に大時計がある。時計の針は5時35分を指している。（あれえー？）、時計の下に人が何人も立っている。金網のようなフェンスに囲われているが、足元まで透けて見える。あそこに立つのは勇気があるな。塔の高さは92メートルで、エレベーターはついていない。あの人た

ちは、294 段の階段を歩いて登ったのだ。モニカが送ってくれた写真集には、ペーター教会の尖塔から南を撮った写真が載っていて、ミュヘンの街の先に、アルプスの白い連峰がくっきりと写っていた。その写真の説明文を思い出す。時期は冬だろうな。

“Standing at the top of the steeple of Alter Peter and looking south, the distant Alps seem almost close enough to touch.”

「ペーター教会の尖塔のトップに立って南を眺めれば、遠方のアルプス連峰が、ほとんど手が届くかのような近さに見える」

写真と説明文を想起しながら目を凝らすと、青空の広がるはるか彼方に、ぼんやりと青い山並みが見える。しかし、その上には雲がかかっているアルプス連峰は見えない。

夕飯は、ドイツで一番有名なビアホールだとガイドブックにある「ホーフブロイハウス」でとる。「宮廷ビール醸造所」という意味で、1589 年にバイエルン王家の醸造所として設けられた。3000 人を収容するというホールには、溢れんばかりの人々がジョッキを傾け、料理を楽しみ談笑している。生のバンドが演奏している。天井には料理や野菜、果物、ビヤ樽、ジョッキ、麦、さまざまな絵が描かれ、ホール奥の中庭のテーブルも満席だ。バイエルンの民族衣装のかわいらしい女性が、ドイツパンの大きなプレーツェルを素手のまま右手で掲げ、左腕に籠をかけてテーブルを回っている。あのパンはビールのつまみにもなるそうだ。

ホール奥の長テーブルに着いた私達は、まずビールを注文する。ジョッキは一リットルだが、500 ミリのグラスビールもあるという。

“I'd like one liter.”

「1 リットルがいいな」

“Oh, Yoshi, I think one liter is too much for you. Günther and I will share one liter. You'd better have a half.”

「えっ、ヨシ、1 リットルは多すぎると思うよ。ギュンターと私は、二人で1 リットルを飲むのよ。ヨシも、500 ミリにすれば」

“No, no I want one liter.”

「いや、1 リットルがいい」

私は、どうしても1 リットル飲みたかった。逆に、ギュンターが1 リットルをモニカとシェアするという事に私は驚いた。

運ばれてきたのは、意外にも黒ビールのようなだった。ギュンターが注文したのは、1589 年創設時に醸造されたダークビールだそうだ。とりあえず、ギュンターと私はジョッキを合わせ乾杯した。昼食抜きのお腹にビールがしみわたる。

料理のメニューをざっと見ると、Bavarian Veal (バイエルンの子牛) という文字が目に入ったので、“This one.” 「これ」と注文した。

目の前に置かれた料理に見覚えがある。そうか、ローテンブルクの帰りに食べたカツレツ「ヴィーナー・シュニッツェル」(Winer Schnitzel) だ。付け合わせは、ポテトサラダとクランベリーという見た目ブルーベリーのようなものだった。

(あれっ?) ギュンターの料理も、あの時と同じ豚のすね肉のローストだ。「シュヴァィネハクセ」(Schweinehaxe)という。

ミュンヘンを出発したのが午後八時半、それから進路を南西にとって車を走らせた。ギュンターがギアチェンジに苦労している。ギアをさっと入れ替えることができないのだ。ぶつぶつ文句を言いながら何度も押したり引いたりしている。モニカと二人で、何か言いあっているが、ドイツ語なのでわからない。エンジンの調子が悪いのかな? やがて、小さな街に入り、ホテルの前に車を止めた。何か焦げ臭い。

“What’s this smell? Don’t you smell something burning?”

「なに、この匂い? なにか焦げ臭くない?」

運転席のギュンターは、何かつぶやいて両手を広げ、車を降りてボンネットを開ける。

(わっ)、黒煙が立った。私は驚いてギュンターの顔を見た。

“Is anything wrong with the engine?”

「エンジンのどこかが悪いの?」

“I’m not sure. I’ll have to call a mechanic.”

「わからん。修理工に電話しないといかん」

(これ、ヤバくね?)

走行中に発火したらどうなるの? 私は怖くなったが、ギュンターもモニカも厳しい顔をしているので黙った。

チェックインしたときは、もう10時をまわっていた。ギュンターはフロントの係に相談し、自動車修理工場の電話番号を訊いては何度も電話する。モニカも不安そうにギュンターの電話に聞き入っていたが、それでも私を振り返り大丈夫だよという表情をする。

“Yoshi, come to the yard after you put your bag in your room. And we’ll have a glass of beer before going to bed, ok?”

「ヨシ、荷物を部屋に置いたらこの庭へ来てね。寝る前にビールを一杯飲みましょう、OK?」

私の部屋が三階でモニカたちの部屋が二階だった。鍵をドアに差し込んで回す。ところが、勝手が違うのか、右に回しても左に回してもドアは開かない。しかたがないので、一階まで下りていくと、ギュンターとモニカが何か言いあっている。私はギュンターに助けを求めた。ギュンターが鍵を差し込んでぐっと左に回すと、カチッと音がしてドアが開いた。なるほど、左に回すと一旦止まるのだけれど、そこからさらに力を入れて回すのだ。

ギュンターと二人そろって一階に下りていくと、モニカが待っていてギュンターに強い口調で何か言う。ギュンターが少し言い返す。モニカがまくし立てる、ギュンターは黙りこくってしまう。部屋の中で言い争いして、その続きのようだ。車の故障が心配で二人とも気が立っているのだ。

ビールが運ばれてきて、私達はグラスを合わせて乾杯したが、とっぴり暮れた中庭で、会話は途切れたままだ。ビールを飲みほすと、お開きにした。

この街はショーンガウ（Schongau）という。いわゆる「ロマンティック街道」のアウクスブルクとフッセンの間に位置する街で、市壁に囲まれた中世の旧市街が状態良く保存されている。

ドイツの「ロマンティック街道」とか「メルヘン街道」とかいう名は、適当につけたニックネームではない。ドイツ政府観光局や自治体が、特定のテーマを設定して、それに関連する都市を選んで結んだルートで、外国人観光客を呼び込むために企画されたものである。ドイツ国内に100ほどある愛称つきの街道のうち、日本人に最もよく知られ人気のあるのが、このロマンティック街道である。北はヴェルツブルクから、ローテンブルクを経て、南は「新白鳥城」で知られるアルプス山麓のフュッセンまで、車で約307キロのルートである。ちなみに、東京駅から名古屋駅までが車で約350キロだそうだ。



クナウフ博物館 テレビ局スタッフ



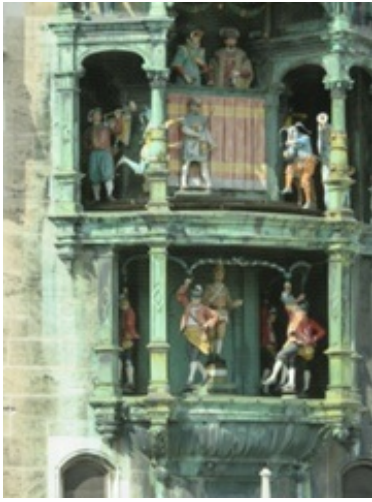
根付『手長足長』



肖像画 シーボルト おイネ



ミュンヘン新市庁舎



仕掛け時計



ペーター教会尖塔



ホーフブロイハウス



ホーフブロイハウス

## 7月9日（土）Neuschwanstein（新白鳥城）→Bamberg（バンベルク）

---

八時半に待ち合わせてダイニングで朝食をとる。ギュンターが食事を急ぎながら言う。

“After breakfast, we'll have to go to the mechanic first. So, we are leaving at 9:00.”

「朝食が済んだら、まず修理工のところに行く。だから出発は九時だ」

“I hope that the trouble is not serious.”

「大したことないといいんだけどね」

私は席を立ててコーヒーをとりに行き、前に立つモニカに訊いた。

“You got angry a little bit last evening, didn't you?”

「昨晚、何か怒っていたね」

“He said to me ‘Be quiet.’”

「あの人、私にBe quietと言ったのよ」

ふむ、日本語に訳すと、「うるさい」、「黙れ」、「静かに（してください）」ってところだが、昨晚の場合は、どれかな？

部屋に戻った私は急いで準備したが、ちょっとお腹の具合が悪い。二度もトイレに入って時間が過ぎる。ギュンターが部屋のドアをノックする。

“Yoshi, it's time to leave. Hurry.”

「ヨシ、出発の時間だよ。急いでくれ」

“I'm coming, sorry.”

「今行くよ。ごめん」

部屋のドアを開けると、出発の準備を整えたギュンターが厳しい顔をして立っている。

“Yoshi, we are in a hurry. You know, I'm nervous about the car trouble.”

「ヨシ、急いでいるんだよ。わかるだろ、車のトラブルで・・・」

“I know, I know, I'm really sorry.”

「ごめん、ごめん」

“be nervous” の日本語訳は「神経質になっている」とか「イライラしているんだ」だけれど、ギュンターの今の気分は、どちらだろう？などと考えながら、私は急いで部屋を出た。

ギュンターは車を郊外の修理工場へ走らせた。車は走るし、焦げ臭い匂いもしない。田園風景の中に親子二人だけでやっている修理工場があった。ボンネット開け、中を調べる。ギアオイルが漏れていたようだ。昨日の黒煙は漏れたオイルが熱で燃えたからだろう。修理工は、さほど深刻な表情を見せず、ギアをいじり、オイルをつぎ足すと、ネジをしめた。それから、車に乗り込むと一回りしてきてOKの合図をした。ギュンターは代金を支払い修理工と握手する。

私達は車に乗り込んだ。心配だったが、ギアチェンジもスムーズにできるし、ノッキングするわけでもない。まあ、大丈夫そうだ。ギュンターはギアを入れて加速する。

それにしても私が来てから、このフィアットは何キロ走行したのだろう。昨日だけを振り返ってみても相当な距離だ。まず自宅のシュヴァインフルトから「シーボルトと根付け」のイプホーヘンまで行って、そこからミュンヘンまで。そしてミュンヘンからショーンガウまで走って一泊

した。

注記：グーグルマップに「自動車の走行距離」を計算できるサイトがある。帰宅後、計算してみると合計 374 キロで、これは東京から名古屋までの 350 キロを超えている。

車は、ロマンティック街道をひたすら南下する。そろそろ、アルプス連峰の姿が見えてもいい頃だが、あいにく空は白い薄雲に覆われている。車は、いくつも街を走り抜けた。やがて、視界が開けて平坦な田園が続く。終着点のフュッセンも近い。しばらくすると、ギュンターが左を指さした。

“Look, you can see the castle.”

「ほら、城が見えるだろ」

山がいくつも重なる真ん中に、「新白鳥城」がすくっと立っている。手前の山は緑、背後は岩肌を露出する断崖、その奥に薄青くそびえる山、なるほどディズニーランドのお城そのものだ。

“Please stop the car a moment. I want to take some pictures.”

「ちょっと車を止めてくれないか。写真を撮りたいんだ」

“Sure” 「いいよ」

私は、車を降りて写真を撮った。確かに美しい姿だ。だが、この城は「中世の城に見せかけて作った近代の建築物」である。その事実を考えると少し白けた気分になる。しかし、「日本人が大好きな城だから」と、ションガウのホテルを予約し、城の入場券まで手配してくれたモニカの優しさに感謝しなければいけない。

麓の駐車場に車を止めて、チケットセンターまで歩くと、当日券を求める長い列ができていた。私達は、予約券を持参してきたので、すぐにチケットを受け取ることができた。城への入場時間は指定されている。13:15 だ。腕時計に目をやると、まだ 11 時半だ。

私達は、山道を歩いて上り始めた。右手の山には黄土色のホーエンシュヴァーンガウ城がそびえる。やがて、小さなホテルが現れ、道は左右に分かれる。右はホーエンシュヴァーンガウ城へ続き、左が「新白鳥城」へのルートである。私達は、左へ進み、さらに左に曲がって森の中の坂道を上る。私達の前後にも、多くの観光客が歩いている。ときおり客を乗せた馬車が行き来する。私達は、馬糞を踏まないよう注意しながら歩く。

樹木が途切れ山頂への視界が開ける場所には、何人もの観光客が立ち止ってカメラを構えている。私達も立ち止り、見上げると「新白鳥城」がその優美な姿を覗かせている。

Neuschwanstein（ノイシュヴァーンシュタイン）。Neu（ノイ）は英語のNew（新しい）で、schwan（シュヴァーン）はswan（白鳥）。stein（シュタイン）はstone（石）だが、ドイツでは城の名にシュタインがついていることが多いそうだ。だから、日本のガイドブックには「新白鳥城」となっている。城は中世領主の住居であると同時に要塞としての機能も併せ持っているのだが、この城はそんなことをまるで感じさせない。

緑の樹々に囲まれた白亜の城の外観は優美そのものだ。空に向かってすっきり伸ばしたいくつかの白い尖塔は、湖に浮かぶ白鳥の首や尾を連想させなくもない。アルプ湖を背後にした城を、

空から見下ろす角度で撮った写真を見たときそんな感じがした。世界最初のディズニーランドであるカリフォルニア州の「眠れる森の美女の城」のモデルになったそうだが、確かにまるでおとぎ話に出てくるような美しい城だ。

「新白鳥城」の外観は中世風だが、しかし、これは近代の建築である。建設開始は1869年9月で、日本でいえば明治維新の翌年だ。それでは、中世の城を忠実に復元・再建したものかというところでもない。風光明媚なアルプス山麓の岩山の突端に、中世風にデザインした城を、新たに建設したのである。

造ったのは、バイエルン国王ルートヴィヒ二世。城の基本プランの作成を王から命ぜられたクリスチャン・ヤングという人物は、中世の城郭研究家でもなく建築の専門家でもない。もともとは、オペラの舞台装置や美術を手掛ける画家だった。ワグナーのオペラ『ローエングリン』の背景画も描いた。

ルートヴィヒ二世は、1845年にミュンヘンのNymphenburg（ニンフェンブルク 妖精城）宮殿に生まれたが、幼年期から思春期の大半をアルプスの麓にあるHhenschwangau（ホーエンシュヴァーンガウ）城で過ごした。この城は、12世紀に建設され荒れ果てていたシュヴァンシュタイン城を、父マクシミリアン二世が4年の歳月をかけて再建したものである。城の名は地名のシュヴァンガウによる。地名の意味は「白鳥の里」で、ここはワグナーのオペラ『ローエングリン』で有名な「白鳥の騎士」伝説の地である。城内は、「白鳥の騎士」をはじめ、ライン河畔の地方に伝えられる様々な中世伝説を題材にした壁画で飾られている。

そんな壁画に囲まれて幼少期を過ごしたルートヴィヒは、日々、中世騎士に憧れ中世伝説の世界を夢見ていたのだろう。15歳の時、ミュンヘンのオペラ座で初めてワグナーの歌劇を観て、伝説の騎士ローエングリンが白鳥に曳かれた小舟に乗って登場する場面では感動のあまり身体が震えたという。これを機に、ルートヴィヒは、異常なまでに熱烈なワグナーファンになった。

18歳で即位したルートヴィヒが最初に下した命令は、ワグナーを探しだして呼び寄せることであった。当時、ワグナーは、莫大な借金を背負い、その取り立てから逃れるため逃亡生活をしていた。やがてワグナーを迎い入れた王は、邸宅と年金を与え、さらに借金の肩代わりまでした。この時ワグナーは51歳だった。

ルートヴィヒがワグナーの歌劇や中世伝説に心酔し、築城にのめりこんでいった要因の一つに挙げられるのが、中世伝説に囲まれた幼少期の環境だ。しかし、もう一つある。長身で美男の青年王は、王侯貴族の娘たちの憧れの的だったが、王は女性に全く関心を示さなかった。

1867年、21歳の時、突然オーストリア皇后の妹ゾフィとの婚約を発表したが、結婚の日取りを二度三度と延期した挙句、一方的に婚約を解消してしまう。ゾフィとの交際を通して、王は自分の同性愛的傾向にはっきりと気づいたのではないかとされている。王でありながら妃も迎えず、世継ぎも残さなかったルートヴィヒは孤独だった。

「新白鳥城」の建設は1869年に始められ、17年の歳月と莫大な費用をかけて、八分通り完成した。なにしろ、城は岩山の切り立ったような断崖の突端にある。建設機械のない当時としては大変な難工事だった。ルートヴィヒは、この城の他にも二つの城の建設を始めており、さらにもうひとつ、より一層壮大な城の建設を計画して完成図まで描かせていた。



これらの建設費用は王室費から支出されたが、到底まかないきれず王室公債を乱発し、王室の負債総額は王室歳入の二倍半を超えた。狂気の沙汰である。このままでは国が亡びる。意を決した首相は、国王陛下は重い精神病にかかっているとして統治不能であると内外に宣言し、王を拘束しシュタルンベルク湖畔のベルク城に幽閉してしまった。

1886年6月13日、夕食後、王は散歩を希望し、侍医グッテンが付き添った。しかし、8時になり8時半になっても二人は戻らなかった。城内は大騒ぎになり、手分けして捜索が始まる。6月中旬のことで、本来ならまだ明るいはずなのに、この日は雨が激しく暗くなっていた。

10時過ぎ、二人の帽子と王の上着と傘が湖岸で発見された。すぐにボートを出して湖を探す。やがて湖水に漂う王の遺体が発見され、岸辺から水の中に倒れこんでいるグッテンの遺体も見つかった。王に外傷はなく、グッテンの顔にはひっかき傷や青あざ、首には絞められた跡があった。

王の遺体はミュンヘンに運ばれ、解剖に付されたのち盛大な葬儀が行われたが、死因については、急病によると発表されただけだった。それで、謀殺か自殺か事故かと、さまざまの臆説が流れることになった。

この時期は、「ドイツ帝国の成立」と重なる。中世ドイツにおける皇帝は象徴的な存在にすぎず、実際は大小300の王国や自治都市からなる分裂国家であった。フランス革命後、ドイツ全体はナポレオンに征服され、300あった小国と自治都市は40ほどに整理された。その後、プロイセン王国やバイエルン王国の近代改革は進み、ナポレオン没落後、1848年の三月革命を経て、1871年、近代的な統一国家「ドイツ帝国」が成立するのである。

ヨーロッパ中央に位置するドイツに強力な統一国家が成立することは、ヨーロッパの勢力均衡を崩すことになり周辺国にとって好ましくないことであった。とりわけオーストリアとフランスにとってドイツ統一は容認しがたいことだった。したがって、ドイツに近代的な統一国家を作るためには、これら周辺国の介入や妨害を排除しなければならなかった。

プロイセン王国の宰相ビスマルクは、1864年にデンマークを破り、1866年にオーストリアを破ると普仏戦争でフランスを破って、1871年、ついにドイツ帝国を成立させた。できあがったドイツ帝国は22の王国と3つの自治都市からなる連邦国家であったが、プロイセン国王を帝国世襲の皇帝とし、その皇帝がプロイセン首相を帝国の宰相に任命するという点で、従来の連邦国家とは異なり、中央政府が力を発揮できる近代的な統一国家であった。

この普仏戦争に、バイエルン王国もプロイセンの同盟国として兵士を出し、その数はドイツ軍の三分の一を占めていた。そして、王家の格式の点ではプロイセンより上であったバイエルン王家のルートヴィヒ二世は、ドイツ帝国皇帝にはプロイセン国王とバイエルン国王が交互に就任すべきだと提案したが、ビスマルクに一蹴されたという。それどころか、ビスマルクは、プロイセン国王をドイツ帝国の世襲の皇帝とするよう、ルートヴィヒ二世から他の諸侯に提案してほしいと依頼する。バイエルン王国には外交・軍事・通貨などの特権を認めるというのが、その代償だが、それだけではない。ビスマルクは、ルートヴィヒが新白鳥城の建設資金に困っていることに目をつけ、その資金を用立てたというのだ。

山道の途中にホテルがある。私達は、ホテル前の売店でコーラを買って一休みした。雲をとおして薄日のさす緑の森の中をのんびり歩くのは気持ちがいい。ただ、観光客が多いのが玉に瑕だ。そんな文句を垂れる私自身も、その観光客のひとりだが。

ルートヴィヒ二世は、建設資金に困ってビスマルクに足元をみられた。度重なる築城による出費は、王自身の破滅をももたらしたのだが、その「新白鳥城」は、今こうして、これだけ多くの観光客を呼び寄せ、外貨を稼ぐ貴重な観光資源になっている。皮肉なものだ。

私達は、城の前の広場で時間調整をし、午後 1 時をまわったところで城門をくぐった。中の入り口には係員がいて、15 分間隔で数十人ずつ入場させている。建物の中に入ると日本語の音声ガイドのレシーバーを受取った。

城から眺める景色が素晴らしい。緑の森に囲まれた青いアルプ湖、その奥の雲の下にはアルプス連峰がうっすらと見える。青空に白い雪を頂く冬のアルプスというわけにはいかないが、幾重にもかさなる山脈<sup>やまなみ</sup>はアルプ湖とホーエンシュヴァーンガウ城の背後で躍動しているように見える。

城の内部の豪華な造りと贅沢な調度品にはため息が出るが、ワグナーの歌劇や中世伝説の場面を描いた壁画のおびただしい数には、少しばかりうんざりする。城内見学は30分ほどで終わり、私達は城の外へ出た。私は、横を歩くモニカに話しかけた。

“He grew up in the Middle Age environment. After he grew up, his mind was still in his childhood.”

「王は中世の環境で成長したが、成長した後も、王の心は幼少期のままだったんだね」

“That’s right.”

「そうね、その通りだね」

山を歩いて下り、しばらく行ったところで右に折れ、私達は森の中に入った。

「新白鳥城」の建設開始は 1869 年で、日本でいえば明治維新の翌年だ。ドイツ帝国の成立した 1871 年は、日本の近代史の上でも重要な転換点であった。ドイツの中世と同じく、江戸時代の日本は大小 300 弱の諸藩からなる封建国家であった。明治維新翌年の「版籍奉還」によって、全国の土地と人民は天皇（新国家）のものとなったが、実質的な支配権はあいかわらず各藩に残されていた。

1871 年の「廃藩置県」で、藩に残されていた軍事と徴税の権限は新政府のものとなり、同年「身分解放令」によって身分制度も廃止された。続いて、明治政府は、学校制度・徴兵制度・租税制度の改革を推し進め近代国家建設の基盤を固めていく。

1889 年（明治 22）には、アジアで最初の近代憲法「大日本帝国憲法」を公布した。戦後の GHQ による「思想統制」の効果で、この憲法は民主的なものではなかったと思いこんでいる人も少なくないが、近代法の原理である「法の支配」（国家権力を法で拘束する）や「法治主義」（国家権力の行使は法に基づく）を有する立派なものである。

37 条「すべて法律は帝国議会の協賛を経るを要す」

64 条「国家の歳出歳入は毎年予算を以て帝国議会の協賛を経るべし」

この憲法に基づき行われた衆議院総選挙は、初回（1890）も二回目も、政府が大敗した。しかし、「議院内閣制」ではなかったため、政府は議院では少数派であっても存続した。議席の多数を獲得した野党である自由民権派は、予算に反対して政府に抵抗し、政府を追い込み、のちに「議院内閣制的運営」を実現した。いわゆる「大正デモクラシー」は、この憲法があったからこそ実現できたのである。大津事件（1891）では、政府の圧力に屈せず「司法権の独立」を守り抜いた。

幕末に江戸幕府が欧米列強と結んだ条約は、さまざまな点で不平等であった。例えば「相手国に領事裁判権を認める」というのがある。外国人が日本で罪を犯しても、日本の法律で日本の裁判所が裁くのではなく、「その国の領事が裁判を行い、その国の刑法を適用する」。欧米列強は、その理由として、日本には近代法が整備されていないからだと主張した。

明治新国家は江戸幕府を倒して作ったものだから、江戸幕府が結んだ条約は無効である、という考え方は国際法上通用しない。国と国が結んだ条約は、政権や体制が変わっても有効なのである。

欧米諸国との法的な差別を解消するための条約改正は明治の日本人の悲願であり、日本外交の最大の課題であった。しかし、欧米列強は自国に有利な条約の改正には応じようとはしなかった。不平等条約の口実を取り除いて、欧米列強を条約改正交渉のテーブルに着かせるためにも、また近代国家建設のためにも、まずは憲法と国会が必要である。明治の指導者たちは痛感した。1882年3月、伊藤博文は、憲法調査のためベルリンへ向かった。伊藤はベルリンとウィーンで憲法と近代国家の成り立ちを学び、翌3月に帰国した。

一年後の1884年、日本陸軍「二等軍医」森林太郎（森鷗外）は、軍隊の衛生制度調査および軍隊衛生学研究のため、陸軍省よりドイツ留学を命じられた。当時日本の陸・海軍を悩ませていた脚気を解決するためであった。

森は、ベルリンに到着後、ライプチヒに約11か月滞在し、続いてドレスデンに5か月、それからミュンヘンに1年3か月、最後にベルリンで1年5か月ほど滞在し1888年に帰国した。22歳から26歳のことである。

ベルリンに到着した森に対して、先輩の留学生の中には、「任務である衛生学の習得に専念せよ」という者もいたが、外交官の青木周蔵公使は、衛生学に留まらず「ヨーロッパ人の思想や生活について考察すること」にも留学の意義があると言ったという。

留学中の森は、もちろん任務である衛生学の研究に真面目に取り組み、その成果としての論文も発表しているが、その一方で、パーティに参加したり、他の日本人留学生と交友を深め、酒を飲んだり観光に出かけたりして、ドイツの生活を楽しんでいたようである。

帰国後、森は軍医として順調に昇進し、90年には二等軍医正に、93年には一等軍医正になり軍医学校長の職に就いた。その一方で、90年に小説『舞姫』と『うたかたの記』を、翌91年には『文づかひ』を発表した。これらの作品は、それぞれドイツ留学で滞在したベルリン・ミュンヘン・ドレスデンを舞台にしたもので「ドイツ三部作」と呼ばれている。

三部作のうち最も知られているのが『舞姫』だが、『うたかたの記』は、ミュンヘン滞在中

のルートヴィヒ国王の溺死事件を題材にしている。それは、日本人留学生の画家巨勢<sup>こせ</sup>と少女マリーとの不思議な出会いと、少女の数奇な運命を描いた短編小説である。小説のあらすじは以下のようである。

ルートヴィヒ二世は、宮廷での夜会で宮廷画家スタインバッハの妻に一目ぼれし、庭園内の建物の中で狼藉に及ぶ。あわやというところでスタインバッハに発見され、妻は事なきをえるが、怒り狂った王はスタインバッハをしたたかに打ち据えた。やがて彼は亡くなり、妻も病で寝たきりとなる。ふたりの間には幼い少女がいた。少女は花売りとなり、わずかながらも家計の足しにしていた。

ある夜、花売りに入ったカフェで偶然が重なり、少女は客の連れてきた大型犬に襲われ、花かごを床に落としてしまう。花は汚され売り物にならない。少女は涙をこらえて店を出ていく。たまたま店に居合わせた日本人留学生の巨勢は、その少女の後を追ひ、「君のせいではない。ほら花代だよ」と財布の中のマルクを7つ8つ籠の中に置いて立ち去った。

その後ザクセンへ移った巨勢は、6年後ミュンヘンに戻ってきて少女と再会し、やがてシュタンベルク湖への小旅行に誘われる。巨勢は少女に請われ、ボートに乗せ漕ぎだした。やがて、散歩中のルートヴィヒ二世が岸辺に現れる。少女は、「あれは国王だわ」と驚いて立ち上がる。王は恍惚と少女を見つめると、突然「マリー」と叫ぶや傘を投げ捨てて湖に入った。後を追ひすがる侍医グッテンを振り切り、なおも湖の中を進み来る。少女は「あっ」と叫んで気を失うや、湖に転落し水中にあった<sup>くい</sup>杵で胸を強打し死んでしまう。狂った王は、少女の姿に、かつて横恋慕した少女の母親マリーを見たのである。母親の名もマリーであった。

短編とはいえ、漢文調と和文調を巧みにミックスさせた格調の高い文章に根をつめるとどっと疲れが出てくる。鷗外は、まず花売りの少女マリーを過酷な運命につき落したしたのは、国王ルートヴィヒ二世の横恋慕であると設定する。そして、終章で王の前に少女を出現させることで王の溺死を導くと同時に少女自身も溺死させてストーリーを完結させる。まことに数奇な運命の物語に仕上がっているが、しかし、あまりにも荒唐無稽なストーリーである。第一、王は同性愛者だったのだ。

それにしても、いくら「狂王」とはいえ、またいくらフィクションの中とはいえ、実在の国王を実名のまま、こんなふうにながてに扱っても、当時は問題なかったのだろうかと思ふ気がする。

メールで森鷗外の小説の話をした。

“A 23 year old Japanese man who was a doctor worked for Japanese Army studied in Germany from 1885 to 1888. He studied in Munch for 1 year and 3 months. After he came back home he wrote three novels set in Germany. His name was Ougai Mori.

One of the novels was based on the accident that Ludwing Second drowned. It was a novel so it was a fiction. It was published in 1890. If it was published now, the writer would be sued. The story is like a wild fancy. But in Japan he is a famous and popular writer.”

「陸軍医であった23歳の日本人が、1885年から1888年までドイツ留学し、ミュンヘンには1年

3か月滞在したんだよ。その留学生がね、帰国してから、ドイツを舞台にした小説を三冊書いたんだ。名前は森鷗外。小説の一つは、ルートヴィヒ二世の溺死事件に基づくものだが、全くのフィクションだよ。1890年に発表されたが、もしそれが現代ならば、作者は訴えられていたろうな。ストーリーは妄想そのものだから。でも、彼は日本では、有名な作家だよ」

“He would not be sued, so I think, because there are many writers in Germany, who tell wild stories about Ludwig. Some people say, it was suicide, because he was mentally ill, some say, he was killed. There are many stories and films too.”

「訴えられないよ。ルートヴィヒについては、ドイツの多くの作家が、いろんなことを言っている。あれは自殺だ、精神病だったんだよ。いや殺されたんだよ、と。多くの小説が書かれているし、映画もいくつかある」

『うたかたの記』の日本人留学生の巨勢<sup>こせ</sup>は、たまたまカフェで見かけた不幸な花売り少女を哀れに思い、声をかけ小銭を与えた。これが少女マリーとの出会だった。

『舞姫』の日本人留学生太田は、散策中に不幸な少女を見かけて声をかけ、事情を聞いて哀れに思い腕時計を与えた。これが主人公とヒロインの出会いである。

いずれも、日本人留学生とドイツ人女性との交友や恋愛をテーマにした物語だが、「出会い」の設定が類似している。これは森自身の実体験に基づくものなのか、それとも他の留学生からの見聞なのか、あるいは全くの想像なのか、それはわからないが、ドイツ人女性との関連では興味深い事実がある。

『桂太郎と森鷗外』（荒木康彦著 山川出版社）に、帰国した森鷗外を追いかけて来日したドイツ人女性のことが記述されている。以下は抜粋である。

<1888年9月8日、帰国した森は、その日の夜、やがてドイツ人女性が来日すること父親に打ち明けた。嫡男である森の告白に森家の人々は驚愕する。そして、9月下旬、そのドイツ人女性は単独で来日し、築地の精養軒ホテルに宿泊した。

森家は、森の妹婿小金井に対処を依頼する。小金井は森より4歳年上で、解剖学者かつ人類学者で、森の4年前にドイツ留学している。この小金井の『日記』によれば、依頼を受けた小金井が、9月25日に精養軒に行くと、すでに森は来ていたとある。その後も精養軒に日参した小金井は、女性に帰国するよう説得を続け、約1か月後、女性は承諾した。10月16日、森、小金井と女性の三人は築地精養軒を出払って横浜に一泊し、その翌日、女性は横浜港から帰国の途に就いた。そして、森家はこの女性の帰国費用を工面したという。なお、このドイツ人女性が、どのような人物であったのか、いろいろな説があるが、よくわかっていない>

小金井の『日記』には、残念ながら、ドイツ人女性の言い分が書かれていない。なにしろ、130年前の1888年に森を追って単身日本にまでやってきたのだから、相当な事情があったのだろうが、そここのところの記録がない。森自身も、このドイツ人女性のことについて何も書き残していない。しかし、21年後の1909年、この女性の来日を題材にしたと思われる小説、『普請中』を発表している。

森や小金井がドイツに留学していた1880年代から第一次世界大戦の始まる1914年までのドイ

ツ経済は、目覚ましい発展をとげた。従来からの重工業や通商面だけでなく、とくに電気や化学という新時代の技術産業において世界をリードした。それを支えたのが自然科学の発展であった。物理学、生理学の研究では、当時のドイツは世界に抜きん出ている。各国からドイツに留学生が派遣され、日本でも創立されたばかりの東京大学の教授たちが次々とドイツに留学したのである。

したがって、この分野におけるドイツからの外来語は多い。例えば、エネルギー、アレルギー、ウイルス、ワクチン、などの言葉に私たちはすっかり慣れ親しんでいるため、英語を学んで energy (エナジー)、allergy (アラジー)、virus (ヴァイアラス)、vaccine (ヴァクシーン) という単語に出くわした時、その発音にとっても戸惑う。

駐車場に戻った私達は車に乗り込んだ。さて、これからシュヴァインフルトの家まで帰る。350キロを超えるドライブで、東京から名古屋までに相当する。腕時計を覗くと午後3時20分。それにしても、今日もお昼を食べていない。

20分ほど走っただろうか、自動車道路から右に折れ、くねくね曲がってから駐車した。その先の牧草地には数頭の馬が草を食<sup>は</sup>んでいる。牧草地の丘に建つのが世界遺産のヴィース教会である。尖塔は一つあるものの、天に向かってそびえ立つゴシック様式の教会と違って、茶色の屋根に白壁の建物は幅広く横に広がっていて、貴族の別荘のみみたいだ。ヴィース (Wiese) はドイツ語で「牧草地」という意味だ。

教会の正式名は、「鞭打たれる救い主への巡礼教会」という。教会創立の由来がある。この地で1730年に制作されたキリスト受難の木像は、やがて忘れ去られ物置に放置されたままになっていた。それを、農婦がもらい受け、日々礼拝していたところ、毎朝、像の頬に水滴が溢れているのに気づいた。キリストが泣いている。えっ、鞭打たれて痛いからですか？などと罰当たりなことを口にしてはいけない。これは、キリスト教でいう miracle 「奇蹟」なのである。神様は人間のことをちゃんと見ているよと、人間に伝えるためのメッセージである。神は、人間の罪深さを哀しみ泣いているのだ。

噂はたちまち広まり、次から次へと人々がやって来て、礼拝堂もつくられた。やがて、この牧草地は奇蹟の起こった「聖地」とみなされ、各地から巡礼者が訪れるようになる。その巡礼者を受け入れるために造られたのが、この「巡礼教会」で、1757年に完成した。

教会内に入った私は既視感を覚えた。柱や壁の白の漆喰、金の装飾、天上にはフレスコ画。窓ガラスはステンドグラスではない。明るい日の光を存分に引き入れて白色の壁や柱と金色の装飾を輝かせている。そう、ヴェルツブルクのレジデンツだ。「階段の間」と「白の間」それに「皇帝の間」の三つを一堂に集めたような壮大な部屋、そんな感覚を覚えた。

ヴィース教会の内部は、普通ロココ様式といわれる。ヴェルツブルクのレジデンツの場合、建物はバロック様式で内部はロココ様式だ。日本の「高校世界史」の教科書の記述は、だいたい「バロック式は17世紀、豪壮華麗。ロココ式は18世紀、繊細優美」とあるのだが、もともとロコ

コ式は、フランスで宮殿や貴族の邸宅などの内装の様式として生まれたものである。ヴュルツブルクのレジデントの中に入った時、その「繊細優美さ」に驚嘆したが、それでも、それは領主の邸宅だからなんら違和感はなかった。しかし、ここは教会である。教会なのに明るく華やかなのだ。薄暗く、ステンドグラスを通すわずかな光に空気も重い <sup>おごそ</sup> 厳かな教会ではない。

ヴィース教会の雰囲気には独特のものがある。夢幻の世界、天国への入り口に足を踏み入れてしまったかのような、そんな幻想的な雰囲気がある。白い柱と白い壁、金の装飾、柱には大きな白い聖人像。私は周囲を見まわし、天井のフラスコ画を見上げる。そして、誘われるように奥の祭壇へと歩み進む。祭壇には、鎖につながれ血を流すキリスト像が祀られている。

ところで、キリスト教の教会は「拝観料」をとらない。昨年11月、モニカと長男トーマスを京都のお寺に案内した。最初に訪れた東福寺では、「通天橋」と「方丈庭園」の二カ所で「拝観料」を支払った。二人とも、「ええー、また？」というような表情を浮かべた。京都の古刹は檀家を持たない寺が多いから、主な収入減は「拝観料」となる。寺の維持費は大変だろう。

ドイツの場合、「教会税」がある。メールでモニカに訊いた。

“I read in a book on Germany. Church Tax is from 8% to 9% of income every month. It's too much. So, many people quit a member of church. Is it right?”

「ドイツに関する本で読んだけど、教会税というのがあって、毎月の所得の8から9%するんだって？多すぎるよね。だから、多くの人が教会から脱退する。それ本当？」

“Yes, it's right, we have to pay it every month. And it's right too that many people quit a member of church. But the church tax is not only for the priests' pay. The Church cares for many social projects.”

「ええ、本当よ。毎月払っている。で、多くの人が教会から脱退するっていうのも本当だよ。だけど教会税というのは、聖書者の給与のためだけにあるのではないよ。教会は多くの社会奉仕事業を担っているんだ」

アウクスブルクを通過してから、何時間走っただろうか、モニカが私に告げた。

“We're going to Bamberg. Günther wants to stop by his favorite beer garden.”

「バンベルクに向かっているんだよ。ギュンターが、お気に入りのビアガーデンに寄りたいんだって」

私には、バンベルクがどこなのかわからない。ギュンターが言う。

“I worked at a hospital in Bamberg twenty five years ago.”

「25年前、バンベルクの病院に勤めていたんだ」

驚いたことに、ビアガーデンの駐車場は満杯だった。駐車場といっても、ラインが引いてあるわけでもない単なる広場だが、ともかく満杯なのだ。足りなくて、建物に沿った道路の隙間にも車がぎっしり並んでいる。それでも、一台分のスペースを見つけたギュンターは、モニカと私を先に降ろしてから、ハンドルを上手にさばいて車をねじ込んだ。

ブラウエライ・グライフェンクラウ (Brauerei Greifenklau) という。二階がホテルで一階がレストランのヨーロッパではおなじみのパターンだ。「ブラウエライ」というのは(ビール)醸造所という意味だそうだ。私達は一階の土間を通り抜け、緑豊かな裏庭に出た。マロニエの葉の生い茂る木陰に、多くの長テーブルが並んでいる。ほぼ満席だ。ヨーロッパの人々は、戸外で飲み食いするのが好きだ。空気は乾いているし蚊もいない、おまけに10時過ぎまで明るい。日本にはない環境がうらやましい。

私達三人は、陶器のジョッキで乾杯した。茶褐色の伝統的なビールで、料理は「シュヴァイネブラーテン」(Schweinebreiten)というバイエルンの代表的な豚肉料理。ローストした豚肉のスライスが2枚で、その上にソースが掛けてある。要するにローストポークで、付け合わせはバイエルン地方の伝統料理クヌーデル(Knödel)。それに、緑色の「ハーブスープ」も運ばれてきた。

“What’s this?”

「これ何？」

“It’s called Knödel. A mixture of mashed potatoes, flour and egg. It’s the traditional food of Bayern.”

「クヌーデルというんだよ。マッシュポテトと小麦粉と卵を混ぜたものだ。バイエルン地方の伝統料理だよ」

じゃがいもの団子だ。揚げる前のコロッケかな。ギュンターが懐かしそうにまわりを見まわす。

“Twenty five years ago, I worked at a hospital in this town for two years and a half. I had lunch here.”

「25年前、この街の病院で2年半働いていて、ランチはいつもここだったんだよ」

“With beer?”

「ビール付きでかい？」

“Yes, lunch with a glass of beer was OK in those days. But now people are not tolerant.”

「そうだよ。当時は、ランチにグラス一杯のビールはOKだったんだ。しかし、今はダメだ。人々は不寛容だよ」

ギュンターが、陶器のジョッキを横にしてテーブルの上に置く。

“Do you want another beer? If you want, lay the beer mug on the table like this.”

「もう一杯どう？もう一杯欲しいときはカップを横に倒すんだ、こんな風に」

私は、ギュンターにならってジョッキを横倒しにした。日本でも、飲み終わった目印に徳利を横に倒すことがあるけれど、あれと同じだな。でも、この後の運転は誰がするのだろうか？

二杯あけたところで、私は手を上げてウエイトレスに合図した。ギュンターが手を振り、私を制す。

“No, no. I’ll invite you. This was my favorite beer garden. I enjoyed myself today.”

「いや、オレのおごりだよ。ここはオレのお気に入りだったんだ。今日は楽しかったよ」

運転席にはモニカが乗り込んだ。私は少し安堵した。もう大丈夫だ。明日から二日間は電車で



移動だ。自動車旅行はこれで終わる。どうやら、死なずにすんだ。二杯のジョッキで酔いも手伝ってか気が緩み、私は、今まで禁じていた質問をした。

“Monika, have you ever got a ticket for speeding?”

「モニカ、今までにスピード違反したことある？」

“Yes, I have. Six years ago, I was running 90 kilos an hour but the speed limit was 60. I paid a fine of 120 euros.”

「うん、ある。6年前、時速 60 キロのところを 90 キロで走って 120 ユーロの罰金を払った」

モニカの告白を聞いて、私もカミングアウトした。

“To be honest, I have been afraid of being in a car running at such a speed. I haven't experienced running by car at 150 kilos before.”

「正直に言うと、こんなスピードで走ってる車に乗っているのが怖かったんだ。今まで、車で 150 キロなんて出したことない」

“Oh, Really?”

「ええー、そうなの？」

“You asked me ‘Yoshi, are you tired? Are you sleepy?’ No, I got nervous. I was scared.”

「ヨシ、疲れたの？眠たいの？とかモニカは訊いたけど、違うんだって、緊張してたんだ。怖かったんだよ」

“Oh, I didn't know how you were feeling.”

「えっ？知らなかった。そんな風にあなたが感じているなんて」

「アハハ」、ギュンターとモニカは大笑いした。

家路で立ち寄ったピアガーデンだから、10分もすればシュヴァインフルトに着くだろうと思って、今まで我慢していた質問を解禁したのだが、甘かった。モニカは、ギアを入れ加速する。私は、少し不安になってきた。自動車道を一時間も走っただろうか。モニカがつぶやく。

“That's a familiar steeple of the church.”

「ほら、懐かしい尖塔だよ」

ギュンターの住む村の教会の尖塔が見えてきた。私は安堵した。（ああ、もうすぐだ）。突然、パラパラと大粒な雨滴がフロントガラスを叩く。私は、運転しているモニカの注意を喚起した。

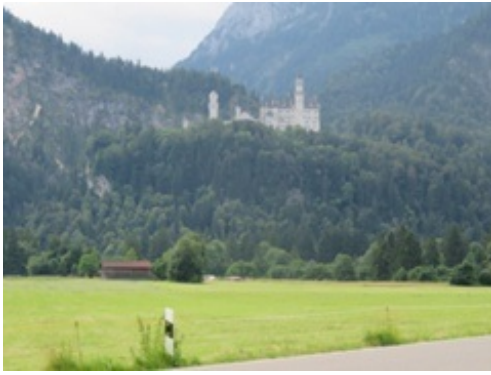
“Oh, it's raining,”

「雨だ」

モニカはワイパーを始動させたが、スピードは落とさない。

“It's a shower.”

「にわか雨だよ」



新白鳥城



ホーエンシュヴァーンガウ城



新白鳥城から見たアルプ湖



シュヴァイネブラーテン



ヴィース教会



ブラウエライ・グライフェンクラウ

## 7月10日（日）Cologne（ケルン）

---

今日から二日間は電車で移動する。昨夜、モニカが日程を説明してくれた。

“Yoshi, tomorrow we are going to Cologne. The taxi will come to my house at 9:00. The train leaves Schweinfurt at 9:14. So, we are having breakfast at 8:30.”

「ヨシ、明日はケルンだよ。タクシーが9時に迎えに来て、電車はシュヴァインフルト発9時15分。だから朝食は8時半」

シュヴァインフルトは乗り降りする客も少ない静かな駅だった。40分ほどしてヴェルツブルクに着いてICに乗り換えた。ドイツ国内の大都市や中都市を結ぶ都市間特急を Inter City (IC) と呼ぶ。ライン川沿いの古城を眺めながらの鉄道の旅は、ドイツを訪れる観光客に人気がある。

向かい合う二列の座席の真ん中にはテーブルがある。全て座席指定である。

“Yoshi, sit on that seat. You can get a good view.”

「ヨシ、こちらに座りなさい。景色がいいから」

モニカが、進行方向を向く窓際の座席を指さす。車窓にはのどかな田園風景が流れ、空はどこまでも青い。

“The Main River merges into the Rhine.”

「メイン川がライン川に合流するところだよ」

フランクフルトを過ぎ、メイン川がライン川に合流する。対岸の小高い山の斜面にはブドウ畑が広がり、その下には街並みが連なる。ライン川に遊覧船が行き交う。山の中腹には、次々と古城が現れる。重要な交易路であるライン川沿いの諸侯達は、通行税を徴収するため数々の城砦を築いたのである。ギュンターが指さす。

“That's Burg Katz, the Cat Castle.”

「あれが猫城だよ」

緑の小山の中腹に二つの尖塔を構えるチョコレート色の古城は、私の持つガイドブックの見開きの写真にも載っている。私はあわててカメラを向けた。なぜ「猫城」なのかは、諸説あるようだ。

メイン川とライン川の約4時間の川下りを終えて、列車はケルン中央駅のホームに滑り込んだ。午後2時過ぎである。ところで、こんな大きなトランクを入れるコインロッカーってあるのかな？

“Can I leave my suitcase in a locker at the station?”

「駅のロッカーにスーツケースを預けられるかな？」

“Of course, you can.”

「もちろん、大丈夫」

駅構内のコインロッカーは、日本のものとはまるで違った。ロッカーではなく、「自動荷物預かり機」である。料金は2時間4ユーロで24時間7ユーロ。コインを入れると下のシャッターが開く。荷物を入れてOKボタンを押すとシャッターが閉まって、荷物は自動的に地下の荷物管理場

所に送られる。しばらく待つと、機械から受取りカードが出てくる。カードには日時が刻印されている。荷物を出すときは、このカードを機械に挿入すればよい。なるほど、うまくできている。これだと、ロッカーを壊して中の荷物を奪うことはできない。日本も観光大国を旨ざしているのだから、より安全なこのシステムを導入したほうがいいと思う。

駅前の広場へ出ると、（うわっ！）と心の中で声をあげた。何度も写真で見たことのあるケルン大聖堂が、想像をはるかに超えるスケールで立ちはだかる。歩み進んで見上げると、その黒々と異様な姿の巨大な塊<sup>かたまり</sup>が私を威圧する。天を突くような尖塔がいくつも、建物全体の中心に寄せ合い、壁や柱の全てが中央に向かって動いているような、そんな奇妙な感覚に襲われる。

ケルン大聖堂は、1248年に着工したが、中断もあり完成したのは1880年である。第二次世界大戦では空襲で破壊されたが復元された。

中に足を踏み入れると、視線は、奥行き144メートルあるという正面のステンドグラスに行く。天井まで届く細長いステンドグラスの窓は列をなし、陽の光が白く差し込んでいる。天井の荷重を柱に逃がすため放射状に広がるリブ（肋骨）は天井に連鎖し、リブを支える石柱が列をなす。

ステンドグラスには聖書のストーリーが描かれている。「イエス誕生と聖母マリア」、「キリスト受難の図」、「ペテロ伝説」など、文字の読めなかった当時の庶民でも、絵から聖書を学ぶことができる。中でも有名なものが、「東方三賢人の礼拝」で、バイエルン国王ルートヴィヒ一世が奉納したものだ。だから「バイエルン窓」と呼ばれている。

「三賢人」は「三博士」とも「三賢王」ともいう。ユダヤの王としてイエスが降臨するという神のお告げを聞いた三賢人は、星に導かれベツレヘムまでやってきて、誕生したイエスに礼拝<sup>ひつぎ</sup>する。有名な聖書のストーリーだが、その三賢人の聖遺物を納めた黄金の棺が正面奥に安置してある。ケルン大聖堂の宝である。棺の表面には「天地創造」から「キリスト受難」、「復活」、「三賢人」、「使徒」など様々な図が描かれている。ところで棺の中の「聖遺物」（relics）ってなんだ？

昨年、モニカと長男トーマスと私の三人で金閣寺を拝観したときの会話を思い出す。

“It's said that there are some pieces of bones from Buddha in Kinkaku.”

「金閣寺には仏陀の遺骨が祀ってあるといわれているんだよ」

“Really? The same in our Catholic churches. There are the relics in the churches. The relics are often pieces of bones from saints.”

「そうなの？カトリックの教会でも同じだよ。教会には聖遺物が祀られているけれど、それは多くの場合、聖人の遺骨だよ」

大聖堂を出た私達は、背後にまわってライン川沿いのオープン・カフェで一休みした。芝生の上で、若者が日光浴をしている。7月の午後の日射しは強いけれど、空気が乾いているから心地よい。私達はビールを飲んだ。しかし、今日も、お昼を食べていない。

古代ローマ帝国の北東部の国境はライン川とドナウ川を結んだ線だった。ローマ人はライン川

右岸（東岸）をゲルマニアと呼び、左岸（西岸）をガリアと呼んでいた。ドイツ北東部バルト海沿岸に住んでいたゲルマン諸部族は、南下して先住民族のケルト人を追い出しライン右岸に定住した。その後、さらにライン川を超えガリアにも入りこんだが、これを押し戻しライン左岸のガリア全体をローマ帝国の属領にしたのがカエサル（シーザー）である。ケルンはローマ時代の城砦都市に起源を持つ。

私達は、ケルン大聖堂の背後にある「ローマ・ゲルマン博物館」に入った。この博物館の目玉は、ギリシャ神話の酒の神「ディオニソス」の世界を描いたモザイク画で、博物館のあるこの場所から発掘されたのだそうだ。3世紀の住居を飾っていたモザイク画だ。古代ローマ人兵士の墓も復元されている。その他、装飾品やガラス製品など当時の生活用品が多数展示してあるが、これらはみなこの地域から発掘されたものだから、古代ローマ時代のケルンの様子が偲ばれる。

“We have a reservation for dinner at a restaurant.”

「夕食は、レストランが予約してあるのよ」

私達は少し歩いて、街路樹のある静かな通りに面したパブ風のレストランに入った。まだ早いのか、店はすいていた。外は真昼のように明るいが、それでも、時計を覗くと6時半だ。日本からやってきた私の時間感覚は、南ドイツで一週間過ごすうちにすっかり麻痺してしまって、いちいち時計で確認しないと昼時なのか夕刻なのか見当がつかない。

客は一組だけで、中年の男女五人がグラスを傾け談笑している。私達はその隣のテーブルに着いた。中年のウエイターが、「ケルッシュ？」と声をかけ、私達はうなずく。紙のコースターが重ねてテーブルの上に置いてある。ウエイターは、そのコースターを三枚取ってテーブルに並べるとその上にビールを置いた。ケルンでしか飲めないという「ケルッシュ」は小さな円柱形のグラスに入っている。

“This is Kölsch. It's served in a 200- milliliter glass. They will bring you another glass of beer each time you drink it off.”

「ケルッシュだよ。200ミリのグラスで出されるの。飲みほすとすぐ次が来るんだ」

飲みほす度に次が来るって？・・・横に立つ給仕が次から次へと追加する「わんこそば」みたいなもの？と連想したが、そうではなかった。ウエイターは、空になったグラスをさりげなく指さし、“More?”「もっと飲みます？」と訊いてから、次のビールを持って来る。なんだ「わんこそば」じゃないや。でも、「飲み放題」でもないよね。

“In Japan, you can drink as much as you want at the same price in two hours. Do you have a similar system in Germany?”

「日本には、一定の料金で2時間好きなだけ飲める店があるんだけど、ドイツにも同じようなシステムはあるの？」

“No, I haven't heard of it before.”

「いいえ、そんなの聞いたことないわ」

あるわけないよな。

料理を注文すると、ウェイターは、テーブルの上のコースターを一枚取って、その裏の白地に書きこんでいく。いやあ、粋だねえ。

私は、モニカに勧められてケルンの名物料理ザウアーブラーテン (Sauerbraten) を頼んだ。赤ワインと酢に漬け込んだ牛肉をローストしてからさらに煮込んだもので、付け合わせは、茹でた赤キャベツとじゃがいも団子。肉の上にはソースがたっぷりかけられハーブが振りかけてある。見た目と違ってさっぱりした味だ。

「ケルッシュ」はすっきりした味わいのビールでおいしい。200 ミリのグラスだとすぐに空になってしまうが、私は少し抑え気味にしてギュンターのペースに合わせた。ギュンターが隣の男性と何やら話す。"Is he American?" 「アメリカ人？」と私のことを訊く。日本人だと言うと私のほうを振り向いた。

"Do you live in Tokyo?"

「東京に住んでいるの？」

"No, I live in a small city between Tokyo and Osaka."

「いや、東京と大阪の間の小さな市だよ」

"Thirty years ago, I lived in Japan for three months on business. I stayed in Tokyo, Osaka and Sapporo."

「30年前、仕事で三カ月日本にいたよ。東京と大阪と札幌だよ」

"Oh, really? How did you like Japan? Did you have a good time?"

「へえ、そうなんだ。どうだった日本は？楽しかった？」

"Yes, I liked it very much. I know 35 Japanese words. コンニチワ、オハヨウゴザイマス、アリガトゴザイマス、チョットマッテクダサイ、ワタシトオドッテクダサイ”

「とても気に入ったよ。私は、35 の日本語を知ってる。こんにちは、お早うございます、有難うございます、ちょっと待ってください、私と踊ってください」

えっ？「私と踊ってください」って何？30 年前の日本って、社交ダンスが流行っていたのかな？

さらに男は続けた。

"I can say ハヤクチコトバ。ナナムギ・ナマゴメ・ナマタマゴ, Can you say it?"

「私は早口言葉が言えます。生麦・生米・生卵、あなた言えますか？」

いや、びっくり。彼の早口言葉はとても流暢だ。

"You are great! Ok, ナナムギ・ナマゴメ・ナマタマゴ I can't say as fast as you can. You win."

「すごいね！オーケー、ナナムギ・ナマゴメ・ナマタマゴ。いや、あんたのように早く言えないよ。あんたの勝だ」

私は、バッグから電子辞書を取り出し「早口言葉を」を調べて、モニカに告げた。

"He says Japanese tongue twister. He is very good."

「彼は、日本の早口言葉を話すんだ。とてもうまい」

二つのテーブルが、しばし、早口言葉で盛り上がった。

料理を食べ、ケルッシュを飲みほすとモニカが訊く。

“Are you finished? Do you want some more beer?”

「ごちそうさま？もっと飲む？」

“I’m finished. I’ve had enough.”

「もう十分」

“If you don’t want any more, put this on your glass like this.”

「もういらないときは、これをグラスの上にのせるのよ。こんな具合に」

モニカとギュンターは、コースターでグラスに蓋をした。私もまねて蓋をしてから、手を上げてウエイターに合図した。勘定をすませると、私は隣の男の肩をたたいて手を差し出した。

“It was nice talking to you. Thank you.”

「話しができて楽しかったよ。ありがとう」

振り向いた男は立ち上がって私と握手すると、まるでこれが日本式の挨拶だと言わんばかりに、笑顔でペコペコ頭を下げる。そして、また早口言葉をしゃべる。

「アリガトゴザイマス、ナナムギ・ナマゴメ・ナマタマゴ、サヨナラ」

「ありがとう、さようなら」

帰りの電車は午後 8 時 28 分ケルン発で、フランクフルト着が 9 時 30 分だ。プラットホームのベンチに腰を下ろすと、ギュンターが斜め上を指さす。プラットホームの屋根の上からケルン大聖堂の尖塔が私達を覗いている。

突然、ギュンターが立ち上がるとホームの掲示板を見て、私達を振り返る。

“The train will be delayed. We have to go to the other platform.”

「電車が遅れる。プラットホームが変わる」

電車が遅れると電車の入るプラットホームが変わるってこと？移動しかかったギュンターが立ち止り、再び掲示板を確認する。

“Oh, the train will arrive on time.”

「あれ、電車は定刻に着く」

なんだか時刻通りに到着するのが珍しいような口ぶりだ。

“The train is often delayed in Germany. Why does Shinkansen in Japan always run on time?”

「ドイツでは、しょっちゅう、電車が遅れるのよ。日本の新幹線は、どうしていつも時間通りに走っているの？」

“I’m not sure. It might be because of the national character.”

「なぜだろ、日本人の国民性かな」

私のドイツ旅行の最後の夜をフランクフルトのホテルに予約したのは、モニカの配慮だ。帰りのフライトは、フランクフルト発が午後 5 時 40 分で時間は十分あるのだけれど、ドイツの列車は遅れることが多くて心配なのだという。それにしても、モニカもギュンターと共に私と同じホテルで一泊してくれるのだから本当に感謝しなければならない。

古代ローマ帝国は、395年、ゲルマン民族大移動の中で東西に分裂し、さらに西ローマ帝国は476年に滅んだ。ゲルマン民族の一派フランク族は、ライン川の東に定着し、徐々に西へ勢力を伸ばしていった。フランクフルトは「フランク族の浅瀬、渡河点」という意味である。まだ川に橋をかける技術が十分でなかった時代、フルト（浅瀬）は軍事的にも経済的にも重要な地点であった。

いち早くキリスト教に改宗したフランク王国は、ローマ教会と協力して勢力を拡大し、やがて、西ヨーロッパの主な部分を支配した。800年、フランク国王カール大帝は、ローマ教皇から「ローマ人の皇帝」の冠を与えられた。つまり、古代ローマ帝国皇帝の後継者だと認められたのだ。その後、フランク王国は東部、西部、中部の三つに分裂し、のちのドイツ・フランス・イタリアの原型ができるのであるが、東フランクの首都がフランクフルトであった。

ホテルはフランクフルトの中央駅から歩いて5分のところにあった。いかつい顔の大男が、パソコンの画面を見つめながらキーボードをたたき「ヨシクニサン・・・」とつぶやくと顔を上げた。

「コンバンワ」

「日本語が上手ですね。日本に行ったことがあるのですか？」

「・・・？」

“Have you been to Japan?”

「日本に行ったことがあるのですか？」

“No, I haven't. A Japanese works here. He taught me Japanese. He is Tanaka-san. He has worked for this hotel for 30 years.”

「いや、ないです。ここで日本人が働いているのです。その人が私に日本語を教えてくれたのです。田中さんです。もう30年間このホテルで働いています」

“Really.”

「そうなんだ」

“Which do you choose, water or red wine?”

「水と赤ワインのどちらがいいですか？」

（はあ？宿泊客に水かワインをサービスしてくれるんだ）。私は少し迷ったが、水にした。

部屋の鍵を受け取って「ありがとうございます」と日本語で言うと「どういたしまして」と日本語で応えてくれた。エレベータを下りるとモニカが言う。

“My second son Reinhard is coming here at 10:00. So, we'll have breakfast at 9:00.”

「次男のラインハートが10時にここに来るから、朝食は9時にしましょう」

“Ok, good night.”

「オーケー、お休みなさい」





ライン川沿い 猫城



ケルン大聖堂



ケルン大聖堂内



グラスの上にコースター

7月11日(月) Frankfurt (フランクフルト)

---

9時前に一階に降りて、ダイニングを覗いたが客はまだいなかった。私は、入り口のソファに掛けて待った。ドイツ旅行も、いよいよ今日で終わる。八日間ずっと三人一緒に行動した。それにしても、二人ともよく付き合ってくれたものだと思議な気がする。目の前のエレベーターが開いて、モニカとギュンターが笑顔で現れた。

“Good morning, Yoshi! Did you sleep well?”

「おはよう、ヨシ。よく寝られた？」

“Yes, I did, and you?”

「うん」

ダイニングには、コーヒー、紅茶、ジュースと水、ヨーグルトとチーズ、パン、トースト、茹で卵が並べられている。去年のスペインのホテルと違って、シンプルだ。

“Does Reinhard live here? What does he do?”

「レインハードって、ここに住んでるの？仕事は何？」

“Yes, he lives here. He works here for a company as a translator.”

「ええ、ここに住んでるのよ。仕事は翻訳、会社のね」

10時、ホテルのロビーで待っていると、ジーンズに黒のポロシャツの男性が笑顔で現れた。モニカの次男のレインハードだ。母とハグし、ギュンターとハグした後、微笑して私に手を差し出した。なるほど、弟のアンドレアスとよく似ている。

“At first, we are going to Altes Opernhaus, the old opera house and then Main Tower. You can see around the city.”

「まず、旧オペラハウスを見て、それからマインタワーに行きましょう。街をぐるりと見渡せます」

ホテルを出た私達は歩き始めた。荷物はホテルに預かってもらった。レインハードが足を止め、右手の高層ビルを指さす。

“That’s European Central Bank.”

「あれが、欧州中央銀行です」

さらに歩いて、三棟が横に連なる左手のビルを指さす。

“That’s Germany Central Bank.”

「あれは、ドイツ連邦銀行です」

フランクフルトは、ドイツの商業、金融の中心地で、街の中心に銀行や保険会社の高層ビルが立ち並ぶ。ライン川の支流マイン川沿いにあることから、ニューヨークの金融街マンハッタンをもじってマインハッタンという愛称もある。

“I work at an office in that building.”

「私は、あのビルのオフィスで働いています」

“You are a translator, aren’t you? How many languages do you speak?”

「君は翻訳家だよ。何か国語を話すの？」

“Well, five. English, Spanish, French, Russian and German.”

「ええと、五カ国かな。英語、スペイン語、フランス語、ロシア語とドイツ語」

“Wow, great! Ah, not Japanese?”

「うわっ、すごいな。日本語はダメ？」

“No”

「ダメです」

“Are you having day off today?”

「今日は休みなの？」

“I have a week off.”

「一週間休みです」

ドイツの有給について、京都で、モニカの長男トーマスと話したことがある。

“Employees in Germany have 30 paid holidays in the year by law. How about in Japan?”

「ドイツの従業員は、法律によって 30 日間の有給休暇があるけれど、日本は？」

“Well, in japan we get 20 paid holidays by law. But most people don't take 20 holidays. I think at most 10 days. I read that most people in Germany take all of 30 holidays and take two weeks holidays at a time and travel abroad. Is it right?”

「そうね、日本の有給は 20 日間だけど、ほとんどの人は、20 日間の有給をまるまる取らないよ。どうだろ、せいぜい 10 日間かな。本で読んだけどドイツの場合、ほとんどの人が有給をまるまる 30 日取るし、一度に二週間取って外国旅行に行く。それって本当？」

“Yes, it's right.”

「本当だよ」

“No one takes two weeks at a time in japan. At most two or three days in a row.”

「日本では、一度に二週間なんて、誰もとらないよ。連続なら、せいぜい二、三日かな」

北へ歩き続けた私達は、旧オペラ座（Alte Oper）前の広場に出た。

“It was built in 1880 modeled after the opera house in Paris. It was destroyed by bombing in World War Two and restored.”

「パリのオペラ座をモデルに 1880 年に建てられました。第二次世界大戦の空襲で破壊されたのですが再建されました」

戦後、竣工当時のまま忠実に復元されたルネサンス様式の石造建築で、屋根の上には翼を広げて天を駆け巡る馬の像がある。ギリシャ神話のペガサスである。

“Now it is used for concerts.”

「今は、コンサート会場として使われています」

噴水の前で説明し、レインハードの説明を聞く私に、カメラを構えたギンターから声がかかる。

“Yoshi, Reinhard, turn around and smile.”

「ヨシ、レインハード、振り向いて笑って」

モニカも加わって、三人一緒に写真に収まった。旧オペラ座の中は見学せず、私達は南に向かって歩いた。

マインタワー (Main Tower) は、56 階建て、高さ 200 メートルのモダンな高層ビルだが、その 54 階に展望テラスがあって一般公開されている。一階ロビーで、チケットを購入し、手荷物 of X線検査を受けたあと高速エレベーターに乗り込むと、一気に展望テラスまで運ばれた。

(うわぁ)、展望テラスは、吹きさらしの屋上で、円形にぐるりとめぐらされた透明ガラスの柵の高さは、私の胸の下だ。レインハードは、柵に歩み寄り、あれがどこどこで、あそこが何やらだと私に説明してくれるが、高所恐怖症の私は透明ガラスの柵に近づきたくない。

三月、私は初めて東京のスカイツリーにのぼった。2012 年が開業だからマインタワーのオープンより 12 年遅い。地上 450 メートルの第 2 展望台から見下ろした街並みはまるでマッチ箱で作った模型のようだったが、頑丈な建物の中から眺めているのだから怖さは感じなかった。しかし、マインタワーの地上 200 メートル、吹きさらしの展望テラスは、なかなかスリリングだ。おまけに透明ガラスの柵の高さが微妙だ。これは、お客さんへのサービスだろうか。

マインタワーを出て、少し歩くと広場に出た。中央に三人の像が立ち並ぶ記念碑がある。レインハードが私を振り返り、立像を指さす。

“That’s Gutenberg-Monument. Do you know Gutenberg?”

「あれは、グーテンベルクの記念碑です。グーテンベルクって知っていますか？」

(「活版印刷」って英語でなんて言うのかな？まっ、printing でいいか)

“Yes, I know. He invented printing. The idea of Luther spread out quickly over Germany because of his printing.”

「うん、知ってるよ。印刷技術を発明したんだ。ルターの思想が急速にドイツ国内に広がったのは、彼の発明した印刷技術のおかげだよ」

モニカとレインハードが互いに顔を見合わせてから、私にうなずく。

“That’s right.”

「その通り」

1517 年、教皇の免罪符販売に抗議したルターの『九十五カ条』が、またたく間に全国に広がったのは、「活版印刷」技術が発達していたからである。15 世紀半ば、「活版印刷術」を発明したといわれるグーテンベルクは、フランクフルトの出身ではない。マインツの職人である。なぜここに記念碑があるのかわからないが、マインツはマイン川とライン川の合流点にあり、フランクフルトから電車で 30 分ほどだの街だ。

私達は、ゲーテハウス (Goethehaus) の前に出た。ゲーテの生家は、屋根裏部屋を含めて五階

建ての木骨組みの家だった。18世紀半ばの市民の家が、五階建て？私は驚いた。日本でいえば、江戸幕府八代将軍吉宗の直後だ。

通りに面した玄関は閉まっていて、観光客は、右隣の「ゲーテ博物館」を抜け、ゲーテハウスの裏庭を通して勝手口から入っている。一階は台所と食堂。二階は客間、三階には、年号から月の満ち欠けまでも表す大時計があり、父の書斎、母の部屋、それに妹の部屋がある。四階の「詩人の間」が若きゲーテの部屋で、彼の名を一躍有名にした『若きヴェルテルの悩み』はここで執筆された。

“Goethe spent his childhood and youth in this house.”

「ゲーテは、幼年期と青春時代をこの家で過ごしたのです」

レインハードが説明してくれる。

“It was totally destroyed in the Second World War, but restored to its original structure.”

「第二次世界大戦でほぼ完全に破壊されましたが、戦後、忠実に復元されました」

横から、ギュンターが付け加える。

“The furniture was moved away before bombing so they are original.”

「家具は、空襲の前に疎開されていたから、本来のものだよ」

18世紀半ばの王侯貴族でもない市民の家に、書斎とか父母の部屋とか、子ども部屋があることに私は驚嘆する。

“Goethe’s family was not the nobility? But this was a very nice house.”

「ゲーテ家って貴族じゃないよね。でも、この家は素晴らしいね」

“Such houses were for wealthy citizens not for ordinary people.”

「こういう家は裕福な市民の家で、普通の人々の家ではありません」

ギュンターが付け加える。

“His father was the Imperial Councilor and mother was a daughter of the mayor.”

「ゲーテの父親は皇帝顧問で、母親はフランクフルト市長の娘だったんだ」

ゲーテが30年余の月日をかけ、死ぬまで執筆し続けた詩劇『ファウスト』は、冒頭、登場した悪魔が神に「賭け」をしないかと持ちかける。これは旧約聖書の「ヨブ記」を踏襲している。

敬虔で善良そのものヨブのことが鼻持ちならぬ悪魔は、神のところにやって来て賭けをしないかともちかける。ヨブが敬虔で善良なのは、今が幸福だからであって、不幸のどん底に陥れば神を呪う、と悪魔は言う。いや、あのヨブはそんな人間ではないよ、と神は否定する。それでは、と神の了解を得た悪魔は、これでもか、これでもかとヨブを痛めつける。一旦はくじけて神を呪ったヨブだが、神に一喝されて立ち直る。賭けに敗れた悪魔は退散する。

『ファウスト』も、神と悪魔の賭けから始まる。賭けのターゲットは、民間伝承のファウスト博士である。ただし、ヨブ記と異なり、悪魔は博士を一方向的に痛めつけるのではない。

錬金術師であり占星術師でもあったファウスト博士は、学問研究に行き詰って人生を悲観し自殺を図る。そこへ現れた悪魔が誘い、ファウストは悪魔と契約を結ぶ。ファウストが悪魔に魂を渡せば、悪魔は奴隷として博士に仕え、ファウストの望みをかなえる。魂を悪魔に渡すときは、

つまりファウストが死を迎えるときは、ファウストがその幸福の絶頂期に、その瞬間が永遠に続いてほしいと願い、感極まって、「時（この瞬間）よ止まれ、お前は美しい」とつぶやいたときである。「悪魔に魂を渡す」といっても、「魂」などというモノを実感できない私達日本人には、いま一つ理解しがたいが、まあともかく、幸福だなあ、いいなあ、「時間よ止まれ、永遠に続け」と感ずる瞬間に死が訪れるという、この設定は面白い。

悪魔と契約を結んだファウストは、幸福と絶望の繰り返しの中で、ついにあの禁句をつぶやいてしまう。悪魔は魂を奪い地獄へ落とす。ところが、どっこい、亡くなった恋人の祈りで、ファウストの魂は救われ天上に導かれる。悪魔は、またしても敗れるのである。

“That’s Saint Paul’s church. The first German National Assembly was held there in 1848.”

「あれは聖パウロ教会、1848年、あそこで最初のドイツ国民議会が開かれたんだよ」

（うーん、1848年というと、フランスの二月革命でドイツの三月革命だな）

“Are you talking about March Revolution?”

「『三月革命』のこと？」

“That’s it.”

「その通り」

1789年フランス革命が起こったとき、ドイツの世論は革命に好意的であった。政治に関心を持つインテリたちは、国王の絶対的な権限を憲法や法で制限すべきだと考えていた。また一定以上の財産を有し税を払う国民上層部に対しては、選挙権や参政権が与えられるべきだとも考えていた。しかし、革命は急進化し、民衆は国王を殺し王権を転覆させてしまう。この急進化したフランス革命を終わらせ、状況を革命前期に戻して革命の成果を定着させなければならない。それを成し遂げたのがナポレオンである。

ベートーベンもナポレオンに共感し、彼を讃える交響曲第三番を作曲して題名を「ボナパルト」とした。しかし、1804年、ナポレオンが皇帝に就いたことを知ると「奴も俗物に過ぎなかったか」と激怒して献辞の書かれた表紙を破り捨てたという逸話が知られている。いや、破り捨てたのではなく、表紙に書かれた「ボナパルト」という題名と献辞をペンでかき消した上に「エロイカ（英雄）」と改題し、「ある英雄の思い出のために」と書き加えたのだ、ともいわれている。ベートーベンが生まれ育ったのは、フランクフルトから北へ電車で約二時間のボンである。

ナポレオンは皇帝に即位したが、しかし、フランスを革命前の体制に戻したわけではない。いわゆる『ナポレオン法典』とは、ナポレオンが制定した民法、民事訴訟法、刑法、刑事訴訟法、商法の総称だが、そこには、革命前期の到達点である「私有財産の不可侵」、「法の前の平等」、「経済活動の自由」などが規定されている。以後、この『ナポレオン法典』はヨーロッパ各国の法律の模範となり、日本でも明治政府によって取り入れられた。

フランス革命後、ドイツ諸国は、フランスと戦って敗れ続け、ついにドイツ全体がナポレオンに屈服した。ドイツは再編されて、大小300もあった国が約40にまで整理された。その後、プロイセンやバイエルンなどでは、『ナポレオン法典』で示された法律や制度を採り入れ、近代国家

に向けた改革がおこなわれていった。

ナポレオンは、イギリスとの海戦には敗れたものの、ヨーロッパ大陸は制圧した。しかし、ロシア遠征でつまずき、1813年、プロイセン・オーストリア・ロシア連合軍に敗れて失脚した。ナポレオン没落後のヨーロッパでは、フランスやスペインで王政が復活するなど革命前の体制に戻そうとする旧勢力と、革命を経ることによって自由主義やナショナリズムに目覚めた革新勢力との抗争が始まる。

1848年2月、パリで市民が蜂起すると、国王は退位させられ共和制が樹立された。この「二月革命」の衝撃はドイツにもオーストリアにも伝わり「三月革命」が起こった。ウィーンやベルリンだけでなくドイツ各地で、また農村でも改革を求める大衆運動が広がり、各地に自由主義内閣が成立した。

1848年5月、全国から選挙で選ばれた議員がフランクフルトの聖パウロ教会に召集されて、ドイツ最初の国民議会が開かれた。そして、ドイツの統一方式や憲法制定について討議する。翌1849年、ドイツ憲法を作成した国民議会は、その憲法に基づくドイツ国王にプロイセン国王を推薦した。しかし拒否された。プロイセン国王は、議会主導によるドイツ統一に同意しなかったのである。こうして、国民議会によるドイツ統一は失敗した。

1862年、プロイセン首相に任命されたビスマルクは、プロイセン主導のドイツ統一に反対するデンマークと戦って勝利し、続いて1866年にオーストリアを破り、さらに1871年にはフランスを破って、一気にドイツ統一を成し遂げてしまった。

私は、街を案内してくれるレインハートを安心させようと話した。

“Germany was unified into The German Empire by Bismarck in 1871?”

「1871年、ビスマルクによってドイツは統一され、ドイツ帝国となったんだよね」

“Right”

「その通り」

“1871, it was very important year for Japanese modern history. Some leaders of the Japanese government met Bismarck in Berlin in 1873 and they were very influenced by him.”

「1871年はね、日本の近代史にとっても重要な年だったんだ。1873年、日本政府の何人かの要人は、ベルリンでビスマルクに会っている。彼らはビスマルクの影響を受けたんだ」

“Oh, really?”

「へえー、そうなんだ」

ドイツ統一の1871年は明治4年である。廃藩置県という大改革を成し遂げた明治政府は、岩倉具視を全権大使とする使節団をアメリカおよびヨーロッパへ派遣した。留学生43人を含め総勢110人からなるこの使節団派遣は、日本近代史の転換期をなす。使節団派遣の目的の一つは、幕府が結んだ不平等条約を改正するための予備交渉だった。

最初に訪れた米国で、一行は大歓迎された。しかし、いざ条約改正の話となると相手にされないどころか、日本にとってさらに不利な条件を要求された。これはダメだと悟った使節団は、

以後、条約改定の交渉は一旦あきらめ、欧米諸国の文明・産業・政治・経済の視察に専念する。

近代的な産業や制度を採り入れ、欧米諸国に追いつかなければ、そして近代国家を作らなければ、欧米列強に圧倒され征服されてしまう。留学生の中には米国に留学した5人の女子がいた。最年少は津田梅で数え年8歳。他の4人の年齢は9歳、12歳、15歳、16歳。皇后から書面で「婦女の模範となれ」と励まされた幼い少女たちの心情を思いやると胸が熱くなる。

1873年（明治6年）3月、オランダからドイツに入った使節団は、11日、ドイツ帝国初代皇帝ヴィルヘルム一世に謁見し、15日には、ビスマルクに招宴された。その席で、ビスマルクは次のような趣旨の演説をした。

<外交でなく武力によってドイツ統一を成し遂げたと、イギリスやフランスなど大国からドイツは非難されるが、我々が志しているものは、自主独立と対等な外交である。国際法といっても、大国は自国に有利な場合には法に従うが、法が自国に不利に働く場合は武力に訴えて国益を確保する。これが国際社会の実情であり、法とか正義といっても、それ自体が国力によって左右され、その国力は経済力と軍事力によって左右されるのである。>

\*参考文献「岩倉使節団『米欧回覧実記』田中彰著」（岩波現代文庫）

不平等条約改正どころか、その予備交渉ですら相手にされなかった明治政府の指導者たちに、ビスマルクのこの演説は身にこたえただろうと思う。帰国した彼らは、迷うことなく、「殖産興業」、「文明開化」、「富国強兵」を唱えて近代国家建設にとりかかった。

それにしても、この演説から150年経った現代国際社会の情勢は、ビスマルクが見抜いた国際社会の実情となんら変わっていない。その事実には愕然とする。

“In 1848, Karl-Marx published ‘the Communist Manifesto’.”

「1848年には、カール・マルクスが、『共産党宣言』を出版したんだよね」

と、私が言うと。レインハードはうなずいた。

“Yes, that’s right.” 「そう、その通り」

1848年のフランスの二月革命といえば、思い起こすのがカール・マルクスの『共産党宣言』である。『共産党宣言』は、二月革命の直前にロンドンで発刊された。当時はともかく、その後20世紀に入ってから、つい最近まで、世界の人々ととりわけ若者に与えたマルクス思想の影響は計り知れないものがある。キリスト教、イスラム教、仏教という宗教は別にして、論理的な思想が現実社会を動かし歴史を形成したというのは、マルクス主義の他にはないだろうと思う。マルクス（1818~83）の生まれ育った街トリーア（トリール）は、ライン川の西側の支流モーゼル河畔の古い都市で、フランクフルトから車で二時間だ。

私達は、Römerberg（レーマー広場）に出た。berg（ベルク）は「山、丘」だが、日本のガイドブックでは、Römerbergは「レーマー広場」と訳されている。しかし、「広場」ではなく「丘」の方がいいと思う。メイン川が増水して堤防を超えても、この丘なら大丈夫だと古代の人々は定住したのだ。



Römer (レーマー) は「ローマ人」で、ここに古代にローマ人の街があった。その後フランク族が住みつき、フランクフルトは商業都市として発展した。広場の西側には、切妻屋根で赤砂岩造りの家屋が三棟並んでいて、三つとも階段状の破風が美しい。真ん中の家が「レーマー」という屋号の商人の家だったので広場の名がある。一階の出入り口が広く高いのは、商品を満載した馬車が出入りできるようになっていたからだ。

レインハードが説明してくれる。

“It’s called Römerberg. The name of Römer comes from the central of the three buildings. In 1405, those buildings were bought up by the city and used as the town hall.”

「ここはレーマーベルクです。レーマーの名は、あの三軒の真ん中の家に由来します。1405年に、これらの建物は市当局によって買い取られ、市庁舎となったのです」

“I see.” 「なるほど」

“They were destroyed in the Second World War and then restored.”

「第二次世界大戦で見な破壊されましたが、復元されました」

1405年、この三棟と裏にあった家も合わせて市が買い取り、改装して市庁舎にした。「レーマー」の二階には皇帝の間 (Kaisersaal) がある。神聖ローマ帝国皇帝の戴冠式が済むと、ここで盛大な祝宴が催された。1356年に皇帝カール四世が『金印勅書』で定めてからは、皇帝選挙はフランクフルトで行われることになった。そして、皇帝の戴冠式も、1562年以降はフランクフルトで行われるようになった。1764年、14歳のゲーテは戴冠式を目の当たりにし、その体験を『詩と真実』で生き生きと描写している。レーマーの破風には、鷲の紋章と四体の皇帝像がついている。

レインハードが広場の中央の像を指さす。

“That’s Fountain of Justice made in 1611. The statue is the goddess of justice.”

「あれは、1611年に造られた『正義の泉』です。あの彫像は正義の女神です」

“Yes, she holds a balance. It’s the symbol of justice, isn’t it?”

「ああ、天秤を持っているね。天秤って正義の象徴なんじゃない？」

“Right. The statue faces the town hall and reminds the city’s representatives to act fair towards all citizens.”

「その通り、女神は市庁舎に向かって、市の代表者達に思い起こさせているのですよ。全ての市民に公平な行政をせよと」

“Oh, I see.”

なるほど、女神は、左手に持った天秤を市庁舎に向けて掲げ、右手には剣を持つ。天秤は正邪を測る「正義」の象徴で、剣は「力」を表す。剣なき秤は無力であり、秤なき剣は暴力に過ぎない。正義と力を合わせ持つのが法であり、市民を代表する市政府である。

私達はさらに南に向かって歩き、メイン川に出る。古めかしい鉄橋がかかっている。レンガ造りの階段を上って橋の上に出た。

“This is the pedestrian iron bridge called Eiserner Steg. It was built in 1869.”

「アイゼルナーという名の歩道専用の鉄橋です。1869年に建設されました」

へえー、明治維新の翌年にできたんだ。鉄橋にはびっくりするほどの数の鍵が付けられている。

“What are these locks?”

「この鍵、何なの？」

ギュンターが笑って説明する。

“Couples fixed them.”

「カップルが付けたんだよ」

“What for?”

「何のために？」

“They want their love to last forever.”

「自分たちの愛が永遠に続くように願うんだよ」

“How?”

「どうやって」

“To carve their names or initials on the lock and lock it then throw the key in the river.”

「錠の表面に名前かイニシャルを刻んでからロックして、そのキーを川に放り投げるんだ」

“Oh, I see.”

「なるほど」

鉄橋を渡ると、そのまま南へ歩いて、レインハードは私達をレストランに案内した。モニカが、「This is Switzerland Street.」「ここはスイス人通りだよ」と言う。

レストランは、二階より上がホテルのような古めかしい建物である。私達は一階の通路を抜けて庭のテーブル席に腰を下ろした。店の名は Apfelwein Wagner（アッフェルヴァイン・ワグナー）。Apfel はリンゴで wein がワイン、つまりリンゴ酒で、フランクフルトの名物だ。リンゴ酒は、灰色の素焼きのポットで出てくる。表面に藍色の模様の描かれているポットは、素朴な味わいがある。

“Do you want to mix it with water?”

「水で割ります？リンゴ酒は水で割ってもいいですよ」

へえー、焼酎の水割りみたいなものかな。料理は、フランクフルター・リップヒェン（Frankfurter Rippchen）。豚のあばら肉の塩漬けで、ハーブで作ったグリーンソースをかけて食べる。付け合わせはジャガイモ、とてもシンプルだ。

庭の木陰の長椅子に腰をおろし、素朴な味わいのリンゴ酒をちびりちびりやりながら、ぱさぱさした食感の豚肉を食べていると、中世ゲルマンの庶民の楽しみを追体験しているような気がしてくる。

“Do you like it?”「どう、おいしい？」と訊かれて、つつい “Yes, I like it.”「うん、うまいよ」と答えたけれど、テンションは上がらない。どちらかと言えば、私はビールともう少しこってりした肉料理の方がいいのだけれど、フランクフルトの伝統料理を味わせようというレインハードの配慮に感謝しなければならない。しかも、彼は、さりげなく勘定をすませていた。

レストランを出た私達は、鉄橋を渡ってレーマー広場へ戻ると、さらに北へ向かって歩いた。高層ビル街を抜け、二階建ての古めかしい石造建築の前に出た。彫像の付いた荘重な柱に眼が行く、屋上にも彫像が立っている。

“This is Frankfurt Stock Market.”

「フランクフルト証券取引所だよ」

正面広場には、雄牛と熊のおおきな像が向かい合う。二つの像の間にギュンターが笑顔で立ったが、大きな雄牛は巨体のギュンターを見下ろしている。レインハードが説明する。

“They are the symbolic animals of stock markets. The bull is the symbol of a high level and the bear is of a low level.”

「雄牛と熊はね、株式市場の象徴的な動物なんだ。雄牛が高値（強気）、熊は安値（弱気）」なるほど、雄牛は角を前に立て突っかかってくるような表情をしているが、熊は下を向いて戦意喪失状態だ。

私達は、証券取引所から南に向かい、カタリーナ教会の前を左に曲がって、ショッピング街のツァイル（Zeil）を歩く。モニカが私を振り返る。

“You said you wanted to buy some egg cups, didn’t you?”

「あなた、卵カップを買いたいって言ってたよね」

“Oh, you remember that.”

「ああ、覚えていてくれたんだ」

そうそう、卵カップだ。ちゃんと覚えていてくれたんだ。彼らは、私を最新のショッピングセンター「マイ・ツァイル」に連れて行ってくれた。そこで私は、三人の孫のために、愉快的顔が描かれ、手にスプーンを持った人形風の卵カップを三つ購入した。

ショッピングセンターを出た私達は、電車でフランクフルト中央駅に戻り、ホテルまで歩いて荷物を受け取った。それから、中央駅のプラットホームで別れの挨拶をした。モニカとハグし、ギュンターとハグした私は、レインハードと握手した。モニカが私の顔を覗き込んで念を押す。

“You should get off at the third station ‘The Airport Station’, Ok?”

「三番目の駅で降りるんだよ。空港駅だよ。オーケー？」

“Ok, thank you for everything.”

「わかった。いろいろお世話になりました。ありがとう」

私は電車に乗り込み、手を振った。

空港に着くと手続きをさっさと済ませ、私はゲート前の椅子に腰をおろした。そして、時間の過ぎるのを待つ。この二時間が退屈だ。

ドイツから日本までは、今でも遠いけれど、直行便ならば、たった12時間で着く。しかし、200年前のシーボルトや150年前の「遣欧使節団」や森鷗外は、何か月かかったのだろう。

シーボルトが来日したのは1823年、27歳のときだ。ゲーテが亡くなったのが1833年で翌年に『ファウスト』の第二部が発刊された。ということは、フランクフルトに生まれたゲーテとヴ

ユルツブルクに生まれたシーボルトは同時代を生きたことになる。そして、ゲーテは、大陸を征服したナポレオンに会っている。『若きヴェルテルの悩み』の愛読者であったナポレオンは、そのとき「ここに人あり」と叫んで感動を表したという逸話がある。ということは、ベートーベンとも同時代を生きたわけだ。私は、電子辞書を取り出して人物整理を試してみた。

ゲーテ (1749~1832) フランクフルト生まれ

ナポレオン (1769~1821)

ベートーベン (1770~1827) ボン生まれ

シーボルト (1796~1866) ヴュルツブルク生まれ

ゲーテはナポレオンの20年先輩だ。なるほど、だからナポレオンはゲーテに敬意を払ったのかな。いや、西洋では、年齢の差は関係ないか。ベートーベンもナポレオンの一つ後輩、つまりほぼ同年だ。皇帝に就いたナポレオンを「奴も俗物だったか」と憤ったのも仕方がないか。そして、シーボルトは、ナポレオンが皇帝に就いたとき8歳だった。シーボルトは、『若きヴェルテルの悩み』を読んだのだろうか、ベートーベンの交響曲3番を聞いたのだろうか。

デュッセルドルフで乗り継いだフライトは混んでいた。フランクフルトからデュッセルドルフまでのわずか一時間のフライトはガラガラだったのに。まあしかし、日本までの長距離の場合は満席にしなければ、航空会社も赤字だろうな。

私の座席は窓側三列の真ん中だった。しかも両隣は外国人の大男、最悪だ。これでは、身体を右にも左にも傾けられない。おまけに、私がトイレに立つときは左の男に声をかけなければならないし、右の男がトイレのときは、私と左の男の二人とも席を立って通路に出なければならない。とりあえず仲良くしておかないと、深夜をまたいで10時間を超えるフライトは苦痛そのものになるだろう。下手すれば「エコノミークラス症候群」を発症してしまう。

フライトアテンダントがまわってきて、入国審査カードを手にかける。

“Stay in Japan or just transit?”

「日本へは、滞在ですか、それとも乗り継ぎですか？」

Stay と答えて、カードを受け取った左の若者に私は声をかけた。

“Stay on business or holiday?”

「仕事で滞在、それとも休暇？」

“On holiday”

「休暇だよ」

“Where are you from? German? I stayed in Schweinfurt for a week.”

「国はどこ？ドイツ人？私はシュヴァインフルトに一週間滞在したんだ」

“My hometown is a small village near Dortmund.”

「私の故郷はドルトムントの近くの小さな村だよ」

“Dortmund. Do you know a Japanese football player Kagawa?”

「ドルトムント、日本人サッカープレイヤーの香川を知ってる？」

“Yes, we call him Sinji”

「うん、知ってるよ。みんなシンジって呼んでるよ」

そっか、シンジって岡崎慎司じゃなくて、香川もシンジか？まあ、でも若者の表情からすると、香川選手はドイツでも親しまれているようだ。

“How long is your holiday?”

「休暇はどのくらいなの？」

“Four weeks.”

「四週間だよ」

“Four weeks? Great. Where are you going in Japan?”

「えっ、四週間！すごいな。日本のどこへ行くの？」

“First, I’m going to Nagoya. .”

「まず、名古屋へ行くんだ」

(えっ？名古屋)、私は驚いた。外国人観光客は、名古屋を外す場合が多い。

"Nagoya? What brings you to Nagoya?"

「名古屋？ユーは何しに名古屋へ？」

"I’m going to see Sumo. I like it very much."

「大相撲を観るんだよ。相撲が大好きなんだ」

“Really? Do you have a ticket?”

「へえー？チケット持ってるの？」

“Yes, I have a ticket. Then I’m going to Kyoto, Osaka...and an island in the west.”

「持ってるよ。それから京都、大阪・・・西の島へも行く」

“Okinawa?”

「沖縄かな？」

“No, no, A small island. There is a famous tree that is 4000 years old.”

「違う違う。小さな島。樹齢四千年の有名な木がある」

“Ah, Yakushima.”

「ああ、屋久島だ」

“That’s it.”

「そう、それ」

大相撲観戦とか屋久島杉を観に行くとか、この若者は、テレビ番組『YOUは何しに日本へ？』のYouになる資格十分だと思う。それにしても、四週間も休暇をとって日本へとは、いったいこの男は何者だろう？

“What do you do? What kind of work do you do?”

「どんな仕事をしてるの？」

“I am a teacher. I teach biology and sports.”

「教員だよ。生物と体育を教えているんだ」

“Oh, that’s why you can take four weeks off and you’re going to Yakushima because you teach biology.”

「ああ、それで四週間も休みを取れるんだ。そして、生物の先生だから、屋久島まで行くんだね」

“Yes, it’s easy for teachers to take a long holiday. But it’s not only because of biology to go to the island.”

「うん。教員は長い休暇をとりやすいからね。だけど、屋久島へ行くのは、生物だからってことだけではないんだよ」

“Is this your first time to visit Japan?”

「日本は今回が初めてなの？」

次に、右隣の若者にも挨拶しておかなければならないだろう。

“Where are you from in Germany?”

「ドイツは、どこの出身？」

“No, it’s a connection in Germany. I’m from England.”

「いや違う、ドイツは乗り継ぎ。国はイングランドだよ」

“On holiday to Japan?”

「日本へは休暇で？」

“Yes, two weeks holiday.”

「うん、二週間」

“Where are you going in Japan?”

「日本のどこへ行くの？」

“Tokyo, Kyoto, Osaka and Hiroshima”

「東京、京都、大阪、それに広島」

ああ、こちらのルートは、まあ普通だな。最近では、広島を訪れる若い外国人観光客が増えつつあると聞いたことがある。やっぱりそうなんだ。ところで、イギリスの若者はEU離脱についてどう思っているんだろう？

“What do you think that the UK decided to leave EU?”

「英国がEU離脱を決めたことをどう思う？」

“Well ...I’m in the middle.”

「そう・・・それについては中立だよ」

なるほど、こういう問題については議論したくないみたいだ。

機内食の夕飯をすませ、ビールやワインを飲んだ後、我々三人は寝る態勢に入った。しかし、座席からはみ出しそうな大男に挟まれた私は身動きが取れない。これはダメだ、とても寝られない。やがて、左の若者は通路に身体を傾けていびきをかき始めた。右の若者は坊主頭を前の座席の背にくっつけて目をつむり、必死に耐えている。まるで修行僧のようだ。

夜中、うとうとしていると、右の若者が、私と左の若者の膝をゆすって、Excuse me but I'm going to toilet. 「すみません。トイレへ行きたいので」とすまなそうに言う。やっぱり通路側の席が一番いいな。

朝になって、明かりが灯り機内食が配られる。私は、寝られなかった者同士のイングランド人に声をかけた。

“Where are you going today?”

「今日は、どこへ行くんだい？」

“I'm going to sleep at hotel today.”

「ホテルで寝るよ」

“I'm going to sleep at home too.”

「オレも家に帰って寝るよ」



旧オペラハウス



マインタワー



アイゼルナー鉄橋



レーマー広場



アッフエルヴァイン・ワグナー



リンゴ酒

今や英語が世界共通語になっています。それは、英語を母語としない人が英語を母語とする人と話をする場合、英語で話すということだけにとどまらず、英語を母語としない者同士でも英語で会話する現実を指すのだと思います。

つまり、イギリス人とフランス人が英語で会話するだけでなく、フランス人とドイツ人が英語で会話するのです。そして、アジアの人々も欧米人と英語で会話するだけでなく、異なるアジア諸国の人々同士でも英語で会話しているのです。

日本人がイギリス人やアメリカ人と英語で会話するだけでなく、日本人がフランス人やドイツ人とも英語で話をする。それだけではありません。日本人とフィリピン人が英語で会話する。日本人と中国人も英語で会話するのです。

世界には、英語を母語として話す人々と同じくらいの数の人々が、あるいはそれ以上の数の人々が第二言語として英語を使っていると言われていています。そして、母語の異なる人々のコミュニケーションは、英語をツール（道具）として使うことによって成立しているのです。

私達日本人も、外国であれ日本国内であれ、また仕事であれ私的なつきあいであれ、外国人と英語で会話する場面は増えています。

しかし、実際に会話されているその英文が、日本語の本文の中に自然に挿入されている和書がありません。

海外旅行記や海外滞在記には、現地の人々や、そこで出会った外国人との会話が出てきます。それはふつう日本語訳で書かれています。こんな箇所を読むとき、私は、この会話は実際にはどのように表現されたのだろうかと考えることがあります。

また、外国人と話をしている、社会や文化の違いとか考え方や価値観の違いに気づかされ驚くことがあります。とくに、国家とか戦争とか、あるいは安全保障や歴史認識などの問題になると、日本人同士の議論では気づかなかった視点が見えてくることもあります。

そういう観点からすると、日本人と外国人との会話を手がかりにして、さまざまな問題を考えてみることは、私たち自身の考え方や価値観を他者の視点から検証することにもなり有意義なことだと考えます。

この場合、会話文をすべて日本語訳で記すと、リアリティーというか信憑性の点で問題が出てくるような気がします。最悪の場合、「相手は本当にそんなこと言ったの?」とか「筆者の思いこみではないの?」ということにもなりかねないと思うからです。

そんな危惧を排除するために、日本語訳の前に、英語での会話文をそのまま英文で載せたらどうでしょうか。そんな旅行記や評論あるいは随筆があってもいいのではないかと考えるのです。



## ドイツ旅行記

<http://p.booklog.jp/book/109344>

著者：内田芳邦

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bon1582/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/109344>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/109344>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ